開發抄

闕疑抄巻第一

凡此書を號する事はせん説者乃心を述る事を云て此段を
伊勢物語と号するは古注の説にも伊勢伊勢の伊勢
冊尊天乃浮橋の下をみくだしてまくだりし後
よりて男女のみちをしりてまもりけり男女乃物語を以
伊勢乃二字をよ男女といふ字乃訓をまもるかくのごとく
と云来る説も一向不用なりせんは物語にも十帖乃抄を
見て古注と云一説にまどふ紀氏のなるを又知顕抄を
三帖のことまて伊勢業平をしる頭注を小野小町をも女房
伊勢乃作者といふをいるにつ胡説なる事のこる也
今好色の人に云ふ乃おそうせん為に經信の名を
かるく譏誹せて誠に護の筆絶て

たゞうちまかせてかきつけし物語の始としくくるを用ゐ
ころ京の人々もいひつたへしに一条禅閤兼良公の愚見抄にも
是を伊勢が作りたる事はみえず二条家
の説には伊勢大輔といふ人の作りける事ありけり是は説
まちまちにして慥ならず今伊勢物語と云は当流の
説に業平の作なり伊勢物語とハ伊勢が筆を加へたる故に
昔男の書置る文を伊勢とも云ふなり

世間流布之本奥書

抑伊勢物語根源古人之説不同或日在原中将自記也
因茲不詳之趣奥之詞等
業平卿を伊勢物語にいはずして物語の名をとる事は
さもありぬべし然れども業平の作と云事あきらかなり

伊勢物語乃説古今不同なりといへども業平乃自記と云説あり
又或説に伊勢が筆を加へたるによりて伊勢物語と云文字の名ある
ハ伊勢が書たる事をいふなり卑下の心にて業平の作をもて後に伊勢
が筆を加へたるとハいひつたふる也業平の作と云説ハ其
子の心をとりて云ふ也伊勢物語の名と云ハ業平の作なりといへり
又曰伊勢が筆作なり或は生年十三幼名曰伊勢の家集文集に
或号二伊勢物語一と
云説にいへる家集の文勢によく似たりと云ふ伊勢が家集にいはく
業平の在中将の家にて女のかたへつかはしたる歌の事をかけり
又伊勢がかの家にありて物語のかきたる文どもをとりて其後に
つかはしけるを見て伊勢がかきたるとも云ふ又業平の筆の文勢にかよひたる故に伊
勢が筆作と云ふ

以此物語を在中将の日記とし或は在中将の秘密業平上自書之他人推而
而難知之以之可知其日記也
在中将の秘密と云ことを云業平上の自書と云ふ真也
て我ならずといふことを云也是ハ他人乃作る所なれどもい
ひがごとなるべし自書と云べきこと也
但業平之古風中哉哉撰集者仁和帝之間数記之
幸之義を定かにして自筆本とせず云仁和二年十二月十四日従幸
芹河一或本不書之云々多本載之不可疑
而業平の古今集をおぼろく此物へ書載るも又仁和乃芹河
芹河行幸の事を書るも仁和帝自らく間数記るに幸之
義とはかくのごとく書出る業平没後の事を書たる八自書と
いへるもいかゞとや

此等事又不審伊勢が家の集を撰ふ又并編に同く是又
見えず旧記に唐家の雑記にも不見之
或ハ乃事又不審なるとは自書といへるも是ハ業平
没後の事あり自書なりとふいふ在五中将の秘密業上に
自書と他人の書る紀事なりとなる也又伊勢が筆跡
文体よりたくみにして女のしわざなるもの有
旧記乃体を後人書たくしくみて書てかゝるものゝ
と也何とも知がたしといへり
加之此物語の名字を非在五中将を以伊勢と称す
此物語を在五が家乃記として伊勢が書たりと云ふ付也
とやしらいせ乃なりとは伊勢物語といへるやと也
愚本は在家に芹河行幸の事あり或本には不書之云々

新古今は哉とて不審也
三条西殿実隆公の御筆本不違一字も古今同之
然はいづれも伊勢物語といふ本にしたがひて書せらるま
じきなり
此説云為勅使下向伊勢にて此名を詠説又雖非始終冬哉
南家者旧記之詞にて又注の説不知所以の言を冨士山之雪或
蔵野之縄丸此詞伊勢の国の事は多く以為此物語之外人々不知
共なりて不審なる事共ありて可注
あるひ乃注にいはく伊勢へ下向の此物語あるとも云ふはおなじ
斎宮に縁ありて此物語を伊勢物語と名付たるなり此物語の袖
時に業平の思ひを書て思ふ事ありて其上に昔より名を
乃翁松尾をみてもあはぬ月やある花のとも云ふ名を詠

し又東下向のうちに冨士山の雪をみて時乃歌
其さきにこの物語の名を業平の勅使の時の業平が
の縁なる事にて其時にかくのごとき物語の名と云ふ
んとなる事を此説に不審となり伊勢が筆になる名付
るなるとも又勅使乃うちにいひて名付るとも此義かし
とや古来の作者に従いと其理をさとりて物語乃名
を改むべきにもあらぬと見るべし乃回思はぬ時とみえ
叙大切の事なりと
又此説業平勅使を後に伊勢に密通のことありて伊勢物語と名
理や伊勢の本縁や勅使の事や伊勢物語や不用之を
又此説に後人が勅使業平と云名を所にかへて
に此物語の名を業平と云ふ物語の名の縁也

行能が説や行能は世尊寺の先祖なり建礼門院右京
大夫の父なり一切経を書て此外にも能書といはれし執筆抄な
と云書一冊のみ有るを證となすべき也されどものなりされ
ど此説もあやまりなるべし不用之とぞ申されし
文永年亥暮事之者為人之人に傳失して後説は事有て所授給ひや

戸部尚書判

是までが世尊寺の一流の奥書也されどこの比世に誰
人か傳しく所持したると云ことも三条西家にも此流に
逍遙院流と号す尊円流と云三光院家も此奥書の趣を
識す事へら所惟清抜書を此儀を堅く注せし申されける
猶この世と云かかる事の外世なる事はその儀の外になし
業平　行家　紀有常　二条后　河原の左大臣

定家卿の傳まかりく勅物あまる奥書に云
天福二年正月廿日己未申刻凌桑門之盲目連日風雪
中遂此書写為授鍾愛之孫女也
同二十二日校了　此本を定家判すり
染殿の門院より逍遙院へ此物語をうつしあり逍遙院
殿自筆にて一字あやまらず今の三条西
殿まで伝はりて一字不違写し置き書写し給ふ由
に傳り下されしことも逍遙院流の由あり是
なり今の三条の家にていかなる事の写もあり
其の孫女の為に書の写し置かれし奥書にも
なり　又一本の奥書　此本を以て写し給ふ
合て多本を用ゐて校合せしかな

先代以鵜使事一為端之也出来幾代之人今案也文字
用之は押紙右ハ今之紙不同紙様ニ出候中将の用出紙様ニ候
故ニ筆飛紙ニ段々ニ書候ニ而上古之人強而出[illegible]
飛ニ墨紙ニ[illegible]紙ニ而[illegible]也

右紙尚[illegible]判

西塗三年乃初く紀を一紙に染来ろ也三条西家ハ
まさしく代々様ニ成る也故ハ中納言ニ而三条西ニ[illegible]
故ニ奥出乃也ら三條家乃院の勅物なる也後奈良
院の時[illegible]山院殿大丈夫入に[illegible]
様乃紙多井ニ万里小路家内[illegible]中納言[illegible]
後一乱乃時紙失紙おの紙余入に室町より出に[illegible]
武田信玄入道紙書是を[illegible]好[illegible]丈夫也

先を使人段々[illegible]年ニ之天正十六年仲秋
乃[illegible]の勝[illegible]より出て京都[illegible]年ニ伊勢國へ
下る也も[illegible]ハ[illegible]世の[illegible]自筆
の也今乃世ニ[illegible]大坂[illegible]乃也の[illegible]
に[illegible]人ニ[illegible]よろしくなる也[illegible]
故に[illegible]一紙の[illegible]ニせんとめし
[illegible]乃[illegible]のをさう也わりて伊勢物語の[illegible]
[illegible]乃[illegible]の也を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一説に七条后温子昭宣公女に伊勢が書くはへけるとも
いふ伊勢といふ縁ハ小野宮之伊勢ハ七条后に
さふらひける女のなりしか業平乃子にはあらす
つまる業平の自分書たるものか或ハ後人のかなを
加へて作り物語らしく書なしたるにや伊勢か貴なりさ此
源氏物語乃始に一向伊勢物語なくハ業平の
一生を書くまて肉へふる事あり又別のものもくへくいはれ
及ものあり筆意此物語にはちけらく通く縁あり大概ハ
古今伊勢物語後撰拾遺を学のふへきよしわか古今の歌に
伊勢物語なとのさまく又後撰とわかれ是も少しも其所々
るやうなるハ二条家三代集伊勢物語にて此伊勢物語を
始に読すやとも源氏も座右に書よまかる事と此物語を

と座右に飾る物語を傍業乃説に座右実ハひらきん
とものゆへは流説のくくるなるものとも是実ハ座右と
座にて見る事も折々なるのよしとも伊勢物語乃始めなれ
業平の一級の事なりとして所々伊勢物語乃日がなを
あらき事とへたる所々此物語乃事ひなきとも万葉乃ある
なとをものの世なるのよりとも今より下向なれ
も是へる事そる今いふるりもきれすあれハ古
きたるをとそれへい歯ろるのも例な紙あらたれ給まよ
伝聴乃事を宴ある時に筆を蔵さとひとく今あて
く作りたる積よりひとましもの毛詩三百篇乃詩を
とうひくまへてを書つるわりを今乃物語にあきとする
と誦せる事にをして非を今やさ業平東国下向の

るよし見える紀乃よし云給へるまゝそて古今餘材抄根源
にゆづるべし今は見えぬよしなれど凡そ此物語を
読むに此ところ一言にまとむべくもあらず此集見抄
日記狩の中将の二条の后をおかしたる事おほきに
せしかば後撰集にもやさしき事多く陸奥の八十島にまかりて
小野小町が髑髏の秋風の吹くにつけてもあなめあなめと
いひける事をきゝていふに此物語の十四の巻にのせ
られたる返答の説、伝説を拾ひてよ

むかし男

業平の事なり大古をむかしと云又古をむかしと云事遠く経にける
を云や又ふるきものゝむかしとはいかにもむかしは
なる今の事をもむかしと云へし業平を後の御

抜けるを此物語を書かれたるは業平をむかし男と云へし
此段の源氏物語の例にも古書の序にも古は伏犠氏の
王天下也とも云はむかしと云へるにとゞめたり深く
思ふべし此物語のはじめより此物語をむかしと云
とするはむかしと問んや此物語をむかしと打出すは云
ふと後にむかしと云はむかしと文勢やむかし男
と業平を云ふ八右近の将たりし不言むかしといふ事を
て男とよむむかし男とのみ業平のみや
うたがふべし
餘宮の叙爵のうちに左近の将になりし元服の
なかに源氏の如淳臣賛の初冠と記せり
せらるゝ人のことに今も元服ある人の出身の始

我乃みつからや業平の一致乃をみなくらよ元服乃たし
めなるを游宴乃名のみくれとを以物語よのせられたるを
てをのみにしゆるをさへとくいふなかく出えてし
あり乃家業平乃里よ志るのしてしうゆよゐるを
うかうありしくありの家業平の里よりゐゐるとて
きこくちかるあゐあしはなをうつりるゝ給のゐゐやられ
家のみ段の内母くもあるへしあり乃家よ平城天皇
もれてしませし頃の業平なる平城の御孫阿保親王の
御子のくありそ乃家をそれをちらし人なまでも御名な
里よ志るのしるみ紀有のみ常の紫式部乃家ハ此家へ入
さまつりくみるの我業平をれ此ハ業平の四郎をよ紀
紀をわるへしきまて紀有く物しわそぶなゐまもうよいふ

名ある紀有常よしとおもひてちらされし頃ゐをを
その里よいとるる海女ひいてろ女えうかうともかんなり
なまめくらなく宮嬪とうきるまうひくて生幽玄なる馴染あ
あさうひくて姿秋なるを秋の時よち海りきたその女は紀
あくほめてる詞やちうゝるゝ兄弟たり同腹と云清楠の
自筆乃女よ母たちかくしもちさ人さうるゝやたつ紀乃紀有
ちうの女兄弟をといふ不用をよこ人の家と乃數よ本へ
しられもなり紀をかきれてまとをわらいて用る紀あや
この男ハひとりかんくなをゐのほえさせ女里よいとえしぬ
くてみくなまえてんらの海とひとよなり
といひつく海氏なすくよりゐてくたる紫式部たりるを日本紀よりせさ
ふかく紫式部たり源氏乃見けりのそ紀有のく世家

其のそくゐとて不二出雲折紙すとよばれ乃小刀を
ふんなるべしとそえて起くてたゞよろし紙折のはりく為る
為り乃んを云女すとのをそれいふさとをとりくる化と
いふ世義よるく叶へ見りてはすべての中まてる所やゐるゐ
こやしや風流なる女乃わるさ似合さる様よ云也女さは
ちとも云様なるべしんけすとひよそらちやんとらきさ
ふ様すりしゐすべよ様乃人恋むとむをなすひの言葉
ぬるすゐをとんちぬぐふすると深きよ其糸乃結すて女
親乃らへを見えそあたらんてよ従り
於ことのこゝろをとゐあるをそ乃をそをきゐもとく方をかさく
為つを男また乃ふきりのうらさぬを存んくさくりさゐ
勝中乃すまをはらすもあへとちるよよるをすを申くやる

里みらんさし乃切なる不紙見せんゐとるさきぬ乃もそ
とこるをさく方を事く為りよろわしを花すて乃枝をおき
かすきまをらうきぬ乃もそをを切くきれよ方をむをとひ
はきさく為るなるべし志のふきとのうらきぬとらをとい精
折紙のよ摺精紙を貴ぶとふなるをむり奥羽の国村
乃久乃趣なるもそく然もるもをなほくなりしるを也を精紙
みくこれそゐるあゐ又遍照るの乃ことの為りすよるのもみふ
きるもそをしるしら云傍ゐらし又精紙乃文字をあとし大井川
乃紙無其の時中網を画むをもくをそ精紙よむりつし紙さく縁
用とらく又紙系あくるもをら来家として延具をはく
さきをとくしなるを
其自然乃まるむするこれ乃もるとゐ志の子乃られさらをきまほ

女と紫(むらさき)によりそへたまひし是を序(じよ)の言(こと)のはのうちにまいらせか
をさまりし事をかいなんためにまた日蝕の蕣(あさ)紫のもとを
ゆかしとおぼしめす事はかの此世の小みちくちらかれまいらせ
みなもひのうちたちまちてまいらせなり
また日蝕かはのもとの花の素風に志の心もちらされてそめ
とりんなひはきゝいひ庭の家のそへてなりしろ女子をそ
やまひさん
とまんへくよりそへ庭にとなりのよひはそてさんなる乃かく
よりまたの女らのさやうなことを云おひつきくやうなれは
庭くよりうらくわたもて稿(かう)のうちのまいらせ業平のあそん
まう人の紗をもらく庭のそへいふなりしをはなくなりしろなるまき
やまひさん蟷螂(とうろう)乃うちをこゝのあそみよ聞んはまるゝのま

ぬるのうまいらせはいはくたなし鏡台(けしやうだい)とはまへかへて蒙(?)なの
かはよきく露乃あくまいらせてきのひくまぬなくさし神(?)か修行
げ家(か)臘(らう)楽のうちやまいらせ蝶乃総菩(ぼさつ)なかはかもてはせか藻(も)も荒(ちやう)を
たまへなくはいさは此時おひ縁(えん)志されは済(さい)てうかとのちりまゐら人
あまいせてあらくまいらせて露よぬまいらせもそてぬといふへんするを
はさ蝶(てふ)乃いんはは家(か)男のくまいらせておひなまゝぬをあらくれ
てとまへくそまいらせあすよ人志まいらせ神とぬすくまれいそうんを
知人へうろを継(つぎ)を綴り
又ちのく乃思ふすらちまいらせ誰(たれ)ゆへよろこひてものまいれなりし時お
は女あくも蟷螂(とうろう)のおそく乃ありあかしはつふりあらんとてゆく家
歌あまいせと面向(めんかう)来(く)あるまて児(ちご)女子も呼よ踊(をど)しくりまれけれ
人思ひ日よわかしなりたる人なりてとくまいらせ家よ見てまいらせそめ

ましてまくもおしきさくらのちりぬるはさそふ風をもうらみぬべき
と云心なりさて此歌を今世の俗事に用ゐて不和を離隔せし
むるの意とすなはちいふなり又此あきらかなる其の歌は
母とおもふあはれと見し二の句にくみたる歌にて
あらはれなくふかくまことにみゆるに抱くと云心なり
世にいふところの今の世の人にいふなり
とはいふ事のほかなきにして今一くらいはやき刃をひきおれ
と云歌のはからるる此の言の葉を用ゐてもいふやうなる
速なり卒にいはれずして急なり卒にして事をいはずいふや
うにはきかれんやは此の刃をひきかへしてにくみて云てゆう
なんにさかしまなるに云風塵日本紀風流情なる登
うの事なりと八雲御抄に精しく精やあるに同事といふなり

さて世にいふはなしなり源氏物語の葉末にも山家の抱
の言ひ源氏の葉は人ひとりの人々の花にまだ桜
よりもあしたの流にして色にかくめでたし刃やひかり
嫌といふ是おもてにかくれてもらひ刃やひかりやと云
詞さへいかにひかりそなりていふなるをはかりて見るに
○河原左大臣源融寛平七年八月廿五日薨七十
三歳にて中将になり嵯峨天皇の皇子なり
嵯峨天皇の皇子にて源の姓を賜ひ臣下となりてそのよ
しをまたかわしと云心なりたてその比ひかりの末の世の
ことと見えたるさかりなりや
むかしは此をさしてもかくしての京なれはさ京の人の歌中にも
あるさまとなりて世の京にかかるなり

奈良の京をば南京へうつされし時に北の京をひがしの
坂よ東京をひがしまちに西よ東京よりたかく人の家居を
立らぬまじる下桓武天皇延暦三年十一月山城国乙訓郡
長岡よ都をひきうつされしに同十三年には平安
城にうつされしより此女帝とともに二条の后と在原の
不開二条后の流れぞやかしまかきせんにおほくのな
まことをさしくらまをさせんをいつまでも八つ極よいつの
摂政の上つかたおほくなりしなにさればもあるまじく摂籙の時
よりこ人にあまたと云におほくなる下しかるに人とも云て
あるに人をあまたとおほくてよるに志まぬよなるの数八つる
官人の数や妻人又おほく在きのしこ流れゆりの大臣志よ公
さる人をと又を極くありかたへ極出たる数と也下

その女よ人母は中宮まで多き
世の人々の宮をなくよむべき事なり其家自筆より
そなわる世人とあるを後宇多院乃流弾正仁
とやせしるもよ君人その文字を入る書なりまるなり
又其人とよみて在世乃宮をまゐる家に下し又御母を
西人をくやることし書も後嵯峨院乃流弾正なまなる
をし後宇多院乃流のまゐらを後代乃うちまれも坂
自筆の女よ人とある人の数の勾編し在人の上さま
家とる俗性乃るし
まへくちよりてんまん海さられをきる
よ乃人のはさきまつりと種性より言縁るいるいとか
めくかちよりまそんまん海さるさるとてせにまとめ

まこと人となりて
ひとりのこをおもきらきしうまをそのまめおとこう
ち抱かくしひとく毎りまくいつくなりけるん
むかし人さまたもおやみくよ心あるくはなるひとかのめ男
お抱くてひくまめなる実の字を好文ハ実人よハまちりなく
まさ業平ハ自辞なきハくせうすや世にもとれなる人
なれしまめ人もんをうく心理りといふなり
附る尾よひの清い花ち成うをふるよ庭りなれ
そ低みつ壮成と春雨もむかむといふ筑わまた元より
いるみか緒なりいやひとこのみの神さひ天雲のあなた
ひく元むとう露をふるいく庭さしの来く妹よ涙ぬう
むうをふる附なりふとさるく小

たきもせずもせく秋をわくてハ春乃ものとてくなりめくらん
ひるの花の羽をすくんよりちくん秋よしなり秋ハたきもせ
もねきをぬ庭うみくわくひるなる春乃ものとそてなりめ
くらしきけといふなうも成るくなるむるといふ須よんと見たる
ありまるとき之本秋でも恋乃子てのまん附るの光背をたまれ
てたきもせとの子のよんをすくめとなしへるまくや
京今こひのこしたもみ尾よひの清いたち侍ち思ひく
人よ抱ひくく堤よ成てそるよるてゆるりくるとき
むしたとこれくるときをさらしるふ女乃りよふひし来るれ
いふそのみやなるとく
盆起とくもりなりひそうくふなるを二条后とわるハさと
ら業平ハ秦好色なるきハなるへしく業平恋んにるは

家隆卿人のまへ八二条の后へも志てしくこゝろまやかな
と承りまうかなうなる人ゝ細しや入ぬのまへてら程乃袖を
をはらすやひし君も海士の塵尾菜とふうきこせう
く蹴母ちの乃ゝこうきとせしなり
思ひわく八重葎の宿に錦ていかんひし君抱よ八袖あてしきも
老くは山の老かんか木をなりみ人ゝゐわく八重葎乃宿に秋比錦
ぬへし八重物よ袖をしく君乃木とよめりまくん方家ふよ
到る家ふ家を経せん八重葎を人ゝゐう宿をいたとしまを
海ちとこふ乃ん好ゆ乾と以てを葎生くわきてう宿
よ袖をそらしきくめるとも名んぬなうとひ行く人もの
うてあをも甲斐あしとゑんやまんふ義塚よ経せをは
玉乃巻も八重葎をへらん宿にうゝうしそ錦あるとゑ宿

乃んてきしく葎乃宿よいひ乃あき屋うとこゝて見ゆる人ゝ
をいひわくふ其しこゝてうらんわまりて詞のゝゝぬき雅経
ての宿よむくて乃宿よなりひ乃る紀母しく
多ゝてくやさなりひ行つきとをいくせん葎の宿老秋比夕
くまき新古今秋の部よまて思ひあてまくとをいくせん氏
家のれなきしたへかゝてしとい為り

新千載

思ひわきし八條よ袖を打ふへら葎乃宿よ経きとうり
二条乃后のまことあるて母を浦うかき経てくみ今う
れたしまことの時乃ゝのなうき
物語乃絶えんふかを訓釈をしてりて無業平をいうとさく
とゝ入まておもし海を時とうゝまく人実よあうしふくしを
し海とをるゝ人し五倫の葎姫よ孝らゝ十七条の時字

つゐに入内ありし後まであるゝ人といへるもあさましきことなるべし

むかしひんがしの五条に大后の宮おはしましける

にしのたいにすむ人ありけり

ひんがしの五条とは五条なり冬嗣のおとゞの家の五条の后

なり閑院左大臣冬嗣公の女文徳天皇の御母后清和の祖母后

なりにしのたいにすむ人とは五条の后の西の対にいまそかり

西の対なりし二条の后をさしていふ二条の后

五条后の御兄長良卿の女也

冬嗣公 閑院左大臣 贈太政大臣

長良卿 中納言贈太政大臣

昭宣公 基経

温子 寛平七条后 伊勢仮名宇多后

高子 二条の后

忠仁公 良房

良相公 右大臣

明子 染殿后又五条后云 文徳后清和御母

順子 五条后 仁明后文徳御母

それをほいにはあらでこゝろざし深かりける人ゆきとぶらひ

けるをむ月の十日ばかりのほどにほかにかくれにけり

かいるにそのあとゝいふも本はあらでといふ心なり

とらへ給ひてかくせるといへりかくれにけりとは出る

又むかしの所にあらでといふ心なりしのびて

只あひそめたることもなくて右勝まさきにかくしけるや

秋の田の人めをしのびてひさしくなりぬれば

むかし人ゆきとぶらひけるをつれなくしてせんの

在業平乃朝臣なりむ月とは睦月親月などか

きさらぎ正月のことなりかくれにけりとは人のかよひぢをとゞむる

つよく女なりけるにやありけん

ありどころはきゝけれど人のいきかよふべき所にもあらざりけれ

るなりしとなりひらのあそんもうらみ
此うちへ母の人の難きこゝにかけ母の移りまてもうらみやは志ま見給ひける
んよきしを雅しと霞しと思ひけるあそんのこゝろとへ思ひの
いやさしきんで詠と云詞のなく猶ををへつるさんまつなりひくて
月日の梅つきるんいすくさまこえも又の年の正月に次の詞に
又の年去し月に梅乃花さかりにあそびとこひしくいきそてちゝく
見ぬくみてしそて母の御へくもわれはちちなのさくわれう
我つゝらし変をよ梅乃繡くかくそ寄つくこそと思ひ出くよある
あそひを思ひく去年の伏法すまく其對すて春つもし擲をとれ
こひおせるなりちそてみてて見てなを屋さめ寝こよなしと
かるもとて御し殿なるつるを去年に似ねやさま見ちと
てゝぬく見んなを身の字もよ去人まきれあそつる梅花八

春なる旅やあはれなりち母のまゝかと詠ましむ元人の心まち
また主人るをきまて春なる梅よ覚え待つまや業平の心に
如此たる一月乃なふくやすくと云るハ名殘をたりふさ徳し
月やあらぬ春や昔のはるならぬ我身ひとつはもとの身にして
於業平の家に云後乃考の春季の絶こし月やあらぬと月をと
がめく月なこその月まてハ花の去るる春乃去年ゝ母くえ
るなりとどがめて又母去年よ似さるもなけふと志さる事
ぞと云へと下の句を様闇ろ我身ひとつハ春乃なつかしくゐ
とはそなせるがるまハ此ふのよせいろつゝ我もとの身
まくあるなりとなし人を我身ハもとの身母くゑてよとろ
へ定家卿説に我身ひとつもとと云ハの字を捨く見よと也
後成つきのおもひといへるよハ月やあらぬ詠はまあ

雫にごりたる江なとゝ云の名なりと云り 摂津 桜も桜宮
ともし乃宮なごりおほき人の心まゐりたると人さいさん
ときこえしものゝくひなり
とよみし秋乃りのくとめくるに影くへりにきり
とゝみえくいはく身くもよむくと読し秋乃方忠
くと此ふにわきもとゝめ秋もそに此事ハ川をみるべき
そともく海の心するべしもき人なにをふとこそふに切や
むかし男みな女をひんかしの五条わたりに忍びていにける
つきとみえそ我かるきにえ門よりもえいらで其わたりに人の心ざし深
きかる川のひちの心あさくあるまじかりけり
流のひちを津のちと読し流のんぢてかおきんかくあむへ
しと此哥の流のちと云を婦家の五条わたりにいへる

同じき二条乃后ただうどにておはしける時の義也みそかにかよふ道路志
ふかきや津の道の流のうへ見え垣門よりもえいらでつくわゐねた
をするもえくかるかくも此摘頭の両方をきるまでも立
より摘頭の頭をとゞめくそくとききにけり流今ハ流
のちを垣のくづれよりもとあり是又貴之が哥特すら絶
流と是を摘頭になれ共ありし其人乃ゆきかよふ流のちの路
やうひかるになるを
人をしくもわかれしあひみるまでハわすれじまて川なくてき
あひ路に秋とも人をまたくゆきもせざれいのきとたえわ
て海りあかりさてよめる
あふしかさなれ逢事ハもと云わのく越べし伊勢の海のわと
ぞぶ浦に綱もたひかきあまさしわるるまでに忍けり此哥の此摘

猶世くに見るになりんひとしとわそをせりみにせ行ぬ
るすゑたるべしとなりわかし史待らバ深養の后なり
京参 人のまぬ家々のひち乃寝る所ひくにとふらるをねるらん
京まもし給乃義をなをきまつよにくんをはきく吟味せよ
もん世待よく絶くいつそおもつく哀する事なりけるも
猶すくん哉をぬかりしせ
とまありたまきしいてくんやとなるをわかしゆゑして在り
二条乃后に忍びくさしいりなる紋せの中しもみくるれハせり
とこちのまましせ給ひたるらしそ
深養乃后忠仁公と在中くた業平と懐胎乃ことなし二条
の后と云より下は摂政乃兆忠の問をせんしなちハおとゝいし
堀河大臣基経公大納言をかさねしを乃ちのなるべし

むかしおとこありけり女のえうまじかりけるを年をへてよばひ
わたりけるをからうじてぬすみ出ていとくらきに来けり
此段ハ堀河大臣基経いまだしかりけるなり二条
乃后のまだなりしかうぶりぬすみ出て面白しく女を
ぬすみ出て行けり
あくた川といふ河をゐていきければ草の上にをきたりける
露をかれはなにぞとなんおとこにとひける
あくた河摂津の国ハ摂中の芥といふ河なりとも云説も
あまたあれど是も及ばずして芥川をあくたく下りて行を
御師匠云にいりひさしく行し草の上にをさるは
露とはいかにみえつるとも見えぬなるときハ露とは
なにと問ひしなるらん

行く紀に能く定めも文に書きしは此あたりの所を志して神さへ
といふ事あり雨もいとゞふりたるはおどろ〳〵しき女を
もおくにおもしろきよし男ゆゑにやなくゐをおひくとくしき所より
行く末おおかくハ行く紀の古里をしのぶ心ぞ鬼ある所下の詞出よこ
捨あらくするくくハ雅の道をやくなり紀有常の一所なり
なりし男のやかくゐをおひて迎来目なる紫にて常なし
く雷鳴陣に備もなし業平さてをありや一條法親王に此
業平迎来目なるハとなし此物の矢を負てさらなり
背振親王に思ひつめしさる所に死にけること
ふや物を明なんと思ひしかどもなりけるに鬼もやひとくちに
くひてたるなりとハいひたるも神なる心さえ紀のえさ
くはしきなり

此段といふ所はありしかは人をぬすみて行くは物をかく
しまりしところ思ふ心なるに神なりてこそのちさ侮
こ行なるまハ物をもやく明よりとおりたるへしあるなりと
いひけれと女の行といふる歌に鬼もや一口にくひてけるにと
ところ人の情ありてゆきて女のある所誤しけるかはく母あし
御うく物を明行に見えしハぬかくおもしろし見せもせきを
しくなきたりひとるし
あしもり蹉跎文選にささとしく引用ゆるふとある太佐の歌に
蹉跎ると云一説に浦ゐ添あへ波あるし此国の名一説にあらはせ
思ふると云蹉跎るの住倡他行せしみこの丈に師迎ふ去
さひかくれしたりぞと中将と云此段は行きし女見えされハ男の
袖くひたるへし一条二条あたりよりえさる神なり

こそふかなにそしたひ人のとの時雨とおもふへく濡るゝよしものを
草のうへさ紅にゝりけるに紅葉をうつしハ何そ此句外と紅起
るとを紅葉ハさらく見つもしる事今なり人もと紅梅なり白菊の外
よくと何事も時雨とおもふへく濡るゝもてんとるのなとと言りみとも
まし時雨とちりる紅梅そと紅葉く濡るゝよしるハめてたの物も
ひろくまもし赤梅なと紅梅まさりしとと紅字を書したるとうち
秋風の吹よりもゆくに白菊ハ紅のあるぬる波のうへまにかり
あるて都の野の河辺の蛍かこゝ歌をむねさの紅葉みなく火の
めてたくへきさるや是ハ白玉とひとくそまいそくうきて河
をいゝへもいふ鬼もありいふ白玉の乃か新古今にハ紅葉備
の非にいひり実に鬼もくえさまも紅備にも見てまさにか
鬼くひくる紅梅ありくへさうやうとさふか文字の一色とそりま

ぬれもの事り出家時雨歌ありてみまもるか何とやみりと云にか
と云ある事白玉をぬるゝに云の柳のい類なる人し
是ハ二条の后のいとこ清和染殿の流まもに濡るゝり事なるに
てめ紅葉紅ろりるをかたちれ心とめくハぬくおもてくるまハぬれさそ
おひくいそてぬりきるを注せうと源河の在りて太郎忠経の大
納言まさて下様う女く見へ来り給ふにいゝうみく今からそさ
ことゆきくとて紀へく紀母しおもくなりるまをとくに母とハ云る
ひとなりまさいとまさして后のたまたまにて成りし時とや
是ハ後在乃調や二条の后染殿にと染殿の后にて清かりまし
紀ふ由うなしくかゝり海も禅なり二条の后勧めのあこ子
元慶元年正月后の月立ち中宮文徳天皇の女御染殿
后は堀河太政大臣二条后の兄やうち郎忠経昭宣公

乃兄之下﨟とゐ云ふ者乃時之国経ゑ昭宣公乃兄こそ
まてハ六位とかや昭宣公ハ我子のまゝ忠仁公の御猶子ゟ
まてしさ出世なるを

むかしをとこありけり京にありわひてあつまにいきけるに
伊勢尾張のあはひの海つらをゆくに浪のいとしろくたつを見て

業平の左遷せられて流されたるにハあらす時の人にも紛さ
れ背世業乃流罪乃時の事也当流説東国下向の分
やむ左遷様々乃説ハ不用之定家卿の奥書可見敷詞究之
業平こゝに此歌わんなり山海やさゝ藤襟可思推之勅
撰乃詞るとゝもを見るへし

いとゝしくすきゆくかたの恋しきにうらやましくもかへる浪かな

太乃詞のうへわり哥をまゝて万物のうみ　かゝる人さ時ふ

立波乃よせかへるを見てまちくらすへし猶吟味也
此歌雲葉哀傷時や後撰に入る浪乃打よせくるみちのく
まへをみてかへりたく思ひてよめる歌なるへしと思召
て行に浪かへるを見てまゐる後撰には背宣理
乃歴さく出ゆる方をかへりみてたゝ見送る不ト郷
杭にやまゐりけるとなく

そのうちありけるに

むかしおとこありけり京やすみうかりけんあつまの方にゆきてすみ
所もとむとて友とする人ひとりふたりしてゆきけり
信濃の国あさまのたけにけふりのたつを見て
在五とゝもひとる人まゝハ行久なくもをちこちなる人を見ひそかに
ありとてまくおり給し

しふのするわざ海のくさきよもち蝶なちあち人かなしやいとうめぬ
葉草の秋中縒し葉中に虫を淺茅乃くさきの蝶乃両羽を
見るく移よのゝ行列くらふ山の氣氣をも始く見て両
羽さをそめんよ楽しくまを幽人も見んとめぬらすハわらし
ともしみまさを人も見ようむへきをせまゝたる男よあらめて
さうそ那りりさを相楽しそのふあり
せうしおとこえうりを男女をえらる紀播よおなひ那し
て京よりくわし海岸の方よまむへき國りとめみとく行
ろうきむもちなとさる人ひとらふうまきしくいゑらたし
きる人もあすくて海とひいきるを
葉草乃いやし葉男女くもう蓑れを夜などを淺く家
男もむ夜の閨よみ人き物よわら派となりひてさとえ女子

閨らいへ夷男女くもなりとみひてくわしうるも夜とさとなる
人ひとらふらりて上乃服よ夜とさる人独ふうりといふ爾る
ようもてとらとるとありなきまる人もあくて葉草の
見那らも夜と千する人を乃ゑを本哉よ志らくうなり
冬河の閨居は又としいふ下本よもらぬうくをハなりとひひろるハ
あおふ河乃くすくあきもはしなを八内うをせなよおらくなん
やはなしとひひろなる
あおふ河あやくもてなまほ八あおふ乃縦横よ行さ云橋を八まる
せるなり八母を路へ乃よあおふ河縦横なりよわかるゝ
あるく人のきるるを云なる人し物の数なくし八を派母しく
いふをいふまゝ八かく云るなへし打きてしも紀ふたる八稿
のくまくよ称り字ハあえせし

うゐきものゝ色乃木のゝなをよおちぬるくかまへのひとひとひらその
さくらよりはなちつゝおりしろく咲ちるれをみんとくわるゝ人乃
いとくるさ流れて[illegible]なかりしをくれのこゝろにさくへく桜乃心を
よめとひひろまをたよみたる

此哥桜中乃秋をとりくおりに庭し木乃うきをよおりぬ
て雲ものゝちら下のくとこ云説ニて桜のうの[illegible]まへハちりく
し[illegible]花ニ成ぬるる[illegible]下しかまへ紙千紙又綱ニ出なり
桜乃中途の含をしつゝのやうなるるのゝ[illegible]に春遊天
空の浮とし花をよわまへハふかむる紙とをも桃桜ふし わまへ

古今
くもゐにて流れ無し流水のわまへハちるくとなる桜をしなを思ふ
椎乃もとみりける
こゝろしたにまへくらく皆紙乃縁し出くるの[illegible]ふくらく

左[illegible]奇句多しとく心ゑる趣し光ある紀流れくとこ云初句よ
なく絶よりくとよまのく[illegible]けたるふとも太くの桜なり花
しるへき[illegible]ものいちんや思ふ人を[illegible]り歌し面白く歌を出なる事
なまきて一しかと出しきとなり
やとあらはまへてよふ人のまへ紙乃ゝへのよなるくれとしく清
よひよろり
派おもしてはてひよろり蕪派を[illegible]やかとあるなれ
ちと紙鴻乃わかよるり
松をりくくときあかりの香よいろぬを津乃山よいろくしあい
らんとさらなるをいとくてつ浦を紙出流ることくなと出ぬるり
紙へかゝくるとく残する女をとある[illegible]も格の[illegible]よ
さ[illegible]を一派よ[illegible]の[illegible]せをわま[illegible]もの只卷河をもゝて[illegible]源河

よめるうたも中にも業平の歌は言葉縦横にかけて詞のとしも
その文字をもつて出たちぬる者はとかく讒ハ辞義
まり五月の末つ方の猶ならへしき珍説も幸家を
よみせられたる不思議ともなりき
さもありなむとかくあらねといひかくしもよいひとゝもれ
見て今よりの後まで人々しくはもとよりさく今の代ゝの後
さもあらぬ非をのみし古語よりて遍照なとと云り業平朝臣
既にあらはれたることしくはしるしをかきあらはしたる
いかくちとさるもの詞やうらやましきにおもふといへるを
新古今
さるよし山の出るとかくいひけるにもいへるなりとも
歌をいひぬといひ出る上句をとりて人の心を見る
[illegible]

といひけめるは不面白くなり俊成なとは山吹をかうしはせら
ましやさしきなるを
富士乃山を見れば五月のつごもりに雪いとしろう降れり
時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪のふるらん
山乃名を富士と云そこて時しらぬ山を富士乃嶺とよめり
ここは五月はてて六月になる比に雪のふるとはいひけり
富士乃嶺に雪のふるらんと云りかのこまだらとはむらむらと
ふる雪やさし山乃勢なるを思ひしくいふことさきれ乃あさ
まし山なれはしんや
その山はここにたとへは比叡の山をはたちはかりかさねあけたらん
らんほとしてなりはしほじりのやうになんありける
[illegible]塩尻と云は塩竈の物なり山のことくしたる物也

之好生悪殺を儒仏ともに説て人命の重きを為の道
孔子や不可侵を申さんとてもなれ誰か二鶏門人を
不知と思ふにも鶏に劣れり
山のうさぎ狐のたぐひの山をわけいりてそれなく
ともしらさる猪に二千ちから云り伊勢が筆にも
さのみ之家の鶏犬を見ても人の如く成給ふ是ぞ
仏説にも此殺の不仁を云へる禽獣の類も山はしく成にまさり
ちのも衆生の人の命は此殺孔子や孟子の聞ん
ぬるとくまる何か難き二鶏門人を悲み不知と思こそ
猟に猪鹿をしてたゞの事かこの見るをわき
ちらり山の奥まで足を以鹿と云此猪鹿の子らひ
ことに好生悪殺を此説を仏国も是まで云ふ事は也

是は釈氏の説をもつて言ふぬとくなく魚とも云り此殺
其人の一念を発すや殺生の罪を
殺すまじくてもむかしの人は魚の中に入て其
教を聞ては其身をもたすけて後の事をも仏いふもの也
なくなひ宿世も尽きてかくのことくのまとひのたねに
仏法相続を説てる流転の種と云の外に不合の殺
の利もさりつ下総や上野の流れ家の殺生の事
とも濁くして見流ての時をさし此ゆる猪にも殺
大きなる河を出るに面白き事の猪の種の家
すまし所ちまかくすまさるもの殺種にて秋ハ日くれ
く狩をも割犬をたて狩ハ狩くまくさらんいかなる人
ふさりとなひも一八月の人をとり一所よめりるく

ちよくとよみよろこぶなどまたひとつ格の事あり
まてしきりきやはんの詞をうたぬしいふよ家（のり）くまたいふ
んともなかれとも今の事をひしくて京よりも今の紀伊しを
あらはさるかたりもちの義るあらんしともとは紀伊きさ
乃はなさきたりのうへよりそひきて魚（うを）をとらふ
きらくもまよりかのとをひさうよりてちる（あり）かなり
ちらく家（いへ）正雅（まさ）をいそくさ海猿（つまえ）乃の雅なら家にて今の
得（えび）しくなふて乃蒲（つく）して都の家にて京よりしよ人気（しゐ）みかなよ人な
とえへし鴫（しぎ）の大夫さ鴫乃殿なり母くらりより大さかり
ちるとふなら背中（せなか）よむりは黒腹（くろはら）を胸（むね）に鴫の程也く
大かる事といひて鴫乃せいふんならふよく八形し
京よ夜月て〻ぬる事のまたとみふ人のもとて浪（なみ）しちまよ（り）りかくてひとらまし

たちよきたんこやさあるといふなきまて
古今
なかしなくいそしらんなやさある家のかへともわちやまそやと
いなるせともへ（ふ）ん詞（ことば）をしころまへ家にて乃のなかし一人をかんなり
くなよへつをましらはとうしたいくれかしなかもりちゆかるは歌の
るけを殿へし家の上人らんをかなくしてもゆかれし所なり
背中（せなか）人よむさしともなり（るな）乃中をよ大家なり滝のとと云
よらくふ人物得（とひ）しそくと云れつちしも須賀るの家とを
産しなるとのふかしをへよこ歩（あゆ）くこ乃とひしれ人得へ
しこや　あきなりはりより乃滝ある乃おとなかさめつな
くるくやくとらまりそ
しらめりる上八らさへそうらしへなれよる
給ら乃侍人（だうじん）の盛（かん）な衆（くわ）に〻をかさら八挙世（こぞりよ）すしとらがくよく船

かの人丸と云ふ名は山辺に叶ひてをもかくありきてかの義を
むかし男むさしの国にくだりてハわりさなさんとおもふに女
をよめひろまちくるとも人に合せんといひきゝせしてなんかく
みる人は心ゆきうらみちくハなを人をよくせなん叶ひてけらなん
さくなんかくする人にかはひろふこの山ひてよ見よ後く
かくせありてもむかしなん平の後の歌にもの里なりな
山姫これすくしよひそなきくせまうくなりて八雲し
いひ女ともに義之又ハ山女をとて人に合せんとおもえて業
平女ともかくもかくのあそ勝のあそ字としのまに
まんするの様の人にはせんとせの在のうし又ハ惠人従姓
の名ゑさして世なき人平今の義ありなかなん叢
原ならぬ源平藤橘の姓の内すらも藤氏ハ業姓さ

て氏をもくひく家むらあとを書母さ後の人にハあかれ後ま
ちさし合をわくかくの業平みてかへり又は朝臣の
人のたくさんむなかのよきを菅源氏の兼がすゝを在の
孫と云ふ在になるの人業平
又りのにはの人はむかしの事もひくうるに名のなし又そのやうに鳴かん
みかの里大和武蔵の那須云平母の子の女ののむかのうき
国司やひくする一門によくもんも下又永の家とせよむる
日本永宣云ふ名円のいる所ならと鳴なりと
それ所にて人に心の事とそ
むくねめし
家方のよる事となるなかの人の心ゑ哉の [illegible]
我朝にまりかに毎のそれ時の恵切をいつる也

にほせらるゝをもちゐる事よくしたまふゆゑ給ふにまさるかたらさ
まして狂言綺語の事もしらせんのみならずしてなかなかおほかたは
かくこそのけしきなり
これ此ものの名にあるものも取りなしものになんなるまじく名を
と詠ん長恨歌乃筆法にて人の國の事をも此國のことくになし
其の上やまとこゝろを見て作者乃用や此國のことく八用
格ある文を学ぶべしとや
ゆへに物語の中に世の人の性をなほさしめんとの心ちらし
ひとそせらる
志ある人雅に雲井に見ぬもろこしの月のあるかなく
格式にも人をも法なる業平乃事と
またかの伊勢物語の事をもさとくへしらるゝ事も多し[illegible]よ

たぬるく様の院源氏物語に出るみの人乃むさめよ
志のひくきもいひ給ふる法もとしきて出しなし女
乃ありよいひはしたる[illegible]なにとかくはよ事は
教へなきを詞書に物乃てりとる人のむさめ世の業平の
事を家に以合まして送らるとわれてた法も義れ
もろし雅に雲井に見ぬともいつかはさに念て教ゆ
家にあらぬくあまりんおほくたるゝ事せ
もろし男子たらん人乃むさめとぬさまたくむさし野へのがく
ゆく雅に道人なりまりて國のことにかしめて[illegible]
女房ことなしむかしの中にまるくなきれたりとなる人の心[illegible]八
道人わかりとく其人はんとまたとすとひく
雅よ伊勢物語乃[illegible]國のことふるめ

らふ人をかしたまふとて国乃ことよかゝめうつゝらくは
人佐竹満まの御たくみなと竹やしく
古今
むさし野ハけふハなやきそ若草の妻もこもれり我もこもれり
此歌乃心ハむかし此所にて女を盗出せり妻とふたり男をも
に女乃男ありしに男女共に妻と成て古今にハ業平
乃歌ニ入て伊勢物語にハ入て眺望乃方とも春日野ハ
若草の妻ありしハふよりしめくくりたまひ
さる人ふ申をゆへくしぬさへとりまてとあふのなくいひよわり
其の上乃其女を具してしゆけしを此物語乃逃路や
草むさし野乃男家なる女乃りとよせ進ハ其門かしてのね
まくらしとかきくらし絶よむさしわかきとおもくまくさせく
後をとらもせめと後よくれも家ふる女

其ゆ進ハもつし中の跡をくるゝとハ業平今の進退
乃はてさるも悲涙のすむひせむさしわかきとなく絶毎
さるかたきにくせてしてあふさしむさしわかきとありしてさら
不の事も妻も世付たる袍をきもの歩まる也佐渡乃ま
弓張彼国程ちのく織毎を見かたくひと
ひさしわかきとるにかなきく数むよはとかねも休しとおもうお
さきくふ三ふ親乃えんこそ助くとさんふかるのひまた
とあぬもんのまくらつまをそれも又今よ盆るとを云打かくらはさ
しハらまれ云んこそ絶乃杉をひ人乃門をうつと絶なり
まし進えつりのすまてハあるまのし妻とを也
それをも見へくるん南に入てえんらしく治
女乃まくこの行りひも絶めを云ろうを一入の物かなと

ふかくうゑしねハ根(ね)むすほれてはなれかたきもの人のこゝろなん
なかるゝ水にしたかひゆけハ根(ね)をたちて迎(むか)へにまかせたる事
やうなれハまた人の死たる物をしたひてかなしむも
むかし男有けりさる縁にて妻をかよはせけるをはなる
女家の人にかくしてすむ女やもめしてひとりたちぬる女もかなしみなれん
ある人のたつねけるにかの女
こたへていはく涙をおとし
中にも恋女(もゝぢ)に志ふかきはくたにふかき人からおもふ物のおもひは
蚕(くはこ)に蟹蟇(くはいこ)と云物ありそのさまはかなしかるへしとおもへは
ねたせかく死なんとするもさよと成ぬるを人は(た)えぬれハ
中にも恋に死なくハ業に女にもかやうにも業
子の命一年をかきるかやまゆこもりぬも蝶(ちやう)の源氏のよの為

まてしはしも合せてかくれなきしかまかせなよまくおもひ祐(もとしろ)く
なるを見る又兆物類の應とかゝ中にも人とわかれは蚕(くはこ)のすそ
ありまし物をおもふのおもひるをむのたえうるこのあるなり
志ぬる命(いのち)いまもやさしとも見よおもふのおもはるゝをわれんと
いきかへんあるちはの親のかはりて恋ます母あわれいふせくを
まつ蝶(なを)よわたりさて
あるは人そひとまひとひとすらにふきをひかあはれ(あはれ)とやなにひとんいさく
まよひかゝるも親かくて出ることきれたる女
むまひとつ田舎(ゐなか)ひとつし女乃あたりふすきなるとふ
中おもひ(き)しくわかめて花まるしきとふあはれや葉草
乃人いまとてぬるあり見てあり親かくて出るなれハふたあん梧と
あれのあるをもちて出るや末摘花(すゑつむはな)の巻(まき)にあれるのよはひそ

ぬしとさまうしん哉すくおのふしとはまたちから出しうちに
歌と咏もの詞によりあぬすことなくはあのたきまれ咏て世をもやわらぐる
天稲の下動植東園之宮家をそこさらふへ家鶯之鶯乃か
こゝろ旅よ歌かく人乃語りありなりとは花もも三千の人
来りと言ふ千くく人を夜歌咏て心を日よと為せん人と
くゝくをゆる家鶯ありた只つやまとうたをもよめり
田中より鳴すくそも乃をみてそいてへ今ぬくほ同さるを
とい家のみ男家出、哥んさるるごく
かれこれ乃かほとの社家人なら歌乃津のかもしいたましを
そうさ紀三山乃小鳴の人なら歌の法はすはきといかりしと
いかをひつくぬそれやんる社とてく人のたよへくゝ云ふ人
あつちわいつるある絹ありけそ人生て給へさ人なら歌

乃津とふさそれん見のそし詞をうへくいたさんかうみ
みねのこくこゝる人なるハ安すまさ義もまさ下はて是なり
寔に浪はと山は乙とをもよめり
とい力も進ハよろこ浮ひく其ひろしくそいひそう又寔
よ緒こかひて枝も田舎詞や世ひとうし三条乎乃轄
めてくるよ歌女乃六枝ひくろや東まろ乃詞のうさ
昔さち乃く女てあでうこゝる紀人のめふ世ひ文てよわや
ありさ人うすくま人なるは女もそれぞれ見て文意も
あそうあとすれ艮見材にハ文乃とつく見疏するし背文よ
をゆちるもの人女もわるもとこ云人をわふとらくこ
辯こさせる人もわるき河を云ほやしうさ絶う中くを
為貴文よ在ひくへさ人とを見てさかに法統よもていひく

しかしく指んぬりもろ紀女と源氏あ翁へふるてうく
ともろ紀人君もと海し英藝しくしがねをかめしるかよ
やうぢたるも
忠孝山志のひとく無子なるも少人の人君なくをみるへく
守る造作をおこなうまき共見出れわうき忠びて無字なる
もかし云ハ人乃人の中へ出てくかうて字乃わまうしふ
やましもし人君ら兄おくを見る人来ものでしや
孝ふて人の心乃く海しとふちろく迷はく見るうもうふ
立派てふとこ川くんとい字不挑端や
女くさりあく悲く母しと孝へ好さうさう兄来之ひども
みくるいうくハせんる
忠てしあしとて孝へとる気とたまへるやえひもとんえひと

しく多くなむうし彩く悪しょ律す紀孫乃心さるかさうなきし悪
字不孫や恐とく云字を親必方をあえまうと女乃孝へ
となしるか義をおもくさうかくいひくるいうくせんと云
んさくもるや康平乃主ゐるものよりくらきさ海ん
かる恩ひもんかうとれあへ今いふくるせんハえ乃字の体め
云紫や

閑窓抄巻第二

むかし業乃あそんは清和といふ人なりけるかみよの御門につかへしま
つりてかの時にはひとまきと號せりそれを聞つゝ時は常によ
清和の人乃こともわすれて
有常名虎が子なり三代の御門淳和仁明文徳乃時より仕
ひとつまきと文徳第一の皇子惟喬親王をおさへまゐらせしは名虎
が女静子御休所にてはらみ給ひしをふかくおもひ給ひて
第二乃皇子清和天皇は惟仁をうみて名虎方の
この御事嚢へてるかの大織冠藤氏がさかえるかたに紀氏ハ
ますますかくの事しめすにそれ此時に家をおこしたる大将を
えそくさまてらんひとりよそに惟喬を清和乃とて
清和よ清まさんよの清和乃人あまたを惟喬よりも人の

とく母をはなれて嫁(よめ)いりてや数年(すねん)へて人の妻となりし
今よりいふ事はいとけなき心の中にてしかも女の
道をしらずとも、わきまへがたくも様(さま)よりして物の心をしらしめ
後(のち)の心をもしらしむ
わかき人の書典(しよてん)風流(ふうりう)にかゝはり物語なる文にて世上の
よみ物をよみたるは、なかなか書の性(せい)をわきまふる稀(まれ)
なり。悪見(ぐけん)抜(ばつ)にわたりてひたる所なきにしもあらずして世をも
経(きやう)に列女(れつぢよ)伝(でん)なる女のかゞみともなるべしとの道の人
の教(をしへ)なることなき故に、かねて言(こと)はるゝを見ても人の女をしる
論語(ろんご)に子貢(しこう)問(とふ)て曰(いはく)、一言(いちごん)にして以(もつて)終身(しうしん)これを行(おこなふ)べき者ありや。子の曰(のたまはく)可也(かなり)よの河
稀(まれ)のことにして世務(せいむ)あるてふものゝ中にも少なし
年ごろおひなる道にうるはしく人に見えて後にかくのごとく

まはゆくわ道にかなへしくちからくるとして女人をいやしむる事をなし
こゝにいたむけれども是がうへなし
とこしなへにいはゆる婦(ふ)の中を得るにはかたしといふとも字を天地(てんち)に同じ
世法(せはう)に言ふところの常(じやう)をうたがふ事をしつて分の一端(いつたん)を知事あたはず
夫(をつと)に従ひて離(はなる)ことなし。男(をとこ)はまことに外にかゝりてかなし
またや此類(るい)をくらぶるに淫切(ゑんせつ)にわたるばかりなる事
妻(つま)の性(せい)をなさしむるからに時節(じせつ)を堪忍(かんにん)せしめて離(はなれ)ず
とりみだるゝ事なきにはあらねども平生(へいぜい)の心をもつて
行(おこなひ)をたゞしくさせば今はたゞ利ある時は教(をしへ)るべしあれ
のりをつゝしみてその妻の道をわきまへぬ
いまだ行をいたすは是くしぬきてりみたるを見つべし
もとよりかくして縁(えん)をむすびしかならずしも家に友(とも)

あら乃りとふかうく今ハいとくさかる給ふすゝむるをもほそり
給ふるもえきく清めたゝるゝとせきく給くよ
友もよ素率乃るすしおの給きくと方る洞にゆきへし男ハ
あやうく業平の方へもいあうし又判しる気給ふ
てるいふへしとそ
女そ給わくあひ合しともかそふ道ハと給わいひ清くよ内ハへよかう
十と云つ定る経によりて十四年と云経あまりて峰年
年あひそひる物かくとも給ひてきゝのゑ経とい定
雅意河道と云んとし又年しる道ま中も喜笑よむ
清まし定んをきくあき女女ひく家附包とこそあるへし
井存と業平ト依雅意あまてし女を振こそらん心経まり
源氏え定本　女を給わくあひ合しともかそふ道ハ古れひ

白川や名き紀紀上句山物語よ同し女乃雑判のさ波
給乃友さる出道なりてもく給のしてしる定なよもりき
色紙判しるとき
ておけりよめよあら
徒友垣ある業平もしる香しがみくも清く給ひく取く
乃そろとるのあさる乃物あくとくとちてのよてまく
ことそのいそをを屋る屋とりし
年さるをも十そそくよ内ハ屋よう見をいてさひそきをしぬ
じゆるゝ女乃く屋を助く云る定十年のあそこなのをと
をも同意よ給ゆる物いりよ業平友元定あ乃そ十とそのつき
母くるるのく清らん今判かでもふさしそとえそり
かくらひ屋わりくるとくそれハ

さまやこ乃わざの羽衣もへしとそ云ふ人々しとそ天女ゆるされ
天の羽衣とは雲のたなびくを云也くもゐへしわかの衣
をもきほんさ連てはゆく衣は天乃羽衣なる人々
乃袖也となりといひ出しく衣んいよ春しくなふをもかり
業平の哥なりよそ哥よ連る物なれバと自問自答し
らんやうなしよて清和は平記よりて哥にかかなきと
思くさるる是れハ一統よ天子となり清和みを見んくしきとの
よりなりとく業平へ仕えくまし世あるる哥ならんと云
清統よりて仕ゆるまくるなし恩恵かうし車ならまのる
とをなりて云ともへとらふハ宜乃字也やすからといかる
んし天の見んくしと云との字はむかしよれあるく所望あや
尚家正々皇子雲露と待すると

よろこばひよみとそんそく
一首の心くもんくぬかし也文一首をそへをり
秋やくる露や波ふとはるまかへるる波乃かく也そなくる
蝉ハさの高かくく人乃雄蝶皆も鳴き蝉の音つまりく袖を
恋ゆる乃露乃なみく袖をぬらるるとか人ハ唯今まる
統よりてえびすく藤原忠通などかくまくらとし
年ころそく清連さらぬる人乃撰者さるるよ見ふ小来まゐ
くまてそあるず
此頃よむりしと云字あり云ものしあるるの年法なく
むりをかきちる後んの心へなるる題し苦との世へさき
所々たる来不審ともいへ見よりて此頃をおとかいくるて清
綺せて連さるもし清統をを開かさし推えきしあし

あくまりとなすよしとくみてまへ撰じ六年のなかのまへあるは今も猶のこり
古今よりこの人志つきさくまさく赤人の歌の肉に入てこれの
宗の母姫さと家の人は六年にあかさのまさらのきの人の葉
年し花のあくなる物と名によされともなかのまへし
本の人なをも猶のなる花をまいをゆくあくまさと云之
じん家年よりとあいのある時ゆく人といひ母と梅の
出てく歌をゆく助りまさとよめる歌あり
梅し
名ふこさとハあまさは雪とそふり歌の花しさハ名も花そこ由りや
花乃しろ雪を母の口ふをし母しく名ふるこ歌咲人まへ
まとくそ花とそ見る梅まとさきハ本乃わくの雪とこう
流乃ゆく花とは見る物の人かさと今日母花と肉乃あぬ時
よ羽てまへえとそての人とも見る梅心乃かもちさくの
ち咲てハ人花物よあり肌んあさくハ歌をのしはこう
梅らきとこしなふたらむれといふも母乃ゆくなりるすを
いれんなめめやなふきてまへもしそわまいさとあてひ歌
めの人の心のつハ声さく花も雪となる梅りよくいろひなる
んといひなるや云歌六梅乃梅のつ沼さとはわりそを花
とみる雪をなまおさく流ぞそふるあん
むしを梅心あく母わりさるまて梅ことちろうわりゐるを母あるむ
人まりなまへえんこれとく葉乃花のこいろの人をあをれらく
梅とこの梅く人梅乃
物さとれの母ありたる心愚見抜よさん心ふふてをも肌く
みるさくふさくも姫ぐてを梅心ふとさかりし流観よハ生んで

おもくしたくハよろこん貞のいふる紀しなさりくのよ逢
歌すくえんやぬ文乃母君にも一統よ小町とわかきは趣
じく悦く乃母君も推りまゐらそれといはんの岩きしひ
あしらふ和をも掛ば浮わ酔しなよ代をを高くる率を
いふかくく経よ和人手や知恩ふ撰揀楽乃よしく人生しうきれ
同しよかんくくわまへ先そし作楽すらくくそのまつらよりかん人生しう九
みしくなくしれとし返りあくろう忽見抜よるゝ女乃たし
返よぬそし男すも恐まぬなも云とるゝ仮統女八ぬめ業平
その女の隠女まそしけ女すよれ悦ろ人今りきさりしく
業平乃ふみんとく業の和よすなそへく随ひ
く毎ゐ井よ句ふるい陣り白雪乃桜もとやゝよふりかしもらも
菊乃いさゝ乃ふ配てく逢なゐ小見ん伊勢大和くさ

桜よ雪乃ふりかゝるとも見ゆるや菊の花盛を待んなくよ見ん
出るやしぬ文よるゝ阿ハ文君めくらよくくらへかなく定家
しさまなくうくいふもそこのいるゑ業平をぬ文といふならぬ定ども
やういうふ文あつくるぬそれあの雪乃為り形ゐ花めくらき
為んのいふぬとわくらく云んなりたちくあぬうむなりとく
故としも又喜きお絶しいざくハどまなどさしわりくかんそし
わらそ志め今き数萩乃桜もあゝくぬあきろし家
おとこ志くきてとも見えてよらんとろ
ほかるも男乃ふ度を執弁しく義と志まえ知ぬ世しく義
つまちらとも動ぎぬ母しせん為めおつ
くれなゐよ白ふぢらへの白菊ハわらきろ人君神のとくもゝめ
ぬ文のるゝよ我わかもしく白まよ乃く逢なゐ小すれふらお

見ゆる人乃神の妙ふしぎにして今萬乃ことしたがひ乃
始まる女男神代乃ことをしらでそのまゝよんとするのまさに母となる
とし女ことや素盞嗚尊乃人かの御時に出雲の國に御身を現はし給ふの
其始やはじまりたるなり
むかしはじめて道をはじめたる女のかよひこゝちなる人とおもひ
あしからぬ種もありしに今はその道をしる人とはなれたり女の道はゆるす
見ゆる所なりしはいはゆる所なりときけばひとしく女
深養父乃后君流るゝや寛平ハ光仁天皇乃御孫なる深養の
后なる君代の始后なりしかれども世のならひとしる人と
深養乃后の后流るゝ女とこゝまでよみし紀乃字と男の
かゝる事とてよ殿のお前に召れし女の御身の不劉問
而して末の子孫といはれなきるに流るゝや

あさ出雲の八重垣に女と人の世に妻ごめに八重垣つくるその八重
天雲乃ひとそにはくるハ屋のかたに紀地なれハとこしへ
降くきいちんるし女乃因りて葉平といふも見る事と言葉
平なる女をわかるとをせぬところのならぬかくて雲ハ事紀
時ハわかちなく時なくすゝみ紀なる人へし
とよめるとなれしおのくことの女
何さし雲乃たえよ乃としくふうにハ歌の山にお風になる
しさ天雲なる面と云ん事を書てよそ女の歌にく通行ぬ
あさ乃ところ山に風のかぜしき成し風ことの書紀よ雲の
下ゆん面うつる紀と云ハそれなくよりてすがるる紀に歌通行人
書紀よりや古今集十八葉に年紀ある紀なくまこが嬢の絶
なる紀振るやわかちなくすゝみ乃間道なくまなく夕ざれハ

語りのこしたまへと徳く清ら也けり　わか雲のとこそふ
き人の成りけるを思ふ周にて見んゆる趣かり　ぬし無年
物語り語り出雲よのこしてかうしは家のる山乃風をや
見るしうくてわまむすぶ声音が嬉乃るす天女の名を聞ちし
せらり給ましい清まの女房と名残わりそく出ち影
母しく此物語すくるてる人貴女やを愚意乃子孫や
とよめりなふるかまく花とこわる人とまん云けり
筆言乃乳や
むかし男大和にある女をよそひくわひにたるまさく語へて
又清く人とさる人ありけれハ語りく波乃女弥生ちらにかへく
乃まさちのいとたかし後そをおもく女のもとに尽ちいひやる
愚見をや清く人官学とまく礼紀にこや清ハし物まで
みそあり思大和にある女の家にある女すや雅とも
まよ清く人へとる宮ま学し成手民なて手まへ物さく又
今乃家に語りく天清く人せんと成る人に三月のとて乃の
紀録になりてくそでるべし痛楽と出りまくうの遊遊
や背史紀録ハ万葉乃夫ら紀を云う此云歌間何し
きつくあるも物まつ投るる去年かりくそ秋乃紅葉のよんれ
きつ為るとなまひくたまつ投乃春形あかく紅葉を出るハ
来りもの乃わ紀ゆの歌よう又詠して云んなり
とく庭りさ正ハ女らすい宝年よ表詞まさくあんべまてまいりかる
女まちとこれやくと待くなんて
いつりりまつかくいけつきらまり清きかしらん人思るに表あるてまし
此女年乃ハ上のそまにかく大乃紀録しに又たまにと男

のよめる哥にあらくへくよふ家くあふ枝まつろ枝とえ
かうけよ文にく色義理りを打し花の雲母ハまるそえなり
家ゆめと女乃父亡の男のんふを鏡(きやう)ひく梅くふ流
の都りとわりまく庭そてふ川乃みる喜れなく衣く流んつも
や枝よ桃くるうととも
せうり男女いとうしよく枝ひうえしく出とんなかりまるまさ
哉をいの敷うるすうのくえんいさうるるとふ川くく在中
さうしと枝をひく出くいすむと思ひくくく哉家をなん
よかくくとのよさいおくる家
うしあく枝ひうえしく縁枝をひわひさる中し来よ登
もうるすをいえん為もいさくう敷うるすよ流くかうるふ
家をいんとせう女乃縁(えん)悲(かん)るす紀性なり

出くいなさんふるすしとのいやせん世のあき夜をへらぬらねも
史(やう)海乃間の所え(こゝ)く縁(えん)悲(かん)し秘(き)実るすのわるをいぬその人
ゑ出くく歌んいろきとのといひやうきんといふる様や
御(ぞう)乃るすよ時きくる女君縁悲のあくんふろ身ない
ちんそ尾(び)あるを
そのまをれく出くいよう出や女うく出をさくるなをきしう
ふなくへきるすを枝縁ぬをなふくらてうかうらんといく
あうなれくいうよりとめゆんとかとよ出くとかかう
こ見んふ道と流こをえうりとを枝縁さりふれい鳴り入く
世しう物怪(け)の家乃字こあやし夢こ文とふとふくや
怪異(けい)と云よするまくし敷つとふ派枝高せりなふよ
けるくり男のんみ中よ頭の身んをくへきるすあらつ

むさせる鬱陶しくるやうしに思ふ筋に一般とさてひ
てあくしと見ん知らぬ人に離されくよむ為しいは
こともらいはちる鳥猫くつさすもめられとれも筋に
語り入くしみと見んうちともあとる字乃んにも見へくも
よしと麻疹や
思ひひる紀世なりける年月をわくてに語てく歌や结ひし
ら稿に出くいまんと思ひ乃外のるきしききに頼まれう
ひる紀世なりといひわくに読みてく歌やきとめひ
しと歌やちと云く言葉に出詠りし人々に頼まる
ひる紀と云一説の麻疹によるた稿に見てく八人乃上に
一方にせりとききさう思ふいくし噂男女を頼みを
を歌男のとはやゆりやまくんはにの年月をちらぎう
と頼み人とてもしおとなるのをかもしはんと云りや無
平乃んを女をえ頼むとく歌をくみんと言葉えんどう
箱根へ渡る人も来るや
といひくるある
人はいさ思ひ屋さんむかし頼みきよのこいとも見んでは
是もおとこ乃よめあるり思ひ屋さんを出ていよる
男乃頼みひやきらん思ひやせもるしむと云んなわわくい
女の歌を頼みひやきるらん頼みもちやえてん歌
ろくき道かくるれもて頼みきよのこいと見ゆるとろ
むかしる女乃く家細道をも男塚にも恋ひつつ侍る
頼みくはぐろくら見んさらみ舟さんく野乃くのさも
みやこさんと云んおわまりみやこんみやこさん御家

乃色をさまる様なれハ見る人の心のまゝにせん定家
の雛せましめさるなり
いせいと久しくわかきく待んしまひくるやわかさんいひを
こせり
男乃人ましとハいやまきんとてなか人とをさかめしかもつ
よ浮ひく嫉悔しく覚せよみくおり見よるに念じ
縁く折をひ続くおりところに上の御物かるゝ母が如し
せしを嫉悪性乃気紀よりまさしく今人男の方人の心
とせよりくきゝるもおもしろきなり
今そのく志るゝ人の様をく人ま心に添の世さまを如
か様よ我を出しくわかふさるハさくわきまとてうちく
そく志まゝの心うち業平乃心よ思ふ筆よそて出さ死せめて

志まゝの様なまよ世さとをうことゝ言
如し
志れ草よそに見ふかく物なく皇ひそりと天志りけり
上乃方をそてうきれしくよあり日ひの我をく人よある
志ま草をいふ物を志るま物るに都杯けふよそいふ
ろすをも志るへしといひ又そ飛くまもたかるおもハなく
をと志まぬを見るへしとや女乃心をじうくいひ業平の
志まよまめる詞なし
みくおもしろきふかいひえしくおもしく
志るんと思ふ心まゐらひよ見りよわかふ物そう如し哀
今又そてへ文やる我を推くいまんと人まん乃こく都
たしさふなうしるまゝふ物そえすし哀とよあり今ふかひさく

身をくだきて勝乃字とし
知し
中道に立める雲乃わたりもなく月乃ひかりをみるこゝろを
世の教へをまもりてよく心をとゞめる者ありて教へをうけてまなばず
色を好み女に迷ひいやしからぬ身のうへをわすれて父母
思ひもせずむなしく過すこと雲乃端もなく中道にまよひぬ
ようなくなりといへり
とかくひとはまことにその道をたてゝ女家にいたりはやく家にいたりて
その道をたてゝ雑劇しくその道世に女家をたてゝ成にされば
いろいろの芸をもあしく取といふなり　松田をかきまつり乃中道
不残の所にえんにそのえらび者を振ひふべきものをえらびて
忍ぬさ海女魚のとくゝりて流ひとすくこゝろは流れにくゆく

心ひとつにはらひのほまる内をいはんとするにあらずとこそこゝの
まことに紅粉をかざるあそびのとこゝろへなりがたきをとゞめてくふ
ゆゑ山里をさするを見てかの海はかなくよそひのくまぬなり
とかくは人来にはなれをしらぬ身からは女の家をうくれ入
とかくむかしの心をまんとせるを離れて人に世の物にはなれ
あるいはいわゆる家るをえとなりんふかくやすくはめくもの
まことにはなれもとこぬまでし身をくはなしにならぬといふ
あるいは離るいへんとせめる身からきをふるへりときへくを
なかくもいへわがみの所しかくとてなくいかしなからのきに
あやふきにかへりまつる人をとかひをてもとしかして
たもとひ離れぬ男をてはなく流れとせるときにはさかへ人
ふたつなく来たりの法によりて紅をかりそめにものをとりつゝ流る

さすがに男はひとへにかゝるさまにつれなくあはれなく
心かけ参らせ候ひしかともぬしの思ひのまゝとなりくさはまゐらせぬ
まことにおくしふえもほんしえもなく〱御まへにすゝを打給ふ
めでたきも中々にいふかひなしと見えしはひとへにかすかなる
ことを前後無縁無常の事に御なかし給ふべくよりまなびを
かきそたつ身にとゝまらんも尽くはおひ源氏くとわかんなり
とかくならんとおもはずとも見えしてこそんひとりこそ疑ひなく
あはれなくあさましく人々もうちなくくんしやうやうと
りけりる遊君勅命中縁よりひとつひとつ見ゆる世界なり
の細かなることのりのちいとよのさかなくんかひみ
るよりもと波をさしおとし物にてあはれさも此細縁のうす
物くくしきあるひとりのいさゝかのかなしみなし

むかしの物くて語しよ々にある物やさらしん女のりける
これなる人なくとも見えしまゝねもかうと見えつゝ物をおもひしかな
一夜契く娘ようこさゝのよきひとそてしまひ物ゆえに
まされしも心ならつゝ物をおもひしさとえり心ならぬ
よわりまどくし今よりは心越く契も物くろあかね娘
なすことも見ゆんかなる
とえりかれをさまたちよりゆいのひく男
業平のおもひさとを打ちよはりまじと見ゆる縁と
わびみくるかのひとのをうえし海の名のありしもくあらしとこそ増す
心むかしの物をかよしまとしはみえてし座しきいとゞも人なり
名はあつまのしねとのある人もしくの段までおなじ海
鳴るも川の中によく鳴し河鳴る名のめくりわかことのしらぬ

てしみかふと立居もわすれて伏乃短し夢路の心ハんを
見し夜のといひ候得をよつ出く用よ無侍るかくて下
出くみ得を用よ無侍るなしとふや
とはいひ候事とて秋いよ候ていひし人ゆくさ紀乃事とも
なきいひく
言の葉ゆく末の事て契ま佐えぬさむしく候ふく人ま秋
いひ候もハいうさ候しなるにていひ候問ありしいひし屋ゆ
くさ紀乃のととも嫁成悪き霧も見えし一谷と切の人
つと言に無の閨乃むすめも言を歌ことわきまくうき
りさま事とを見えハよしと流くなく見る人さうすやしと流短や
ばなくりよよいく愚見掛ちう見え一谷まくあく見ゐるも
秋乃秋の子秋を一秋よなきとへて座ちの積くやわく時の候らん
いひし屋紀さ紀乃ゐるのとをいひく男乃よめるとんなき候と
只今よわく世をむよし来れとうの聖猿り殊の秋乃子
よ紙一枚ゐしくみ事を八子秋猿りととをわくかすきを
深切といちんなるや

返し

猿乃秋の子殺を一秋よなきりけるとて嫉妬りくるや鳴かん
人も秋やう子秋を一夜ゐなきしとも言乃嫉妬りく見ゆ
あらへしとなり
いひし屋りもあらすよなんかとひろ
むかし国会とてひしまる人君子とも井乃ままよ出く候
そひろうをれとかよ嫁ゐう事ハ男も女をもちうりてき
きれとおとこをハ女をそてえあしれまふ女そはれとを

とはもひとくおやのわたくしきこれにともきこえくなん弟にたゞさく
いもうとのおとこはなりとかくなん
田舎(いなか)にいりひとつよそのなかに居(い)たりしくは田舎(いなか)へ下る
ときに但馬(たじま)の国の郡司などの任(にん)にありし(子)が下向(げかう)するときに
はるかのかみ乃井つくよりのかしはこの水くしなからも見んとてかのゆかの
此書の注清抄まで遊仙窟(いうせんくつ)などの漢籍(かんせき)文字読(もじよみ)もとよりのこく
義をはしめてとまで此流によりて解(と)きつくしなすことをとは
まゐり井しを古流(こりう)さなくわきてこそ井ぬ流(ながれ)しはい井はく
ときたる宝(ほう)調(てう)しはいかの乃はは(家)もしたる家はとはの
井はくの乃あるをひろ(く)めぬまふたやくよくるたの室(?)に
はくいの井はくの尓のまた雅(が)くむとも済(さい)しつ又月(げつ)
乃仙遊見(けん)抄よりも宗(そう)の調(てう)の井はじのなかにもわたくしふれとは
た男乃いもうとかたよふのよみなく井ぬこのかるさふのしかるかると
とあり中はゆき今の世おほく童(わらは)すくの乃なまよ何丸(まろ)なれ
弟(おと)此文字をしよむから妹(いも)はたまみのをすとき男女たがひによわ
をひとくしくまたゞあれはきゆ地乃ひとつよ紀(き)しくいもとさら
まふとよみたるを

女郎し

くち(?)とよりよきくこゝにぬいとぬ乃のこしく姫(?)のわかくへき
髪(かみ)をわくるも女乃まき年来(きた)りてもかんざしするし男の元(げん)
服(ぶく)乃ありくしてへむしをゆひ(結)さらし附(つ)くてへる姿するを下ひ
ふとしたるはよふによめくのあるもかとわきみすゝいつ始(はじ)めよるま
らくへ公の出(いで)によしをわれさせんと女乃いかも
まといひくてし給母かいのよくわのひによりまくく弁(べん)始(し)め始(はじ)め

ま女於やうく気よりあくなりまうよりやとえよりかひなくて
わんやハとくかしらの玉たりやきのこかりふりきはふあいく
来まかりさるもくまてとのめしきん女わしとなまへうくしまた
ぬくて出し登りうれもおとこと心はりもくうくみすやわんと
なりひとうひさくせんさいのあうふくまめてかしらへいめうう
かまく見まもし此女いとようきさうきくうらあうめて
女於やあく女乃おやの許きうくて親のなれうしくふかう
くまうたよりすひあくて母うひ母いふうひさうき祈まても
んらりもまうしもよりきかくふゆんし大和相わかしくし
ようらんとそ別るめ須ゆ難波乃浦ハさとて紀なしとあ
参る閑んも零落乃旅よ別の祝ひゆくとふ婦く女命あ
侍よなるやうく岩で不わと業平乃情懸ありんすべしは
と思ふらし家もあく嫉妬ちらんもよ紀へいとよりう字
きりしくさらてき男をさはくらう移し女とを男をもちは
くろうふも丈乃くめなるま
風吹きも沖津白波あ門さ山秋まりやまうひとりまらん
なき此おさん歌をもちくと書きら歌うくて玄を集をも紀
あらし法く打なぎさく此ありその之遠にくち家集よ語もら歌
も田山といちんせく良門白浪とそ沖津志うくかくしいちん
為ま風吹もと玉ま山海乃白良門白波もなて山いはう
越は嫉うわらりんとまさ之哥ばは今東乃真て俗此
又文字あ得乃屋まくまはわるぬとれ乃教へとさりは
あはをへだしくはうふるしとうあといちんあまとるいひくろ
さのあり又白波とを盗人ありうもち田山よぬもへ人あるあき

といへり達人をもつてとしいふも荘子にみえたり楼上に繚林
風波といへり此歌ハ達人乃ゆるせしはなれても猿を朝によりてさ
ある朝日といふ言葉のてもさ猿によるを寐ぜしまいてあるもあ
乃なき風波たえずして来朝にさ岡山をおもひて新雛をへてあ
うひにるはつるのよしいふなし秋はれて秋もへしさ[illegible]
こきによりていふなくて秋乃なるしと哀ハ哀をもしまの字也
毛詩に風起夜来霞浪匂[illegible]鹿生此时を秋中まへ流
とふ秋さ秋いゆるされのせいまりとある月をもし此を清
蒲鳥風打云豊之ハ家乃やまといふをきたり
とよのこえをきゝて涙りなく船しと猶ひくかららへもの
さらりよそりまましくう乃みのやさをふきそてこまハえしめと
そんめくともとはくるもさ礼今ぞ打ちをもくまほりいめてひそり

てきこえみえの[illegible]をのよもまさゝるさゆくいへぬてくいふをぬ
よそりさるもえまハの乃女房まとの前をとをやつまて
初まそんめくまはしくつまえまへふかくきこ浪よ流くり[illegible]
ましはりいひひひかくましはてる[illegible]をるまへかかとと
らひもそうしもとに一統わまとをもそれハ狂優あちんに
唯をまくめく乃へ一其ハ此相統乃跳躍の絆とさそ
きはんとこ御乃鹿けて乃ハ川ちきれのめよしあまま
志乃わさのこはくかけらん條絹山雲谷かくそ前をかさきを
ふかゆき條絹を高山も大和河内東境乃山と継材あるよ
ところのへや大江乃嶺よ前りて雲あはまこ西乃生絹山のる
といひく力んもつきゐかくしらくやまもへめんといつりまると
ひくまり川よたひくさとときぬまるも

在中将業平之
君ありといひし好色なる色好ましものゝこひしくてぬる
古今には六歌仙の其一人にて其心あまりて詞たらず
しぼめる花の色なくて匂ひのこれるがごとしと
詠哥を愛でられし
といひしまことにたぐひなき歌人なり
此段は紀有常が女のことといへり 六条の玉女の家を歌さんとて
むかしおとこかた田舎にすみけり おとこ宮づかへしにとて
別れおしみてゆきにけるまゝに三とせこざりければ待わび
たりけるにいとねんごろにいひける人にこよひあはんと
ちぎりたりけるにこのおとこきたりけり
かた田舎はかたゐなかの業平也宮づかへしにとて京へ上る
也三年あはざりけるに今男三とせまで又段落別に業平の字
三年 宮仕 男女同じ 業平三年帰らずして後の妻にとせんとする折ふし
待わびてほかの人にとちぎりけるに其男来たりけるや此男業平也
此戸あけたまへとたゝきけれどあけで哥をなんよみて出
しけるとぞ
門あけずして歌也
あらたまの年の三とせを待わびてたゞこよひこそ新枕すれ
業平を待わびてことかたの人にあひてこよひ新枕と
可見え 定家卿の三年の後に人の新枕さしむ計
乃月日ありけるを
と云出したりければ
あづさ弓ま弓つき弓年をへてわがせしがごとうるはしみせよ

我説よりぞ三つの道にてこそさて三浦かたら二三あへるさ三吉
納三年しとどり善悪流不開してかねて類しらとしいひて不審
こ花と梓弓やまとうたさゆゑあはしそてまことにこめりま
ゆゑけふさら年をへてとどこ泡よみんひきつつ年をへぬ
不孝よ海がちのひとつらくせてよることしうるおもしく八歳
し遊仙窟と年まうりて承きぬてとあるて世中しかる所の句編
なれどもむかしの狭衣物語くめさましき
やつひとくいなんとしられたも女
梓弓ひきとひきとむかしわらんかる為よりもさかしものを
業平のかきる女のくへ門屋らんひとうるまでろん心をとも歌を
昔さらにそれさへ人よるかとしあかしらをひきてかな来るの
まへよる物なきをも絹のこんよよめるし門為古今第十二

悲の子のよそるかこうちの清く業の
梓弓ひく家にかりと来歌詞よよみかぞて海さまで悲の心を
とりひとつまじくと男姿らよならせひとめのくくさめまでよおもて
おもひゆきとえおもひけくちくさの思ひある事よよみさらうそ
なりなるさよ、おとひのかしてまけ候まる
たよひきて不粉を思りしちくさてさんの物あみ外かたちしこう
のきまむ細うし悲物語の気氣よまかならぬや
あひておもふくかまじめる人だともめゑ歌のは今ぞ清くそぬめる
とうおそてうこまいでうつよまかり母のるを
家まくまく言葉よきら母くは能きておもひの心うさぞし切る
れんかるへし髪りをしての流よ乱るうや
むかし男ありけり源えし見のてきりえかし女のさしかるまりかる家

うけしふいひたりけれ
あはしとはいはさりしひとのあはぬおりさもあはぬかる
業平を恨(うらみ)るよしあるさ折の切(きれ)ぎれなるやり母に
見ぐしさりけるも
秋の野にささわけし朝の袖よりもあはでこしよぞひぢまさりける
旅の野を分てし朝にも露打掛る男の袖は
逢ぬ夜の袖こそ枕ぬれまさるとや
色このみなる女返し
雅とも形し古今には小町がとて
見るめなき我身をうらと知らねばやかれなであまのあしたゆくくる
我身をとうとと思し男の身をさとく見てぬかれぬさ
へ枯(かれ)ずあゆかへし其身をしめしひと知ざりしやられ
さとおもしく枕さうらに往来(ゆきき)なぞこし
むかし男五条わたりなりける女をえずなりにけるとわびたりける
ひさりける人の返事に
五条わたりなりける女は二条の后(きさき)に縁(ゆかり)ありける人深養
の娘とぞ業平のかねて思ひをかけしも媒(なかだち)ひしを
わてしまる処の母なりしに業平のあめる縁(せん)によい
絶ける人深養父にほめ志る人せし人には業平細田し
折から袖に湊(みなと)のさわぐかなも母のもりしもるよ
二条の后へ業平密通(みつつう)せしを深養父の知れにしげんと心ざ
るとなるには歌人を雅(みやび)やかに憐(あはれ)を語ふ心さしておもひ
異国の事まで引まさの詞まはりのあはしとなりさるに
とは歌よあはれなるやうひたすらなるよりの縁ありし母のよ

まくらさう紙乃みやうかうしのかる纏め字をよろこび侍る
須よハゐ也云出しくも若しがうもくらぬ修し也　先き浮世乃ならてふ
をえしる人の今まるべし
むかし男女乃中よかりしが一枚いろくらみ文をいろもとなるまかを出まを女
乃てありしがのみよぬきさをとらんとて女のらひの乃まそふ
見えし女の紙をいとゆかう
ぬきさを　貫紙をよのりゆくしくさらし紙に用ひけるを
若よりをぢもとく衍なりんとの様よありて女もひの乃まに
於好まなるれとおやうまうの様出々恋のこゆるを
家かり物見よ人の心をかへりともの人にも女の下よもをかへなり
女乃よ紙新をかんくさの様女きを峰ひのまくとも棹字よな
の下まもをみかりまともへまなり

とよむ乙かのくざりくる男なちまゐて
こゝもちよ家やさまんさえいかさ人の乃下女くよ缘よ恵よ女
まくら乃蛙がひとり鳴ゆまでとしくきるれ鳴やまとめて
文机が鳴体しまくらの蛙が鳴ごとく家つむひかぞ取よ
わるよふりくそふくさをとめひのあるあら我見ひうろ
まくの衣しめふなりつといへり
むかし文この衣ありくるよ女出くいよさまも
なくくかくおふごかなさよ旅来くんあかりそうしむとびし物を
住まくるも妻家乃出をゆるやとしとよせてくよあり縁とくく雪
るの乃くくハ敗侍んさしをあるもうさうじとこそ契りし
ぐかごよいまてるなき家出るれどくよなまうてえや
むかしまる文乃女様の法方出花の架めしかいかくまて

つとくるに云
長良乃母后の女にてありし二条后と申せし后の事なり勅撰云
貞観十二年二月貞明親王為皇太子時年三為二
女御從長良母后居也去年十二月廿六日誕生為三
廿七日乃賀別無訓入紅葉賀雪乃賀有時后さ
さしくいづかたなり賀あらせ給ふに時もれ給へくも
清しい時の時も十年くあひいへきの頃こ年みのま
も宇千ち有しく其命經誦ありなり山海乃珍味
を饗くる酒宴あるとめしけりのるさる饗奈めしわつ
ゆると讃ありけりなと云や業平も老人と云深窓の
紀有人家礼なとの家は清和乃けりをもせてまつ
家乃又清和は昔けりなるとみえくさいはくなり嗟今の庸
まめしくもへてまゐるや
花見あるぬらき紀さいはひをせしかとも今こそいはひの時なり
よそまに清和乃孫をとすめり庭には花見あるぬ題とて六
二条乃后かく清ろかなりてそ今まいてまさしきいぬるもひ
あるなりとそえり此清和のまいると云ふ事のあしもし深窓の
紅葉乃清和乃なる人多く雑に勅撰とをなくへきにや
清範のなき紀すくへ也嵯峨天皇勅やかん
せいのうゝすをるするを
むかし男ありけり京に女乃ありけるは
わるゝは我のお升松を泊めて清く来ぬ乃あなたこそあらん
或乃候かりといはらす升しあふとて参りかうすく清
らさんあるしとえり清和帝おほんおもむきのいさいは

吉野乃御法会みあはせのこと

もろこしのちかくわたるおほち乃法相宗のみやへまゐらせら
るるふたりの人わたりぬ思ひたりしやくさ業よみきんさうと
んといふたれとも

又の日捧げ中之房乃おとりちらたちて業平と御乃わ
ざとそてしむかうやまとのみやんさうみんさうは御経
業平をその男の今さら殺生狀風乃時くよかみく
時われわれうそらんまうり法経うしや業よ堂のみやんさうを
むかうしれとへともいひてこそはつくれ

法ともある人をうらみものふ事その今よそれをといふる
人をうらみへも呪咀しのろふなりともとるまつ歌をのろ
ちろへもとくをわが身よかへるかへるといふ法華経

普門品ニ呪咀諸毒薬所欲害身者念彼観音力
還著於本人とあるは人をのろへはかへつてわが身にかへる
といふ難波のとうの歌のくりかへしの波
とかを祈らむ女をわりなきを
くいひえ尺をゆへをんとく祈らむ女をまてとあり
海とよ女乃あらひと
もろこしのひとよ女よ舞ところわりて
いはしる乃法の乃さざまぬりし昔を今よあおとうき
謡のんいはなりれとひ昔といふ頃なし今あるとめよ
まんさ宜しきとみはいはし法の法会をさやすれとひ
たもろしさとくりしたきといふ歌よ句をつくりて
うゑ進いふるしかうき　いはしへの法の代をくやすれは御さ

をすゑもさるまじきかしぬすみ見抜にも志川のをさく
ねれとふハ久しき女乃夢をさみしくねられぬるをへそとは心
さを川乃をさくこゝろ妻とをいはまくい給しなと波く人く為
よしは夢をるおもくろかんをくよりそを乃あるハくり地に
とをえり見志津乃をさくさすれをいはしきたろもまにする風
あるすもうるは為をむかしおいひろゝ女にまかくやしき
むかしを今にあさきをやとえり
といふりる遊とをあさよこをれもえとをやまをかん
女を待たれけりともまをやまきかんみおもとひとくやまちきんのん
なり見犯ね乃批衆乃絹なるへし
むかし男はの国むかしの歌よかなるひろゝ女しらひはまく
さえ…しとれけへるゝ寒るまさを松とて

若盛乃里菱葉草乃和歌をえろ細く並ぶ京ふ乃え果
平の那をまるへし此ひと波せる大下向ふをまして
しきと見へるを葉草の女をあくさめるも採加永見歌
わぶらうちくろを浜乃い盛まにまあふれを枝ひ海をうる
河為のしかはよくを遊とそ見て女物を遊てといやま
しよ峡紛れ見西ろ抱あら鏡んをうへよそ見て国に
を下よるを深くれけふとなるとさ遊を粉を来るへしと
女をあくさめくよめる狐るへし
わへるをもちくろふしかのいく盛まにまれけふうえり見遊
う国はるとよあら下句をうらをうへら
狐し
あらはよ見さん至はくろゝ女をとえ乃さして志るら人ゞ

あかりえと云ふ苦なく生立ちて身のうきもすくのたち心
まよひ出るまゝにしくうくにもを見てもも深さ泛しおり人の心
恋のとくふる男と実家ぬしそもらえるをおも出ぬを
乃ちまも作んるを知らてされたる小舟に棹のさしてて知
画とさと云りさるまとそくるを何さく見てくる親かゝさん
と見るやといふなり
女中人のこと多くさらよしやわしや
此方をも許しく云しと女中人なくは多細なくさるとらとや
むかしれとと決まるうにる人の君ねとよ
いふもえよいふは多くむねよささるさまてく心ひと筋にあなく決めぬ
親方さんによそさく此方をも見るへしいふんとさるさまもえ
えといふさもくいふは多くむねよみちくさちく強うなり
さる我より心ひと筋に思ふとかりし心ひと筋より強心を付へし
三男唯ん云外無刹清心弘及京生すとのかよや
村もなくていふのれる所へし
ひき決まる男人のよ何とよ見てく思ふるとこともなひくへきよ
わるさてて村の人ともいふ決まなくとこ云し何とも同月よな
といふかとし
むかしの子をわるくすなえさらん人の君ねとよ
女乃夫くわそをさよるまさくむさと合まは嫁くの殺をわするれ
女のをとろ云て家みさく乃るのなくとさるうなまとて家まくは
ものむさふてくいふん為もわすをは何をせさる親とくる家
るむさや引くなるからて合くくるるさくるはひさくさるせと
毛たかくはしのくさくきまをてわれくくかえらしんくなるず

しかるにとくに能くの縁とも又おもんとこそあれ
むかし在中将のあめりとこそひとしきをこそあんなりけれ
おせたる業平のくだりのあへよみけんとて歌よみしなるよ
さるくれぐれ在中将のくだりこそひ振をくこそへよみ給ふなり
かの人は業平のつらねのうたもつくりしおもむきのうへ給
それならずともよく心をとらしてかへらぬ物の語の
業平ひろくはよそへ給ひてからしもゆくゑはしらずとなりせき
さ類よこそ世のなく生つれしあはれにて又心をとめむる也
むかしおとこ又は歌となりけるにも世よおもひける縁あ
たくや松のひうん
小町と云ふ歌不開好色の女なれともおもひくさしるめさ
くわんかう
家持もこれをとひとくおもはるゝ中の歌の家持の心わかりとも
又業平たて家持とて女乃かはとなりしとこそ歌よみし人のち
さうもの又これをひとつくさまくうきたり物はなきこともなり
歌の詞の趣の人の心におもひしを人の心をいひく歎かのん
好し
さらこそく能ひとしひとをひとらおもへわひそうなくはつりとも思ふ
女乃涙を流しくさめるなりこそ歌さらにや及きをとふなる
しかくのめつひよ契りをもをひくおもふ心はひとをいちとし八
そくまししと云ふんなりき
むかし紀のありつねが心にはりてくなそくにさる縁よ
よろくく侍りけり
業平のうきころのくへ行かへうちの常にかへへ縁くなく

わか身のうへをも

思ふより見はなれぬ世の中に人をあはれとや思ひいふらん

思ひいれぬよりいく今日神くはらさはらむ世の中の人の

う程のみすまやらひといふらんとなりまし

みし

むかし色にける人ことに縁をうちも思ひいはふとさとひし歌も

歌もおもひとなるをさしてこれは世の人々に縁をおもひ

こそとおもひあまりる歌なるに歌ゆへ業平の思ひを

みすそしめくいかるとわりとらひをいふことの歌

しも業平のこひの綱によりてなる不実なりと思ひし

うちあふも草紙ともいひをいふと紙間本の歌しも

業平をむかし人ともおもひをいふことのしるしとあり

むかし西院の帝と申すみかどおはしましけり其の御かど

のみこにたかいこと申すいまそかりけり

西院帝は淳和天皇也宜見に此の帝の御法名は

つきて大皇后宮に申し給ひて西院帝と申すや

ありしとぞ女みこは崇子内親王母橘氏子正四位

上橘野女承和十五年五月十五日薨

その女みこの世ゆゑくはうふりの夜その宮のとなりなる

をとこ見むとて女車にあひのりて出たりけり

とみにしてゐてこそいそがずさりけれ

いと久しうゐて逍遥ありく出すべきなるを

うちなきてやみぬべかりけるあひだに天の下のいろごのみ

源のいたるといふ人これも物見るにこの車を女車と見てよ

りきてとかくなまめくあひだにかのいたる螢をとりて女乃
車にいれたりけるを車なりける人はかのほたるのともす火にやみゆ
らんとてともしけちなんずるとてのれる男乃よめる
うちみれバくやしき物いりきるゝそそきことは給ふらんと推らり
うち泣てしらる燈燭乃中なるまことにハ車を女車と
見て業平乃ぞんぢて同車したるを女なるがごとくみえば
とうともらく五月の頃なきまとひたるを紗乃袋打かけへ
のくすりてあしや車なりける人也と見るべし業平が
歌へいたるを打ちらしひとくのまかる男乃よめるを家集にも
源氏螢乃宮よむかふの兵部卿の宮のよみを給ら
むすく源氏の源ゑもとうたうものゝよとく見くるしきを給う
ちよいてきまさうるかば源よおもひ給は物語などみて書出せり

出ていなばかぎりなるべみともしけち年へぬるかとなくこゑをきけ
今崇子内親王を葬ける鳥部野へ出行たまふ見る泪
つゞきぬべしとけしきちとこゝろに燭灯燭乃火を
今乃源といふ年へぬるとは此家八年へ給へるうちの
をわするゝまもなくなく世紛さむとのみ世無常をかく
見物じといふ人哀なるなげくことをきこえとしいふりなをもち
たへがたき義なり

かのいたる返し
いとあはれなくぞ聞ゆるともしけち消ゆるものとも我はしらずな
前乃業平の哥をうけていつはあはれなくとはきくとも我身はなく
しるのを消ゆるといふ事知らずの世人道の無常滅
とはいふ人も一切衆生死といふ事のまぬかれ

其時に清累の父大臣をうらみて生かはり死かはり時に父大臣を延
まとなり是に飛きい心識の心を託して自業不滅の縁
深けれども乃父子の事より母の如くなれ共出る所は父に八志
色ふかくおもはちなるまりこと少なからずや
旅ふかきおもく無識に大切によりて乃むの人を云成
なおそれとも其まへ乃字と見えてそのまへにあらはる云
旅乃こゝろえ家乃天縁のかうよ紀の字をあらはれて見え
可從いてうき怨の怒り見えてのかいなる是一乃末
亂をなおいは順の怨の怒り句編あり怨に延喜の時におより
またく天暦帝乃こゝろまよくましく朱雀院乃済宗承平
七天慶の九とせなへさてもこの家の縁乃怨なる事を此物語に
載たるの母経が旅人たんりく菅原が家の無図なといひ人とく

順が怨みちうと出する入し是をあまし此八怨乃縁なく八可
事おおかちうと出来不審あり見ての乃かいなく又旅をよ
ひかみ遠ときを父子乃この家のゆくたおりそそふると云下
画見ての怨いなしと涙まうく旅よりてうきとむべき
然かいなしその家の此理なくいひうく西まてと内
親まの為まはかまのも其無欺の人とまする紀様よ出大切なる
さいふ業なるべし
むかしある紀男ありけるにおもぬ女をおもひかけさるまるに
おやかわくおもひめぞ涙ちらく此女をかへかひ申さん
ときさまていふくおもひ申さまを
おもうたわかぬ女をもしうへ涙ぬや強まえ乃ごろく
よむへきうち深くたまそまありさうしらうの親まの母

乃おやをなつかしみぬる事なりとなむあまたありける
此男に女乃おやはあはせじといひけれどいひかはしてけれ
と物にかき家にかへりて男乃許に女を親よりとの給なり
けるかくてもいはへなどおほくぬる
人乃子なる事をおもへばいとおほくはかなき事
ひとりおいたる事をおもひて
物いひおきなどもしけるによりてのちもおやこ乃女をおひ
これ男ちかき縁をむすびしともそむけるものおほくいひそへ
ぬ男なくもあり
人乃子なる事をおもひてむかしさかひなり物ひ
なかんとおもふを物しくてありけるをさる事半ならん
とおもひぬ家し女をいひなむ事なおもひてなんありける

ぬとかきていひなしきこえけるにまたこひの女なん
よろこびていふなり朝庭に賞をまつの心をさ
まふかりしいかでまうてきたる物のあはれをも報をも
ぬとし乃行てかやうにあはれをもおもひまつるものあり
女を物ひいひそしてまた女をおのれにかひいたし
遂乃字なり儒学史漢のえ遂乃字をひとりとよめり
男ちの縁をむすびとしてふりし抱を物にいひ縁ある物
ほし大和物語に据る通販なりせすしもその時にいは
ひし時もいかんとものいふとおもひしくしくおひ
義に血乃縁ありとおもひてふるにむかしいはいそ
て何おもひよりてし血縁のあるにかゝる乃ちにいふに
とおもひしをりこそおもひけれ

出くいつも雅の剣(つるぎ)の加くうらんたて海さう〳〵の心をも
わくいかなん女をまもりへ度ゝありさまとて女乃かゝへ枕くも
尾相(しさい)那しきを心ひきよわきとてくむかゝ家移よう為
くうれといふものもなかし家とさまとてあやうし海さ
のまくなふなう可しかさ
なまかくまえへはなりなやわたくしまなりなれなめくこ
そいひしうれとかくしをわくしとなりふ母志ん志ちよまえ
入ま乃道を海とひく離(はなれ)てなせるふ乃入をひなうなり
なえ入てくみ乃月のいぬ志ん潮たまりゝまん加うよくいさ
出なりなりむりて志ん日ろ人の今さらをも思うての思ひをなん
しるめいまの花も匂さゝふしきんや
花や海たくきなり女乃花やし枕枝のひくくて道入海へ

又家人乃為をも志のまゝくそう様すよくた法道一宗派
身世ひわきたく未熟しあるをかくしを書実を海めやう
みもむ為おとこ族なこ志ん志ちまくも可紀しかくう
志く辛労しくこしむりのまの人業平を今乃薪(かたぎ)に
なをむりの事人とこま対しく生るき未世まい人なお
そふも涙くぬるもし兆志乃筆法好もし
むりし女たゝかくふてゝまるなりひとりきさいたし美男の
まづしきむらなわく那乃男をなりなきやしき男
なる志ちを乃法くもりまよう人のまぬとわくひくまゝ
うくなりなきふきいてゝしなまとさういたし家まさま
あるかさりぬれそう人のまぬ志んくをなり為りくなりせ
むりくを那くてあるゝ紀まよなむなりもまきなきうの乃わくるる

男山のこと葉なるへしとてまことハ此歌の道なりさ
うちつけの歌を見んとてまなふへく
ふかき心をしらすなり歌乃古意にしるされしかと
先哲なりけるか男業平なりし歌とも男雅とよみし
しかも三代集にもいとまなきあらましとて文にもしるされし以下
年頃くハまよにもまつりてもよみてくらさひたまひき
その程よい歌と思ふのみもさまさまなるへし女のうたにも
男乃歌をわきてなおこりしもさまさまのならひとわかちなさそ
まことに毛詩雎鳩之歌ともいつれか縁故也
佐乃艶なり
むかしの歌よみにてもなかにむまるゝ事業平を引かきな
此家古今十七家業平朝臣の家之歌にもしるされたりと號猶く

御ならひ人はよく乃歌をとりとそれより見てく座りなりける
そのこゝろ乃心をはしまれをみよあしくいへり露乃ふかき河ハそ
袖ふりまてもあかぬはよはりけるを聞あはれなる業平はとこしへ
うちきの中にもおもむき業平にもとあり
きさし野乃心なるへし
むかしの一なかへのむかしの業平ハ見るへしなき花
かつら見る古今まての人のよき哥さふらふ
て業平乃よみ給ひし物語乃作者ハしくるゝ

（朱印）

閨数拾遺第三

むかし男女の交をかるく女をおもひいろ好のさまを上と
女はいたくわるきかたしもなく只上まで喜びとしろ
然らくさりとくいつてそのさかるまじかりかた上をよく
えわらるときにほ中まりかれをそこの目をかりさぞ多
るすかりくえいつそうく好ん
女はいたくわるきかたまで一さのさ家をかまを難むま
し素抱と無く分別し女は只女にはぬすり気を遊
乃すくひやおもしく言ふかれと若の気すらまもこころめ
れなれともなくさ上を見ぬし遊びてくんぬすゐし
さかさくいつそう遊びくわ上をとくそのく抱きもとれ
をぬくまぬと精をくえ汝くかたるさえから難むへ男

梅も花も紀にさかへてうつろひたるとともにいとめでたきさまなりとはべりけれ
梅はちりし二月三日なる事とおなじからず其をもしろくとなく
みる頃にや春の女はさやかに詞の詞のかく
分別しくおもふ人の事をわりおむはりの詞の返り書き
しき枚の字は此所にてもの字は三月美なりぬりきくさる
御命ちくおもいかくし思ゆる給ちくさとを僧なり
出くさしていはん事を給たてひらく今にはなうれん
心ある所に詞おもふ人君女のかくそれはかはる心ありてえぬの
女も又まへて詞のかくて給ふまい給人のかなひたりと今のなる
おもふとあり
物ともかゝらでさぬるをめでおもはるまじ
見も筆者の詞あるを

むかしかやの見こといふみこおはしましけるを
勅撰に賀陽親王は桓武帝第七の皇子也母は多治比氏二女なり
承和元年叙一品貞観十三年十月八日薨七十八業平朝臣はむかし
しるやのみこといふ人にてかゝりみれとしも
その兄に女をおもひ給ひしといかなくかへり給ひけるかも
と人のおめくさかりなるをとりのとも見なるやうなくて人
さいしわかれにはるかにとおしへのかくをとらく
此親は女をおもひしめとも給はしかは次女をめぐる給ふ
御情にて深くおもひしめて業平の人とのみ給へく業平の
気のことなりけるよりや此兄の詞あるにとかく詞の
くるや時なるかなくみえて給ふよりなくなるすや
此とき次むかしにはをかへ給ひ業八坂にもれぬ是ふ物から

あり明くハ海が鳴りし時なるまんちがなく里乃ほゆまくかる
かとよふ流んとおもへとも抱てれきるまくとあわらと
まさぬ乃ぬるくきそんぬしはふ古今貫之より人へ
らきのらくするも
ところしはしめてし歌とやらく
哥さ詠ふりし業平乃ことばとぞいふ機嫌をとりんと
其のこ川をぐく乃世よきハ歌さぞ侍いかりわかうこと云まで
愚見抄よもでしの田るをさ云く時なるれ異なりしと云るハ
哥なりしより古今にいくさくの田を作りしり時なるすぐく
乃田きをほさあくよふ此哥を時なるありてすくの田
長とてし別よる維りよ家のし得り歌云乃なく里れおかるる
まてしるふに川の維りよさ歌よ歌る今まあくとふりき

さる今とふんで　又満よりおもひ世ハしをあく時なるすぐ
乃田きとむへをいひより
時なさ月よきんするの以男逃し
いはりおかぬ志らくの田をる抱執む歌去年里子旅りさ今とハ
ゆうくるへつとひうらるしよりその々いおわほまる
よありとる歌よふよ維ぬるするくハ抱執ゆんとふり
抱志くるふ縁し先業平の心なり
むかしわぐへ歌人よむまの乃ちるむきせんまくよひふとれ
人世しほるきるまされハ思ぞりしきる川あきさくせて女のかう
ぞくらひるんとまてあるず乃男か哥よりわらくをれおしそりゆ
ひとはるきれ
縁へ歌人の世中へ下みへとまき出うるるしふふれ人世しあら

さりとまでし業平ほどのいろごのみにてありしハ人すらも
わかきをとこの恋路のみ妻をいふ女のならひなく契りし
きぬの袖なりけるなり
出ても行き給ひしハ八十人もあり嫁入ハ男の所
へゆくべき人の心のめに秋をぬきて逢ひ給ひしハ其人の思ひかけし
くなりしとくしすも喪乃宮ごもり喪の宮をさだめなくて
ともかく其心をもとめなくと云ふにおもひて鵜飼なくと云ん
と誘ひ人によりて行きたまひしもよりけるもよし
淫泆蕩雑ありて其くにのさかひの限りをもて行きわけ
くわんをもとめなく神の中のかたく浄らくと
ほりもなく心を喪乃宮にかくしてつかへ給ひ
そのわざなりき

此ことろざし中によりこれを心ませんとめぐくよの度さとも
殊よわきに
さ給ひ花に対し其身に向くことあかしと人なもしく
拘はりを持て孫の若人母女乃紅粉をいたさとよめ
も風情もなく一夫を守り雑芸なる行なきくすもし
よめなりしものふかくなきことの業平のことく
あそび洗吟しき業平のしらべあるかな
まくもむなしきそれより度さるゝ業平の歌
乃ぬぐひすくなきもわるべし
むかしれとこゝろへ乃むかしの浄くいとこ乃男よ
そのいたんと思ひなるもういでんとかくやるゝん拘やと
よみまくしぬべき時よかくまそなひしといひなるを

扨やゝ涼しき夜もふけゆくに螢高くとびあがりけれは波もひとつにて
さきに志ふかゝりし事もかなしくおもひ出て物をも思はず
男の涼みてありしかあはれさにおもひよりあはれなるひとり
て物思ひをもしらすしつかなる風吹きかよひけるにつけても
家のあれたる見る事なかりけり
人のむすめ（ママ）よしなく病つきしに男にかくいはんと
ていひてとくめくしとおもふて病つきてはかなくなりけるぞ
なきひとのむすめの跡のこりて男のなさけをしらさん
まきまてあへしまゝを女の親は男へいひて業平へ此
むかしの悲しみを申して殺ちまことに業平のありしを
きこえけるもやむなくさる事にまよひけるにたひ
あはれなる一周もまぬ人の事をもおもひたまひける業平の
かゝりし時は六月下旬の頃なりければひときはあつかりしかは
夕暮の縁端にいてゝは男ひとりたゝずみて簀子にゐたりけるに
夜もふけゆく六月晦日の夜もふけゆくにしたかひてやゝ涼しき風の吹て時ならぬ
螢のあまたとびかひけるを見る面白き所となりて
風情（ふぜい）かなしきにたへかねてかの歌や
ゆく螢雲のうへまていぬへくは秋風ふくと雁につけこせ
後撰（ごせん）集には此歌を業平の哥とて入られたるとかや
ありしやまとの夜のひとつのかたちの哀をしられたる
暮れかたの秋ふきてもむかしの風をおもひて仲秋の
天（そら）のやうにかゝる螢がとふにもまさりて哀なる
聴螢知秋楊柳風高落葉秋夕殿螢飛思悄然
孤燈挑尽未成眠なとの類なるを落ぬことにもおもひあはすへし

ときいふべき事なり
く逢ざる夜乃月暮し在りむ逢ハそれとなく有て物そうなし文
此方ハこの歌のこゝろにはなんともおなじ心にひとしき人にハ
おもはゆくひかはれくなしうきて此方なるべし見くら
しすまして後まの嫁の見くてし物くすくハ母につまりく
よむ也此方をこくなくしていふ方なれバ此の歌しよし此女な
きらしむかへるしこそなかきこともとおまへを極めて心へよかよ
く物らとふ人乃いふにハあはれハなかにもとも媒よせんよりて
そわらぬそれとしなくもの事にてたゞ世乃中乃を
常にすすむるに仲人媒妁をせんする家なんとも
むかし物語にいへるハ兼ねてもせらがらの家ぞ極めてぬふ
見ひらきぬ人乃国へゆきたるにハとめて逢ひしとなれバをひく別
にかき抜りすべく逢ひせざる事ぞにも浅からん見ん對面をなく
待見へにうらうの心まやしきひらかんとゆくにそひてわひ
てきれ猶也世の中若き人乃心をもとむるまじ逢ゆ事かへしえれも
乃よしそわりましくいいなりくまでよわんくるなる
うるさく數とも老業平乃友なり朋友乃ものもさめにハ
親子よりもむつましき親しき人の国へゆきたる人への国他
国へ経よなにもむくまて一経けて年去る国をもその年なり
在原乃むすめのすふなるべしたりはすまい人の遠国へ下るにも
そまへかうも待見べくもなきせるみの中よりも任
うらみしも詩にも一日不見如三秋兮といふなりめる詠
逢たき心をめへきわまりしく對面せずくめるまじきもの
とみゆるし嫁ふなるべし

勝るときも相撲にまくるにをしへる時なくまへハ相手なきにより
志まくハ勝んとするときも相撲しても負くる時なくまへハ出きる
相も又き乃たすくるの外と云ふなり
昔男ねんごろにいかでと思ふ女ありけりされどこの男を
あだなりと聞てつれなさのみまさりつゝいへる
おほぬさの引手あまたに成ぬれハ思へどえこそ頼まざりけれ
大ぬさとハ祓(はらひ)の具(ぐ)也これを手ごとにとりてなでものなり何
まねかれ引手多かるによりて頼まれぬなり
返し
おほぬさと名にこそたてれ流れてもつゐによる瀬ハありといふものを
大ぬさをわが身にたとへて引手あまたハわれもさう様(さう)なれど
あすか瀬ハよるせありわれハよるせありとそ

といへる哥なり
むかし男ありけりむまのはなむけせんとて人を待けるに
こざりければ
餞(はなむけ)ハ旅人によるのたびにむまのはなむけせんとて待けることなり
今ぞしる苦しき物と人またん里をばかれずとふべかりけり
此哥ハ古今集第十八に紀利貞(きのとしさだ)が阿波の(すけ)にまかりける時にむまのはなむけせんとてけふといひおくりける
時にここかしこにまかりありきて夜ふくるまで見
えざりければつかはしける業平の哥のうちにあり
哥の心ハ我も人を待てハくるしき事を知て人の許へ
いつとてもかれずかよふべかりけるとくやしくおもふ心

よ頭悪なる也此句法たわれ侍りし
むかしおとこいもうとのいとおかしげなりけるを見をりて
うらわかみねよげに見ゆる若草を人のむすばんことをしぞ思ふ
と聞えけるは業平の妹をおさなきよりなく殊にいとおしみける
いもうとを不便におもひて懐艶すていふまじき詞をきかせたる
業平の是よりもせうくめるくわ給ふを聞きて妹をば細な
しと見まほしき人なれば万葉にも見えし後にも妻とも
ひろくやわらかにすこしく見えたるに此歌も見えおりたり
とやのべ給ふなり
女一宮のおさなめ詞にちかしといふの故ぞう物かく地をも見給ふ所
法統初草をかめつらしがまるいちんにくきを見るる字を見けり
と称して大切にいつくしみ給ひけるを見たるに教へしかた家氏法
ぎまろよ句に其歌の君一家乃文字に綴をまぜ給ひ
かう附らう物語といひかうひめ君をさまして出て
いとさうと云つも見るに絵とりわかせたる事をわたられと
を此の君ん心をよく思ふ語にし其あり一条家の心
なくよ父母を横すれば其身のしたるになりし行動拘撿深
氏まくば好色をもむとせざとも毛詩三百篇を男女共に
るをいへく政乃なりとせりともそとものせるすめるに女
にと云故をまして好色の事か給むさしくいはる爰女
未法乃曲をもなくそれなりる梵網経をまてよも
てう鏡梵網経十重禁戒之中第二婬戒云不択畜
生乃至母女姉妹六親行婬無慈悲心者菩薩波
羅夷罪と云をみれば身のまはにひいさるなり法の戒めいさめ

ときさんあるにまうるとものあり世にみな人必もいつにまをよく
しらぐむへきらのこと云縁ありあき衰をあらひよ中といい
わしとよんみを付く形末を見ひとつ下の後に露顕さるこし
うらあくと庭に徽しく猿よ接[illegible]しいまうらんにの
見らく西く武勇とは見よ[illegible]ろうきを
むかし男あらぬ婚むる人をこうかなく
あるのことと必法しまとうきぬ見えぬ人をおりかあとのかへ
卵をひとのまのんもきへつらくありがてし百乃卵をか
さねらるのまてれ[illegible]を云し世君のあぶるすべ
と思ふ卵とも云文選乃注に説苑を引晋平公が時に九
層乃臺を作くるに荀息がいさめんとて臣ハ
よく碁子を十二かさねてもよて卵九つをかさぬるて

と必まうして云平公の曰うまさあやうからすと荀息曰こ
れあやうからずと云其九層の臺を作くに百姓を煩たまさ
せたまふはこのやうなあやうからすと云平公の叙疑しく臺を
作らすとむさり文選乃注には平公を霊公として碁子を
の衛あると云ものを孫息として記したまふなり棋孫
乃方よりあかしきる後しさらすよ云したとひきなう
さるへ猿り[illegible]ぬ人をみよと云ものはかしまし[illegible]
といへらりくまも
わき露の清のころくもまぬへしされはこれあさとのとんの
電光朝露なとわざきるるこれよこり露も[illegible]
てし日影に清く猶らぬ[illegible]しきぜんわき露も消猶らくを
おらさぬあるし[illegible]をと[illegible]んと云[illegible]をわくこらうはさを

おもふ人ものにはきともあるは大方の世をはなれたる身と
奥(おく)なるおとこの心にかなはぬ故にかゝる事いふなるなり

又花とて
吹風によりて花は散る物なれはこのころ人なれて猶を
今年桜(のきろう)咲たちてきずしくてまたかくしも去年(こぞ)のさくら
がなふるちるゆへうきにはのこるはなくとも人の
心をそのまゝにかくしとゞむる去年の桜といふ人もあり一年こし
ていつるも色うつりの花を盛(さかり)にたゝへてもふくをわする
のこゝろに人のこゝろを卿旧年花[illegible]後去[illegible]花人の心

又女遊し
物の上かゝるくるまにも花のかは桜さぬ人をも招くなりけり
経文亦如蚕[illegible]語昏語合とあるなりとし

みれとて
わがよとも色ある花ひとちる花にはまたともしとなどゆるらん
花のよかはいなみちのをしはなはくまかり日待の桜は山
のえのこしものかすよりもひとしめたるをちる花の色
しもちるは桜ちるよりもの種ありしてもあかれちるに
待つもあくらにちるかせをちるさものなり
わかくへかこまはしろのおとこ女乃悪(あく)はわらはしからす
すかへし
物乃悩みの頼も悪はわらはも身をおさめましたるく好(かう)
文(もん)をも別くわかるくその心よろしのことなり
むかし男人のお載(さい)に菊(きく)人なるよ
うつしうへる秋も河やさうさん花をちゝめぬさへかれぬや

うへしう無ハ菊酒(きくしゆ)しうへんとうへんなうへとゐへんでも長秋を
きこえ侍る服(ふく)なし菊花をうかべて飲ときハ秋のあいだへんじハ
いさゝかもとゝこほらぬやうにとて今もまへうきと花とて茂(ちう)ともに祝乃
うるはしきことまじ寄とよ秋万歳となへしとゐふも人の
花なて植(うゑ)へん゛めでたきことなれとも用てをすむへし
むかし男わりなき人のもとへさかづきちかひつかはしける
なるへつかはす

かさりちすれちゆのさゝせ糸(いと)なくあらく巻(まき)たるを指当(さしあて)の
粽(ちまき)なとゝいひうるゝやうに天福乃ひよりかざかりちかひつかはる
紙やめり煮ハぬきよまそて海にひたし飯ハ節日に出しくらべてゐとのさ
あやめんまく粽(ちまき)をまうらすなげき其なふハあやめをさ崇(しやう)せる
日なれハゆくいふりすいかさまちゆすれと、おもなせるそ射(い)しむ

つまをかくと沼に海よりひたしくちまきをさしくると粽をまゐらする
名将よりおくく稍(う)をまちくく餅(もち)をたゞるまゝ指当(い)の十
八五月のまちハさるさきのまゝ粽(ちまき)と山菱(きび)乃節(こ)にへくとを
さくさしとすん匠りなる
むかし男あひしれる女にあひてく拘縁すくもる絹よりも先鳴気しを
親(しん)るとんよれぬく山菱ととを匙ハいさおひわり細(さい)く紙
ふくとのかさりせんされ様多くらんよ紙ひうて紀り
あへ家んさいそとわり御し
いそて久なるの鳴らん人し匙を精りふにちくく秋ふゆきさよ
紙ひかて紀人よわふ秋乃ふく家様多くさふいうく久なる
のあくらんとうあわりふるまく秋しふ営よくいふ家
さ海なる鳴(び)おもきそえご(ごうごん)乃紗乃家え絵(せん)て安(けい)うる秋を

須多さ尓いよゝゝきぬ座らよおもひまさるなる尓庵し
縫精張つまりにけるとし
むかし男津まさなりける尓女にいひ座りける
紀座らぬ蒼猿をこゝろぬりと母八おもひ見まする房やをらん
多ころ天猿乃女によそたのむとおもふ乃心八座らもおし
蒼ふて心字のむらすそをす紀よ蒼母をおもひしく章
翁をりかまくこ紀にまゆとろ衣母さりしよ房の起て
なりと山家にて岩き乃天津空なる房すまく八ふまへ入らうを
おもひ乃露しそをくらんといふをとゞめて見まいんおら
家くなり房やの座の字によおくろくたろおり猿撰母る
おか門空すまるとはらおきしふなるを
むかし男おもひろきてき女乃えろうおもしうおろうくのよふ

頃よ家よ女ふ多えろう文庵りけ紀をいふ
思ふまゝ八おのまゝをさら染んどゝの戀乳おふりと紀教すまて心る尓
そおくよ紀をそ津乃抱とをおもひそ紀をさまくさらめて出家さ
まはりらこさ紀たちくいひおきさる乙乃戀おもり
こふ女のすよ家とあり　よし野ほりや人そ津らう
めそやくいひてしこゝろさまとましし心乃らんを
むかしおとこ婦しくおもひおきく見ひくおまうく
家種を蒼まの藤よおる月ともを蓋ま八法也の座をらあり
ふくおもひおきてくむ八造次顛沛二六時中おり詞
気漢切ありをそほさくらしくゝは岩よお熟せぬ楷
あまどもふ家んのまるをおうりたさ門福つらう家ゐ
よむ尓ある人し家種をといふ芸林の夕ぞをらおりゐ家

とくく見えまじき露ばかりも又見えぬ神も物なれはふかく
浅く見えなれし器ほどあまたありて久しくありて八岐に見え
いかりはらぬ神をまき器の底より出くる事八岐に来の露
ありても恨るまじくときはわかうんとくるれその羽衣ありとて
むかし男人しるべぬ物なりひとり済ます人にかなしとて
思ひねわれまでくるをもやとりて給はりけるを
又文字の源よき年頃いふきにせんと思ひさえれとも
なかなかひとまくうちあくるよしなすに辛労しく
年頃をさりとてもまた帰らるまをとぶ給はるに
親じくよめる年頃をかたきまで男をいてめぐとは
くし川まてとひ来たりて打迎しく程りひき
ひねとえりしひとり見えしいへりけり

むかしは清らかなる女このにするおしなべても思ふといふ事いかにい
思ひけるくるのものなりこのとめりけるさるもとにふかく
さる紀安をさる家の中なりまりて八海うらんとぞ心男のお
家をみてくいとうのもとの艶のしまさやとそあわれなるなく
入ると見えし八つ男子を見とやくれなくれけまし八
古事に伊予親王の女とにまいらする女の
するあり桓武の御女に高津内親王下ありておもし浅き
その女よちかのりや斎子女王種子仲野内親王なと
あらそいひかる綱むく開さるやんごとなく葉平の
女文の艶なりひょんなきかなしくまなり思ひけるよちとせ
弥の紀子なるは女房見に桓武天皇女わさて
思の京に従い平城淳和の綏親王の紀わ

それ業平をゆかんとのさうしもあるへしまたある紀女を細やかに
女さかりをやはらかに人乃女とさし出かんとしてかくこそ神無月八日
不乃民の田をとる所たるしる人業平の情深きをいひなる
人ことく思ふまていしたひしことに乃ち紀氏の業
平乃家居に妻わかちくさりんとせるを女のかよふるや此
潜桃花の屋ろに書てせり
わまよ人のりほとまいて世の露なれや絶えん人乃すゑ逢ませぬ
古今集十八の巻に人あしもきれ不も業平の女ちうくれたるを
女乃ちうめくあるじのすえんにかさへくわまよ人りといふ
あるしも我く人もかま表をいて世の露すそしりかる人を
兄ろく人の思ひま川ませぬとあり
といひくこ乃うやよおりよのゝききぬとなれそれおもしと
菩薩生く悪心さる発起乃ちまてきれいのますを鬼のまへくありける
菩すよわまよおまいてまとらもくいへるし鬼といふ女といふ
菩薩生く院まてる屋をのうまあて業を女とも乃わりま
すのさうくかれものますも姚せもよあり久女を鬼といふへ
抜いに業平悪風うすよ兄ちろくのわくちが原のくろ
さうよ秋ふうりまいつるといへまて波とりろ兄ちろ乃国ちくそれ
非くろほうとも云あよ重之うい女うしとはあくわりと云
ほくろくいひさほうりしうるとも女乃みをわれ女といふと兄そ
あり背中よ大聊ほ経典の文筋すも釈迦大士詞を
かゝりし釈迦大士曰女人地獄使能断仏種子外面似
菩薩内心如夜叉羅刹射門徒衣服不見女人と
下ハ略をす

とくうんてしありける山女とかひろちんとしひとるれども
おもは田うらんとい、あつき雅しさもなくちうりとし
うちまひくれちかひとやすき申せハ家を曰けるよゆかりし地を
さむけきよおちかひろやとし二かようよ家も同しせん物
そとすり出舟雁鴻や
むかしおとこ京をいてゝおもひけんもんかし山よたち衣を
おもひやりなく
おもとこ京やもうちんとしてうとしいふ業平左遷の何ぞ哉
すまの今せうさかりとし山里にまうちくさへの宿りしめけん
後々わくいふかり嫁撰まて人業平とおなじそ[illegible]の人のさくて
わかり後成て由縁い川をさら身うとおもてうら後成てもさ
まひくうかせうくさへの山里よ住まるく居る伝の月
うみ月今またく[illegible]のつま人宿の月るその世ま人たちめ
なからひのちの卿
かくしきのいくこ[illegible]てもよいりうまそれハおちてよあそ
うちみともくい男いて
うく抱いてくやうんて隠居せんと思へとも不平ありく抱
思ひの病気とするまて後入しるとまり両人よあそ
見及ひ各々遷両乃ふかすり後入せうまれよえておりてふあ
そこくて産生せうや占後宿縁の生涯あすすゝめわり
親しき人よ露でなく那の天汲をまくうる母のかひの人はくう
あやそく出てくいさく出てきむ里ハよ乃は々の家すのくいに
らし天汲乃とまてらる母の上れ常すくそおもうんと
こうの家を灌洗んとりふんといさ出く即ちのそまむん

業平なり造次顚沛にもわすれぬはよしあしにつけ
古人もさだんで平生なりけりべきうやな古今集くらこの
歌こそ誠なりけれ
むかし男ありけり又ほかにやそかしく歌をよみたりけり
そのかたへいひおこせけるを見てもまたよみたりて人々に伝へて
人の心もいはまほしく男宇佐の使ひにゆくといへるもなほ
其くさの志ぞうの身人をかめんあはれなることのほかなれば
なれるはわが心を世にもてあそびのまじといひたれば
ふかき事くいてかりなるふさはしれなりなるたちものぞまるく
宇佐乃使ひそうしく勅使古今のとも出て都にかへる
まるやに此をいふんどはまたあるもとそくさ業平の家
それとかはとさずやまずなし好色のしへもとりかへぬ身

乃好みもかりやまあらはたゞなものといふ人に独もその名かゝり
あらんものもいふくみえんといふ人のまはれなばこれ
事はそのいふすでそれは詠さうく人の国へゆくしけむを
こゝに宇佐の使まく業平宇佐の使ひよ下るなり趣
別体代は一夜彼こゝ時なく和気の清丸が子引
縁あるとそのさの彼よ事下りて不義し伊上古
宇佐へも志ざく使ひのあくては時を勅使の至
事はき八使ひいすく行くのまことに神
勅よりくさてあらまじし道鏡を孝謙天皇恵美押
勝太政禅師と成りてやれるすもとに向
道鏡を中にし弟をくり事はしく其乃神勅ハと
さかりしやさまて勅使にまかりける時にこそ宇佐へ役

是てしくちかきつゝ家々に代始めの乃ろす兆をみてぐの時よりてしそれ
あらし宵宴には漢代より一度幣乃作まて家に云を
清和乃後代には観音勃ゆやしわり我国乃志そうの
歌人乃さらうの國なるへし中國色なるへき其の志そう
の歌人総花し織学乃歌会并によ志うらの歌はくら
も宮し勅使乃下の時祝くを宴あく使うすひを取し
登遊すでもろもろの如くまで行よおめてく何ろすをおもあい
う詩花宴し云う作よ振ひとも祭云まする何宴志
そうの歌除目あるも詩花乃歌い場なくよりも經る詩
雲よあくのもの程の歌人乃めよ如くあわそ
述をゆるくまたし人あと出ひ為かく葉草乃らくなる
勅使乃條あるまえいる雅もとく世を出きるも詩花そ

うの言葉し古今より万葉均法師とて
さ月まつ花たちはなの香をかけは昔の人乃袖のかそする
古今第三十一かん入しもその哥し又月中といふるさく
卯月とハさかの入れ橘ハ取りてさ月よ咲物なれハ
花橘といひんとくくされまつとそうりきゃて志うくる
人といひんとて昔の人君か袖の香となり我杯よ橘か
昔乃袖か香のこ合せらるゝて漢書よ興哥七六人の恩
橘残る傳に袖の香むして面ちきりするをしひ出すると
といふをおもひ出く海よ如く山よ入くそてあるふ
よろぬをのといひあしよろしくかくの中あくれら
かまてく袖を兩月よしとなりあるへしおとよ從へきあ
まわりてくるよ志てまえんそく恥しうふ遇しいちんやを

そう乃まへのいやしきものくめ小あかりくわふしたるを
ひらんしくわまよするも今は嫁せしをれもうらめしかりん
むかしおもこぼしおもいさらをなる小見ハなをこのむと
いふを知りのちもとをま乃ありする人乃いひきうをゆのく
見も字佐乃役のうすう見えなをこのむ葉竿を刀くく
わまそれそなを好君れをれをのすといふをゆあり蘆中
乃人非たきし
そあ河を深らん人乃いくえハなをよあるていとも乃ちらん
筑おも深河ともりいふも深川をまりらく来るか
よの人ハなを小あらまた見まへからにといふ巧る精りか
くるめちくそうまよ好もく称るも
せんあり

なにはおもわたりすぐれたるをあき澪波乃ぬまにしきうとぞいふあり
なを乃ことをいふをさを那しも葉竿の殊せしみあすを
いふ画さうよ井にてなをぬしうきをへあかとよおさへくよあ
あれそをそくうぬきとう川く出くいたくさせるをぬよハ
なをへらく川あをまつまをとうそとらの刀んまハ流乃了せるへ
あり日絹乃風うみこ向まとをそくとらもく刀んまハ
志実の絹よハわらまと波のぬま衣をきくわるしそみさ
乃なをぬしなをよ川もそうまとあるへし波乃ぬま衣の
しくとぞそあるきうすはとまるへしといふあり風流絹
肥後うわり
後撰恋十大納言経頼下
中なる事とはとをなハなぬ衣るれ絹るる日波をぬまさぬ刑して
円融十九家後出
なにはおもわたりそ出ま衣まま絹波のぬま衣いくよき川らん

此うたハ拾遺乃歌と大和物語にハしるしたまへりし
むかし年ころおとづれざりける女心かはりてやありけん
ありける紀人のかりによはさく人のかれがれなる人によりていれ
てまし見し人のかはりによりてあさくものくだせなさりけり
よきるをはかりけり人のあるへしわるにはいひのまへ八年をせ
さりけりおとこ家をたちさるやとく
そこにはまさりける女業平乃うち人へなどはまさりけり
心かはりおくや妹乃かたき時に于そはひおきをとたちそら
ちはりくまそ人紀とまし見し人のうへ業平のおや
かくも世なりしなまきこず志てる母や
毎人乃句ひいはづきくる歌おもひろとをきよくる那
家男之く業くむかし乃かはひといはくへ紀らん歌すると

あはれちりし桜さきの枝に折ゆるとせ
といふをいひてはづかしと思ひていひおこせたる也
いつへをせぬといふ人を桜乃はなにみたてゝ見えたまへり
たまひをかくて
此詞花ハ紀有常か娘の家へしあるじかなかなるを見るとハ業
平の男業平がさそひ家男乃京をさそさ折ふしそ
らんとおもひしく折のみなり
あるやこの家にかはらずやのまへ年月まもと待さりし
家にすむる女をいと道く年月物思て折ひいそがるゝを
るかと云んと、なくまちわびける紀人中ましかりしと云へなと
業平乃家によく出てる女ありまた家を折りやるはのを
とよみてやるもはまさりけるやと思ひ人へ往きそめるより

を恨むるなりとも女をわるくおもひてよめるよろこ姫君と葉室
の女性よお尋ありしが常盤御前の中にも又女性あり
といふべきぬす者くとも世の末にもそれならぬきよからい
浅ちいぬるんとゝもにあらず濱
中納言の家族をとりて世の末にて耻をしのぐところ事をさ
よろこびしにつゝけてもや和歌のし
むかし世の人は君の女いろくに情あらん男によりあひえたくしが
おもくおもへといひ出ん君にあひまゐらする事とて名をいはぬゆ
ゑんなりけるを
世の人の世界をへ　心根にしたがふのみ也　らくし見
んのおとなし色ハあらぬ事ならべし　背うちよ嫁し
ある女のうへにも深くしありぬこぬ意菜物語にいはく

子三人あるよびくわれら事をしたがふの子は情ふかくいふべし座
こぬさふくりありき人の家にまゐりて流れてこそいづくらん
と仰けるにいふにはいは女房と美しくてしらぬ人々といひてなさけを
耻しいとくは世の中納言とあらせてしらしと思ひわりな
すしわりきなる家によき事ひてなすくなる乃口をとるまじく
かくくあん思ていへのそれはあえましう乃くえて縁をよ事あり
さて後れしこと見ゆべきまゝにもなれたちし女婦の中の家の女いまそれ
いかなる人の流れをつゝしみの身のまゝに
此女雅にもあらず古語に女は三人の名あり無正雑誌
不開之溝女とおもひよるし観能より一湍海足のなりき
これ人々いとあまきをすこし上なるもの心しりし中納
よあそせられとねりてなほ中納言をも世の氏まで賀又

の男にあはまほしくいふ心ありけるにわりなくさゝる業平のいやや

百とせにひとゝせたらぬつくもかみとあるは面影(おもかげ)にみゆも

あるがゆへ九十九といふ義にかなふとなんにはつきとす也

しく年乃よりたる女をつくもかみといふなりまた其(それ)を捨(すて)ぬ

不言業平の人をあはれむ情(なさけ)あり又性ありて此の歌によそへ

心ありけるにやといへりしかれども心を藻(も)にすてをらぬ

さる様なる人に江湖(こうこ)藻(さう)すさし

とくいそぎ出かけさきをすくむなかれとかへるをむちよかはるゝく

家にきたりしが人をまちつかれたるに此の女あるせしやうにみえて

あてかたみかたきまでも女がけはしきにてぬるとて

出て行くをしきさま業平乃さまいはんと出て行きしを見て

女のみなくむばらからたちにかゝりてもいそぎ家に来

きたへありけるに此女乃せしかいまみて女の家へゆく業

平乃女の志をかやうにいひしなり

さむしろに衣かたしきこよひもや恋しき人にあはでのみねん

此歌古今集十四にさむしろに衣かたしきこよひもやわがせ

待らん宇治(うぢ)の橋姫とありて下句(しものく)をあらためけるは此歌

今宵(こよひ)もやまく毎夜の絶(たえ)たる思ひある我(われ)をまつらんとさしかへ詞に

て男女乃中を絶たらぬきかの見てぞあり

とたかんなる此男あはれと思ひしに秋にうつり世中

乃まじはりもしくて男女の中をたえぬとおもえぬその

世の人の心にまかせぬ事ありともなきこゝろざしあらはになりたり

まらえん縁(えん)周(しう)せぬ事ありて験(げん)の字にして業平の性(せい)とかく

人は好悪(かうあく)の別(べつ)なくとも此の物に業平よりはなれかたぎめてせぬ

人なりと筆ざんのかめくらきうなするへし源氏物語に源の
待なとの様なり世中事まいる例なり世のならひや
むかし男女んそうにかくてふまざるをせさりしそれをいはく
なりくんおやしき母よりめ家
ひそうにかくしてふまさるをせよハ法くはわりとをさゆる
はやしきに字をせよかくて居りてくれをこむとなり
吹風に家男をさするさハむすて道ひさをもとめ法いう人へ三軸を
我身をも風になさえや勝り風こいはくはもひまよあるに
をりとめ入るの字まえりく孫うひらし風母男をなさえ
こと絶入るくなんものをこえなさえの八乃字に切なる心を

返し

ならをとめぬ風にかあるとを我法道さる見るきとりの諸はめとむへきさ

ひさをとめくいうへなよりみをおさへくおり風をくはまさ
らふさくれぬをのなりさるとめぬ風吹くとをむをくれもの心
さをこむことはゆるしくりとめさせんにまくとそいふなり
世くし物語やきおはりて津の国より女の名にゆるさる道にするわまた
なり物語にやさしきにいはすそうりくるにいとことなりくるも家上に
まさふうひくろは在原なりくるにをとこの御すくいとまくつせき家に
をとこの女あひ日つきまりくるも神こそ女うくゆるされうられ
たる女出たはうにかまさてにむらひをもりくれを女かくさとなりみ
ともかろひまんかくさせそといひなれハ
物語や名物語しく清和法つの法家物語わらくめうつ人
に女を名をゆるされてる禁に名をゆるされて禁に名乃宮名と
いふうすのこ女を名をゆるされてるハ綾織物をさるなり禁に秘

抑そも桓武天皇乃孫にあたり深く
色にいきとほりをおこし彼まことに在原なりける男業
平と云るはゆるさましらる好色第一の人と世にいはゆる
しる人とて流行家ないくもいふことも伊勢物語乃待ハ愛敬
和歌乃道上人事とし業平乃女中将へもゆるさましく
内外ふくめし給ふてるのもん浮へさまなり揺ひなど給
女乃待まく成面一しかの貴類と内心乃もと縁といと
かくしなり身もかろのぬへしらくなすせそといひなさまえ
色々女乃あまりくはし演せ之て愛身の為にあ
しゅくそまことを不倫の能といさめてかつくも愚見母かく
色に片偏なんすのこさとになる事あり
思ふは八雲のことそすの物母くろあふすのし人へハさうそ没うてわまた
家乃ふうを弥之さるもあらハ何まで継絶とうまり
とはひくきうしよりのもの縁へまハ事いの此のきさつしよハ人ある
見るをもあらくの契りぬるされさは女わかひまひくさしへゆ
くきまでなかのよきことくがひくいさ加のひなさまハミの人
やからくまつらひなり
さうし母おわり縁へまでも愛敬不和をあまりきもく窮へお
ほのふあり曹子八流房なりとも色るも旅人のこころをとえて
かくらくの契りあるなり此女おわのまへひくま里へ行きまでハな
まのより彼ことくねわのとく女のさまへゆくことそすよ紀のすわのと家
平の思ふなりさまでもなかの乃よきことくねわふハうちふく
さる和と愚見よわそハさまでさり
陪と然くとの色陪うされ見るふ乃関せとるきまくおくまあ登

いまゝでのおもはぬくるしみハ母一つにあつまりたるやうにおもひて涙に
晩めへそれハ清水にかゝりぬへしとてはゝおとこいへるにせんかたなく
かなしんやめ給へとかと家弟にもやかれといやさらに乃を
松原と清く程よりなく[illegible]のちのこ松原と名れハおん給ふに
うれしきにひとつこひせしといふ人へのくしくなんいふきゝ
ちくへなりまてにいと出て毒ありけるよりもさらにおもふ
糸すらひしめこの松原と名乗りて

清さめくと[illegible]を清きこのころにさい[illegible]ぬる[illegible]
くるる乃外に労しくしてあり[illegible]しまり慈見抜
にハ二条の紀[illegible]忠仁公の[illegible]ハとれ清うさ
も行かよふべきとるそれハ[illegible]なら門とめさしといふ
母くんえらまかるこの里へ行かの神なら門と給ん

てら翌朝房上人へおくりてのちあつかりむすびし房上人貴前
さへじめく房上人にも宮仕しくありありける旦那の坊にも毎
日乃清水寺に宮仕といふものある乃なれなる八百歳
のものを上日上人秋といひし年中をあつかりくさ坊を紀
房と云ふ今そわきまへりて房上人今日ハ朝もよく
清水乃ものを松にありとて宮仕又徒あつきたちありての
よろこび房上人おほき河にハおくへ登盤をならべ畳
をよせくしき又幕あり秋とて座を布すえしも
ありはら業平房上にまでも拝むしく女乃里へ行くゆる日
そく帰りく主房月のころ母く門をおくへなぎ入く秋と
おくに清くかしくあるありく程に乃里ハ紀乃ぎう
さえるも紀之主房家と云ふ清房を清うきよろこびや

身まゐ上せさせ給ふへきにハ家より女孺といふ女をそへて内侍に
乃かみを役ありし侍上人すゞしくして付まゐらする也
後宮職員令曰
殿司
尚殿一人掌供奉輿繖膏沐燈油火燭薪炭事
典殿二人掌同尚殿女孺六人
掃司
尚掃一人掌供奉牀席灑掃鋪設之事
典掃二人掌同尚掃女孺十人
かくさだめおかれしハ葉平の代の事もかはりぬべしといふ
こ侍乃頃のまうけおんなどかんなぎ陰陽師巫覡なん
るれ女房に一ばんをおきしく行ふなり

ふせしと見えし御よせし見そさき祢宜うさをまもりよろしき
古今集十二にも人志ていとのうへ不思議あのへらへ下の句を
ゑうけむとを詠よろしきを歌乃心ハ昔の祢宜が行さそ行き
此の悲しさのいや増されハ祢宜うきむを詠よろうの部と
後撰にしくまひとうあなりあそまふしを家の不思議
ま行めくりすふきを志てぬ見えさ行うの所しなうすゑ教ま
さうま清く悲せしとせしみそ奉そうけさとしそ如せそ
ゆるせうるも乃こ行うさ
とひひくあんいふかるま
じ見てとさがかくちちよくおりまして給のだ御ゐたさ清んぞ
入く清く悲ハいとあうせてしやう給ひと思のうち女うにうする紀
さりくかみよはうりま行うさくとせさいくさあくうあうさきうす

此程こゝにわかくてさまゞゝにもてなし給ふ紀の有常が娘にてありける
ときにもしめしけるに此たびこそと業平しげりしくれけれは此
女のいとこの宮や住む女をかしけれはさまぐゝにうかゞふをめでゝ
相ひとゝろふ事なるしてのみあかしくらしてありけるが

此頃ことに女のいとしめやかに謹で候ふよしかつねを聞にて
勅撰に清和天皇の御時犬之纏嫉妬の事を
風流なる雲の非情此のまゝにて紀
清よみをうけさせ給ふ讒言も美麗にありしくて
紀の非乃ことくまことに深からせ給ひしありけ此より國史
よのさ待りしおかしき事にてありける事とたくせばし
尚く宿世拂しようける業平に思ひかけさせたまひて
からになら紀の女乃ちぎりくとしおもひけるが紀有常の二条の

紀乃周嘆歎しくおもひよりきに紀の業平染殿后のお
こなたすこし家乃ゑり國史にまつりてむ家の頃も紙り
物語しも此れとて此相極のふしせおもしろくかきし紀
及見抄するとゝおもはれり此女のいとこの文をまつ深紀の
御しさせて海くさせけり此はすゝくさせ給ひしとのちを一
親にお文をかくひまなくて里へ帰りとおもひけるとかくて
為り業平の事はこなたのすゑとなりけり又里へ紀
とおもふに此ことしも乃家に移りてそのふるまひへし
そして相目されしも此頃わがさらにおもくはなれ
紀の形を深ら丁のへとれ世にとくてゆるしつゝ
てをいていりける紀の有常ともいさむ禁中へ帰り来て
まいくのちすとのへさら業平をゆるさせ給ひて此女をゑ

おのくさ世のふとあまハ家無けろ人さらぬいくらよ
こあそハ細りこあまで乃るゆうへし志刊ハ責動し
源氏乃の藻に鏡もしの歌ありと称をそ分めも世をハ今ら見
古今に興猶せもを飛ちなでうまりける艶葉によわかくる細き
なりし是ハ北乃物語よ出し蜜乃うら藻に鏡出の二句序
家々え兄る人のなかふおくもと歌くりと申さん為とば乃理
ときまそし人を見を世俗もとざめ給りへてさらす歌し人を
慰さむる和乃勤絶し和ハ世を治め身を修積去しば
女歌ふを様ひ妖しく世俗も慰とし了ある人をも見き
雅さもの分りば前の二条乃為の此河によるる事多く候
あるべくろ候
ときる紀をまへこ乃男ハ人のくれよる事思ひくれさらく絶せい

こ様し猶くふまそて思ひ折りしらくそあそれ様よるひ
なりくまてこ乃女らくよふりあびらそまするてあ歌
ふとハさまをとあひらん求め母をわらてもん源わらぬ
此後物よあびし佛のち旅と源まとて見尾よかく
出し玄恵よ住ゆらくお国とゆのしらりみ葉平いぶくの
くみへ濡れ花とをかをまてし京のくさえ見を思ひく
あるの様まくむきさ濡れ花乃身なるにらくく人の恋よ
里かよふとなすべし北物語出て稀なり葉平下の家
分よ開ふてまたを重ざる家絶し勅撰乃綱あまずよ
をも下まろうよし哀哉いゑそえよふくうるし文登
行乃稼ろや雅と同ふもなし
さる氏と思ひんしそく歌えれはれもわらぬ身を志るまて

女乃もとにまかりてかくしあふ事のこゝろは業平のさかりと
きこえまつりあらんとおもひらん家の方八此世にあるゆゑも
あらぬ祈なりともの心とりみへて
と思ひをかけたることを知しめしあまたはかくしありさま清く人の
国よりはるかくかくこゝふ
て清和天皇の御時此歌を詠める抱地の上の海くかりされはさたまりまつて
んをかゝしは家古今集十三にも人志りもとしわかりさま
とも人丸乃家あり業平のよめる今のいにしへ同じ歌あそこ
あはくらひくるしまや深草の
水の尾の御門すゑへしおもひやらん此まつ染殿乃后ある
里又条乃后とも

閑院左大臣
冬嗣

贈太政大臣
中納言
長良 — 高子 清和后陽成母二条后

順子 文徳母仁明后五条后

良房 忠仁公 号染殿大臣 — 明子 文徳后 清和母 染殿后

此頃に不比等より五条后の明子染殿后八明子と藤原
まかりてかり頼の勅定を水の尾のとも清和の御門の
此天皇の三王後継しものよれとも後に山城の
水尾と云所に隠遁ましくありと云く
廟乃山今こそ水の尾に
むかしおとこ津の国にあるなる人のかよふおとこなたち

ひさしくなかりしのこふかくもえそめぬる花をさへ見んまで八十年にも
のかかるためしなく
ある人紀行に業平朝臣のはしめ〳〵ことのありや
紀行のうち下向しく逍遥なるなり業平兄弟又人々まて
し人々　行平　紀平　有平　大江音人　業平之
難波津をよみしそこ三津乃浦ことによまれやしせとうち海乃海
後撰集七よみしこととかよふそのことかり乃ことこく
を眺望ありて下の心を汲まふ中乃海上ようにひ海波よ
わかて興なる事なくそかへうことして乃跡をおもひ
ひく旅寝しとも見やしよ絵といふ島のえ見るのかすそむ
汲む也くいふるえけさして今新よ旅をも今そとなし
見さわる事なる人くゝくりかなり

むかしおとこせうえうしに由田ふじかうはらへ祥くいはく
乃出屋まさつ紀行によまさ湖の出ッて海乃山を見ん
まてとくりたをかふちゆるやまさおとくこみる
つまくひろえまて雪いとあるうまえ乃も思ふりくる
それを見くゝ乃ゆく人の中にてひらりえるゝ家
前の源氏さと二月縁家の時かありなたて業平や
きの女に雪乃こそまひくらゝ花乃ちやしとしあわゝり
れつるしもびなくちを開たしく春つよ雪のさちやかひく
山里くもく六曲もる紀行としくる女ゆゑ家乃ふ乃心雪花
いとをりしるさゝ見る万株乃ひるなく花のちやし乃
とくしきの女乃ゝくこともこの花ちやしせと歌今
こせりとをりひる煙堤乃ゝ心あそひとの狂雲奴に縷綿も君

かくさいはゝ雲乃晴まくニへ面白し雨後晴光をさそ打しき
津んとまあ家ありつしと称る人ハおもしとおもふ文意ね
無き打とそハへきさなり背景よ附をしそわきまへれか
き逍遥さる附いよろせしはやみくなりくるものさぬ
うかとはふんでも称さく打ひくかくさとらんなあ出らう
無し見ぬえの趣はへきさ承あり
むかし打とこれ家乃出へいきたりも見んよしの歌打吉乃里
も見よしのも無をめよいと打なりし縁く里ハ打ありへゆく
ある人もみよしの瀧としてあめかいふ
家も前乃形見なく実なりたゞすまうしのも無を知と
あらりかくなる縁起をきりしかも打吉乃歌も見んよしの里
打吉乃古歌と打なりしてくりたり

定家
くふそこうままの海をあらうみなありなやまもすまうしのさとも見へよし
乃古歌ともこ縁ありすまうしの歌今ハ無きもしよそのありなをか
乃るらるよ多称よこの粗級なる附おもわかるそし津しん
打漁とく草の花さく秋そわまよとまきの海なるよきも見へよしの瀧
すまよし無くなりもみんよしよ菊乃花さくとすむよハ打
らもとをなるの秋乃景氣をくこしをきよ打鳴る草乃花のさ
く秋とわまえ今まの海へよもこうしのも無なる
数よなりも称さきまろといふいかなり
白菊の句へり難もとち岁よ生て今よし乃まのすくう段
とまめりまられもこあ人くさ無きともありよたり
慈鎮をおこしく此奇よ打よふをわつまりしたれハ騒音
さんよ非もそこふかくも帝をほ液さらあり

むかし男ありけるまたその男伊勢の国よりかりのつかひにいきけるに
此段乃斎宮は文徳附のうち伊勢物語に云斎宮は文あ
せんあまよ此段をもてしかあるを伊勢物語が恬子内親王なり
狩乃使のうむかしを統へ狩をさせんためよ勅使をたてて
らるゝ事国史よのせず疑をふもとかんしたり光孝天皇
あどの御附よ至らく下されたる業平と伊勢尾張両
國乃狩あれ勅使よ行て実録すまさる狩とく同両國く
とめくりあくらるまきるこゝまで乃治吾をもさん為あり此
国すまも一任三年すまく吏務を志いへきまよるまへさる
ものよ至をもきてしむるよ叢任のをなれかにと至を治
みそ又民乃愁あく隠かさんとせさせしめん為し国の
ちる国統裁よあのいもし他任さ代み如此

乃るよ見えうかゝひよせるの子細あるけるの使として
かんさそうろすかるへし
ゝの伊勢の女きなうゝ人乃むやのまひひゝれとを
此人とくいきまんとひたるくをとまきまもむやのよまあり
々ましやくらなんとよくきもきり
むやハ文をきまに怡子内親王と推高親王と一腹しも文徳天皇乃
むやハ名虎か女紀静子とされもを此親と云え清和の
御とこうへし文徳乃継母しさまれ斎宮女恬子しまつりて
業平藤原御へ家礼事ハ御網を加ふさうあるへし親
の字よる網をもてへるよりよろこびおもんを深くまうさあり
あるまいう事も此をもて在ゆかうあうへりはくまて
させけうかくてわんとうるいけり二月ばかり一夜おきて

まゐらせてくわゑんといふハ女をさしていへるわかれをはしめてさとされ
と人目をしのびてまゐらせ候ゑわかれをはりてひさしぶりにあへる人なれバなく
を儀式として女の縁やをちぎりわかるゝ是ハ女人の心をあらためてねひ
しりたりよれとて乃すとふかきことなるなり
そこもとこの世三世来の契みえまくとえまへ縁んぞ結ばれて
ちぎりたり労れ定も結ぶにさがり三日目と云秋葉平
乃下向しまく二日目の朝をまゐらせてあかむとといふなり
あすといふ縁ぞ瀬をやといへるを結ひて瀬河乃まゐらせく
をまたよわかえんとぞ申し三日目の松原なりぬ縁さ
よりまゐらせて見る雲乃上にあるも女をさしてわりしとぞれ
りへらとなくなるも世のならひ夫婦のまことひと
を知縁えば是ハわかえんをもつてのがしなれバ是知縁をさしこ

ばかまよりも候さまとある人見るハ勅使なるにハ雑念か
どにつくべきやうよにもとて結びとなすなりて一刻を定
よろこびおありて一なるなり
おとこをも縁らせさらまゐらせ候のことに申しつくるにせ
ゐよ様のむ縁のなくなるまちいさかひもせずさきへ入
あてらおとこいてまゐらせ候てあめのよめくゝ入てねひ
しりてまうしあはするまくなるよしをかくしてたまはぬ
うらやみあふなり
様乃縁乃なきよう乃浮ひ世太政大臣三条様也古
源氏物語月日とある事なりまゐらせ縁ひ判官ゐまう
しあはすくまの都より丑の三更まくしまゐらせ候
をかたらぬよしうち小夜もねのこゝろ深草翁おわり

結し定まりとともおひゆしるまゝにそれより伊勢へ侍らんさるよ
や高階氏には太神宮よく今に此氏には参宮不許とこ
高階茂範子師尚実者業平乃息なりといふ
おとこいとうれしくて称を祈りよりて侍らめくいふべしこれと
まへ人なやうへき毎しかもねいへとんありしなきしまちを
ま見えあまりある迄てまかて待る女乃かしこりてありて
いふきそんりしる紀んし歌人なとへき毎しをわらぬれ
ちくうまく侘をしてなれう後朝乃歌をやりあるく
秋乃野に笹分し朝の
君やこし我やゆきけんおもほえす夢かうつゝかねてかさめてかと
古今戀十三に入れり名人のよめるといわりこ乃名のた
さえやうし歌や行けんといふ一句をはなれてといふ

まさ来すろくいひのへさらなかり荘子が夢に蝶となりしか
覚て後又蝶が荘子になりしかとよふかりといふ
ねことりいはかなきくよめる
業平しきをれよ夢の中の酔のあはれし恍然とさてうそ好あり
かきくらす心のやみにまとひにき夢うつゝとはこよひさためよ
君やこし我やゆきけんといへる歌のあはれなる事ぞ
とく何ともえかたくもさだめかたし寝てかさめてかと言あり
まさにあり古今にはよひと定めよとあり
よみ人しらず此拾遺集にも此歌を入れて重之とも秋
の夜の夢をたのみてみし夜のかたらましとも
見し夜乃夢を誰にかたらまし
かくみやこにありて出ぬ野をおもひやりてかなしきこと

たひら人しけめくいとくまはちんと思ひて國のさいはさの
家乃さか栄ゆくゆくものはしひはりとさきて秋ひく紅酒乃
乃りつ道へをはしめひとこえ行くゆきも尾張乃くす人
三なんともまうしおとこも人志道を血の液をちすせとえ
あるの秋庭うく此なんとまふかりとよ女なくありいてまと
さり川米乃血よ家せり行くいてゆめりとあまく乃道も
出のこと如く祥物の安交乃坂を道へるとのこさて秋
ひとよさきのこ容姓をうちけりをえてある一よあひ性
らんとまろうのもえんせさるし尾張の女へ祥物乃務たえ
て尾張へ行し一国乃国の務出仕の日数も立て富
女方よりのゐの道をゐおとこ人志道をしとあるゆく
安交乃んそ世のこさり血のあるこころ懇切の下知いん

とくかくいふかるま
かく人のまこ道とぬまぬ恐ありわま
上乃句ありてをまさらんこ法妻縁といさんなまり一
秋あひとこころすみけ頼む紛連家乃たらよまと申し
と年く来なすそのゑ乃さくよはいまりのまとりんしてか
乃も忘をうさけく
はい妻ゐひ柱し縁柱又寺柱無之柱をお縁くとよ役務
まえしまこのりさしへ乃こえんとあんなるく出はくさし
又あふ坂の世さきなさへなん
秋への初くも浅き縁と世にをも又あふるのそとゑへさくさし
業平梅京乃たよあふ坂をさへよあり
とくあくま八尾張の出へ越よかり安交さく名乃尾の由附

文徳天皇の御女恬子内親王と
是は紀の有常が女静子の腹なりけるとぞ

闕疑抄巻第四
むかしおとこ有ける人のかりの使にまかりて大淀のわたり
里にゐたりくいはきさ乃文をかよはしけるに女いひやりける
斎の宮と有ける時にかの里尾張へ行く伊勢へゆかむ
時のかみなりし太かぜにて伊勢尾張の辺のうらうらな
里いつきの宮の文のまちもへ斎宮よめしけるに女童なり
清和へ奉る事なくつゝみもすくまて盛りかゐる人か
忍びあふ事かなやいはそさほくまかりて我がわかれはかり来
斎宮を今一度見たてまつらんと紙を奉りてまたも給はるに参
りとのあひかたき事こそ乃儀しける紀のとをしけるが
ありくる紀の有常小野篁が配所へおもむく時和田
乃原八十島かけてこぎ出ぬと人にはつげよ海士のつり舟

男女といひ又ハ言の葉乃事にもあさかひ乃始也
てみれハ今いくらもあれと言葉ハさてなんとよろこひのいは比
きえ出んとも思ひなからハ始なるべし紀葉閑表ゝる人さまに
世流心を見るめるハ人々の始とハわきま乃はから世よしろ人
させんといふなり
むかし男の歌文字ハ内乃法にはひ世をく事まもらるれとも
ことやよきものといひしか世にもくしろよしを
数寄なることの字にあらハもむ為に花をハ精使乃阿文
いはゆるくらをなしたる使のはく数寄とあらハさくしと
よ葉平ハ為めしあらものよき云を人乃名といふ説
なく数寄なるとといふなる内の法にいひあらわさし
あらんはかりぞ

ちはやふる神乃いかきをこえぬへしおほみやひとの心ぬく神さよ
指遊人丸の言なり　ちはやふる神乃いかきをこえぬへし今
さてよろつ葉まねしくを明し
上句ちはやふる神の様なる神のいかきハこゝろんと
よめるもどき葉平を見んよりさくいふなりいかさまを
ゆるる法教をあへくを紀乃紀と云ふなり大文字人を
雲乃上人を云葉平乃ことなり
おとこ
恋しくさきれも見てやうしちはやふる神のいさむるのなき物に
上句神乃子細なし恋しくハきてみよ人のさそれも見んとよし神乃
いさむるとはするをわかぬとあり天のうけ見て世に陰神陽
神とあらしく人ハ神乃剣たるかよわくとなきなり

むかしおとこ伊勢乃国なりける女にまたえあはでとなりの
国へいくとていみじう恨みけれハ女
女とは斎宮なりける人の事と見るなり此歌乃心は
なり前へ出して記すなり
松はつらくもあらなくにといふは恨くのことも海るなり見んや
大淀乃浦に松生ひあるを女は波乃ことくさらくき
なき恨をやうなりとよみ給ふまでゝも
なしいふ乃ハ此業平の歌といへる恨はすべけれど
もうちに恨みんなれハなとし松と波とにそへてよめるや
大淀の月海とも見て海の波まに流るゝわかれかなし
むかしこゝまてはかなしとせつかなしへてうなわかる
ぬ女乃わかれをも哀ひかる

せうそこ文ハ消息の事にて文すなはち艶書のかず
といふ言葉にてまた詞をかはさぬ心なり
月には見れともよひて逢ぬ月のかつらのごとく思ふ君そなれといふ
月中の桂の如き女を見るとてもかなひ誠によき女とへな
さめぬはこと紙わかりとてもあはぬ物なれはさかしも所詮の
あはてうまれたるも例乃伊勢物語乃抄物乃いはれなし
むかし男女をいひて恨ミく
岩国ふかき所の山にわかれぬ後もわかれぬ目に松根くるひわするゝなる
千山万水を隔て行事ともふ乃かすかす尽にわかれ八海にうつわり
親中に山河を隔てされ共河をへしくるひまよう
とあり万巻にわかれぬ目河はてゝもひまくれとてもおもの句
とへてら例乃伊勢乃抄物乃いはれなき也

むかしおとこ伊勢乃国よりゆくいにきてわかれんとせし人にわかれけるに
かの女をひさしくいたくうらみんとあり
大淀(おほよど)乃海よりそなたへかへりゆくふねをみてうらみぬるはかなきを
かなしといへどもなにとの海よりそなたへふねといひなしてうらみ
あはれなるかなくるしきなみだのそでのうらみとよみけり
またかくしてはいまだはかなさもかなしくもありなましとおもへどもなほうらみぬとなり
これ祇園(ぎをん)のおんまれは業平(なり)伊勢の国にいきてあはんといひ
しる斎宮(さいぐう)乃かたなりける上(の)に斎宮(じよぐう)とかくしてかへりける
あはれむかしをいそぎてよみそへとふみおくり業平のおもかげ
またおもひなさるをおもへばといひのうまれんとよくよめりといふや
なきぬとはなくさむもせう業平乃さしものをかくさしもち(?)縁
ありかなしくもとしてひかりのひしんなり　大淀(おほよど)乃

浦よりかへるあはれなりおもふやうにてかへりゆくものかな
といひてかなしく津まであひまいりし男
うらみはてくるとおもふになしとおもひ上なる乃人は思ひなり
袖ぬれてわかれのうみとてよの海乃かへるをあはれとやまんやうてう
斎宮(じよぐう)のありかへるをあはれにおもひなさけあはれとうらみけるこころ
おもひまたくるとやむまじき歎といふなりと
となる
思ひしものつかのつめし津まであくはなれのうらみをおもひん
かへるに思ひおもはれぬくいひつかのつめし津までな
くかへるめはかへとりゆく不変の心なりされはもとく女の
心さへ不変にしくもてことなくはあはれ乃心の恨(うらみ)しかみら
うそろんわりなきを勤(ど)せし恨(?)といふなる祇園(ぎ)はなかりとまで

さんと海邊乃ありさまゐりといへども心ありへかへりし乃紙
なりと是も葉草をはさめうるなり
ちのうちにいとてむしん玄妙くうちひつしかのくさきから
ぬきて源氏をかきたるとや
又たとこ
涙すそぬまにて志けるせの人乃ほりきへ心を神のしにくう
家紳ろ志わのうちひよそぬまをそ那さ乃にてさん心
の神乃しにくとすらく志わ家といふなり
世ふあるすら紀女ふ那ん
尤面白き趣向や背中に一さひあひらし後にゐふ津まふ
し要文乃もと紀んにあくさるかゆすて西くかんくらう一
秋の野乃まゐく懐姓なし見さう宗論すや葉草乃名

巻乃なかり那ふ無しうる逃撥なりうそれまたは今の為
源氏にいたるまで大部なる物語をほどさされたろうし
掲焉なる流にして文明九丁酉にいたるまで五百九十八
年と寿なりく元慶元年まで文禄の年あまく七百
十九年歟
むかし二条乃后の東宮のみやすん所と申ける時氏神
にまうでたまひけるにこの衆ほりさんへひとかれさ人々
後く紗おろ清みくに輦車より繪をたまくほうう家
春宮乃みやすん所と文の母殿といふ氏神大原野行啓
寛和二年宗院左大臣兼嗣三乃男氏神まうでを勅許
ありけるより藤氏の后宮みな参る乃行啓をも家拾頃
しの乃ちく行啓なりき清らなる葉車ひ時さまざ雅

林まくおもへハ是殊に格式にもみえたれハこゝに出し
物語にも見えて何ともいふべし 但陽成院ハ貞観十一年春
宮にて御降誕 二条后業平ハ貞観六年三月左近の少将
に任せられ其后の行啓の時も供奉ありて其日不参なり此二
月上の卯の日十一月中の子の日にかはりて文徳の御時仁寿元
年始て行はせ給ふ此よしハ藤氏の后宮より行啓の給
ひしよりたち人々の御とも行啓をはしめてまうさせ
たまひけり

大原や小塩の山もけふこそハ神代のこともおもひ出らめ

此の歌くはしく優なる詞にて東宮の御事にや春日行啓の事を
天照太神と春日明神と契りて給ひし御事の御むかしを
思ひ出させ給はんといひて二条の后のはゝかうし人の涙

時に無せしめまたはしめしかハさも神代と
おもひの心あらハ人とかへん物あらハ風のおもかけにて見え
かはせむとするべきものへきをさとして底にふかく付て見ん
ましてんの深き心ありて江次第にも東宮の行啓の
所よのきこえの誉なるも

別記ニ

江次第十四大原野行啓 行啓の五条后明子ヨリ以藤氏
勧学院氏の為ニ車副ニ二条の后高子の姪家車後在
文中将業平ニ和歌を与ニ二条の后の御覧之人記先見之
其ニ密事也

そくはすとかなしとや思ひしかハいにしへ思ひのまへし
むかし田むかしの涙とやもとかへておもひまはしてありし時の母
涙毎に人とやもかへてまつらるゝ家とかれ世をはなれし安福

ちまたく見へせずしろし人々さてきゝ給ひけるをきゝたまひて清
水の川めでたき給ちかくききたりわたりてこちくのさくら給ひて来
りえりけり川たゝく女うのまへによたくく音羽山とさとりよる女
うのまへによろこびて出る所うけ給ふみ見てたるに
田村の丸とも云 諡号を文徳天皇と申奉るなり田邑
山城国愛宕郡に見ゆ さてきこえし清和天皇にてまします田邑の
陵と申す 清和天皇を水尾の陵と申すがごとし 多
賀美子良房公の女なり文徳天皇の女御なりけるぞ
うかふおりしやをまちて安祥寺山科にあり弘法大師の
法弟子恵運僧正の開基なり清和天皇ゆかりの太元の法
宗ち祈りの時仁明天皇の后文徳の御母なり人々さ
女御摂政とく清和の時正月履上人令祈りさせる給

戌令のうち祈りに付戌寺の名ござかりけるにそこちくのかは
くなり山をさしよ堂の中へ入り田向くうち鈴鉦山よ
たふうとこそ出る所なり宸筆見ゆ八流の中頃法弘
る事十九日にわたりく法蔵秘密とあり
うまとなし天狗此所そうりなる薬草の法を行きとや申ま
そうりくかりのおもる祈りよするむ人々をたわりめくなふ
の丸よくさ髪まくまたの心もへわるまでなるとをのみたのむ
さのことなりなるれぬれめさるぬうひなりしよりみんなう
かうけんせるる祈りを八講なりむきめしと葉平ありめかる女
うひなぞう国にひを他ぬうせ世皆学同心なるとめる入た
のうひを他ると源氏よる郡なり後堂寺あるぞを同い
逐形がしと丸んなへり山のうしき出ぞる所うよ力ぞとさる

といふも業平のめでたき歌よみなるを
山のゐの歌によくにたりとやいはむのちの世ともてはやし
山をもちのいはれを行して見えけるにかはらず見えけるから
てうてうかへりけんおもへし松のさき籠山のちくな
歌を引出山をさかへの名のいはれとうたふみやといふ名のさ
波ゆゑにはなれて国ともいふよのちに見えてはなれたるいはれにかりし趣
引あてはめんにも無理あるべし波をとこ時の名にも無理
波は慈愍にひかれし又時代京気の俗をそのまゝに時代
さ海縁く松のひなるべし
とすればさる説いへしなれ難をそしりてあるいはさるを
を見やすきさとかんがへてれしなり
即席の歌は浦によりたる雅をかよひともの序ら紀氏の用意

かくいふものゝ業平の自記とみえたるこのみゆきいへりくこそ
ありしと思ひ時をよりし為ん人のあはれと心すめなりとも也
勘出安藝ちる又系居吹子之建立ちや定かの貞観六
年正月十六日参議八年十二月十六日太政二十一業
平左兵衛七年三月太宰権安藝守如許の
進呈説
むかし白もの業もとゆきゆき常陸おちし海からゝ世まのひとある
多ぬもの見えたるさま安藝ちるまでさからなる大将葛原の流にゆ
ゑといふ人へいはそらくなかにそ見えけさるみゆるくものくかへ
されば山しかの世んしのことをもし海をとさ山しかのいやよ
たきおとしあかしら世まてしくあり浦く流くらまさう
よみうるく歌の名く年く歌ようそ寸は津さらゆる道とちく

たゞかくばかりものおもひにはまさらじと申給ふ
是は中納言の説なり一説くはしき事ハ如此なりけるや
勘解由長官従四位下参議左大臣良相朝臣の
猶三年参議天安二年十二月四日卒常陸の三条右
大臣良相一男山科の禅師人康親王也勘解由人康親
王仁明天皇の御子弾正尹号山科宮貞観元年五月入
道同十四年薨四十二勘解由二年かくなり常陸貞観
八年十二月十六日右大将三十一叢年貞観七年三月右
近衛に任ぜられ参議卒は天安二年にて常は八年数
違なり此の説は後の追贈なるべしいかにもありや
天安二年よりハ河原も後の事なり四条は河原も
後の事にてよりかくいへり不審なり後に

つま物語には弾正の宮人康親王の御事として大ぞうに家
のやう人康親王と禅師と申侍らふるの年にて出家
御後さらぬ人ゝかさしよりは御用なりかくれ不審とも
たへかねて人と逍遥院贈勘解由の卿多賀幾子貞観
十三九廿八卒とあり常陸太守大将に任ぜらるゝ貞観八年
十二月とく叢年なる以貞観七年三月とあるは人康親
王出家貞観元年也同十四年薨とあれは此説によらバ卅れ
の卒せらるゝ貞観十三年よくよく此説によりて考ふ也
勘解由息見えし此説には天安元年十一月十四日に卒にて
ありし後文傳なればおもふはあれとも常陸太大
将に任ぜらるゝ貞観八年なるを叢年なる後も同七年の
末らハ此説乃卒せらるゝ貞観八年に後のこと敷へしとぞ

見ることは絵出ひろめおのづくよろこびのおもしろきはゆるがせにせきとまさ
ることはたいしやう出でくるはる事をいへば文法人のはしめに
さくなく紙やさしく人々みな三条の桜をゆきせし時こさのくはし子
里のなぬによるくろ子ふしおりし給さいしてさらにまつ生花桜を
ゆきさ乃娘有法まりしくわる人乃ちさうしのまゝ人乃刀なき法
なさりしとしまことのさ絵事さまちはせ衣をなんとの絵へ
てみんなはいさんなゆりしくさらによたけるれ
よろのなましは松前席よろ乃寝所をすてのちのあらわれ大
ぬのそこぬなる里の自筆紀氏代々上玉綾畫像僧従弟
一に思慮を忠くう方塚よる方役乃二字をさよみせう
定まる宝絵ちまとろへなりぐべしてなきやいまの字代にかう
うしもあくしくぬくいつくとかりきはけく人乃ちめなれ

なそくるさとも人へきの銀あり二条乃松桜をゆきせし時
紀乃西のみさとれをよ清和天皇西三条右大臣良相
をたは自記亭へ人の母宮の時乃その家の事紀事とは
紀ありくまなりを花をみんなまいりにまいりしゃ勅にて親の
三月廿三日紀季右大臣良相自記亭へ山紀母宮の家にあそ
紀縁あ乃子里のさ波乃衣をみよさきろに紀母宮の
ましまにかりてよ人乃つな月のおさまと人ならま人をいて給こ
乃そのみ禅師の君を泉ちきとうのまゝ仕始へいらまりにとを
まいく来いせんとふり法綾に胴病戚癩疾泉衣入
膏肓にならうせり是も泉ちなぬなるのまち
いくもくちかくてをくさぬこの心ぶしらんは人のちとまさ
まりおれなくくうよ歩くいせ給まる人［illegible］まくよちよう申せ

給ふ刀ハさ乃太刀なる物なり之をかく人の持たる人わが紙にかけを為さ
刀とくすり給ふのくまとこれを付けさくなりける
悪むかし勅云大夫ぞ絵法監学ぞ有る物ぞ律定法監とハ左右察
之大将なる家ぞ大将是をそへさとる有りさいりて
より是両祖刀ぞとりまする祖かなる小見をやりくりて之刀ま
さるまじきなる云こそよ物もハさぞ絵する人しかもろさを
法さる紀存うるあれやとて云ふを人成處しまさき無をさき
刀とくすきまき悪乃くて世無をささときまさき縁をさきるかく
業平乃家の無き下に家絵をかきける
おく法花岩ふうちうる文刀ともぬかれとて付れるりの事をまさて
是うもくを海界人をもろうなるけまとそる家のんを岩に久
てこそ世にかくなり背中人をやるふにるる文刀にてぬきたるなり

かくてくを海界とあるのみてなりなまじとも岩ように遣うくんを
刀なとうなありうるハおもりとも物なり無刀をよるる此岩ハ
ゆよお法ともを文刀にてぬ法の祖をこせなりんぬをうと
乃為し達ハ岩によく遣く刀をぬくさ法をんうやとるを
法縁にて行ぬくとも候の行ようなともさあんとるくろ
ぬかりおりぬらのハふそくくしさまえん岩紙系をせんとお
まふおくにあんさしと岩によくくく系くまとるとれ世を
称わかねともなり業平の家わら乃よふふよくて見まれ
在うのしとハさ家まくるとはよりを紀によくなるよ不行
似合き法面白くよ刀ん出さ達しくろなとなり
とあんへよめりける
むかしうち乃あるふ小刀をこむくまき給ひけるはは一厳よ人ぐ家

よろしからぬはなしかくありける人にそれ乃よしなか
氏の中より親王の生れ給ひ在原行平の御腹に負
阿保親王はむかしまゐらせ給ひて阿保親王の母ハ業平
乃姫よりむかひ給ひて阿保親王のちにおもひたまへハ
行平と行平のこころへたまへりけれハ業平なり亡父
阿保親王の八業平なり後のことを聞くへし
是よりちひろといふ人有けれハかくて其後ハ人さ
是門八番一門と云義なり子孫の行末もわかれ行ハ是
尾よりも廣業と並ひて有ける所の心よ
叶ふなり紀家乃行のちひろき座にて又くわらんとなり
寿命もまた平穏なる税祠なる座にて八拾を迎へて
みなくの昔痛かり時しき夜なか次陰に隠れさせ

然ともちかくに於て大業なきんといふにて
あまハさとかどの刀にて時の人中納乃かたへおかんとひとわかれ
中納言行平乃むすめあれなり
業平好色の人なれハやと人不審しくいつもの勧云
阿保親王の清和天皇八年中納言行平のむすめ延喜十二年三月四十二
むかしをふる人不審の所の人々ともかかる事にて
のちにもしよその目安をなしかる人乃事へおもひしくあれ
さりともとくよみ給ふ
業平の歌を見て鬚下をくいふすりに在原行平に歌を送ふ
不可説勇雅なる人家のおもし業平の歌あり
ぬきて是より其年の中に花あわしかしと出八
古今集第二業平朝臣乃歌を八見えて此とをいひ

若さん志ぬくおもはゝるとつゆく我なきもいはさるハ
祖おりよい法まし八日のま三月の法にもらとまいへるのことよ
見えくも典のしまさそいくこともわしといふ也西向あり海
日ともまよいくことわしとの六お遂まき人あり是ハ言あた
とみえ人のいひとまり毎日冬日よむらひそく積よのひ
く我ふうらおくなるま
むしかたのおんいまうち来をも慶うらなまかものかから
よ六条まるをまよ家といひておりなく法ならくもと給ひたり
祢合月の法くすらかて菓の花らのひさらなるふもかんち
乃ちくされ九西のおりかんこたちおりし海さ付てく秋ひとよさ
きのうしわさひく秋おきもてゆくかとよこえとのくおもし給
こさ然かりむらかのよむらてよ法りまあふらとぬれきされいてふ女の

志ほさまえひあり香くく人のよみおかしけせをそてあるあわぬか
左乃おほいまうち君と融公源融公嵯峨の第十二皇子左大臣
元大納言又十一仁和三年従一位寛平元年輦車七年
八月薨七十三賀茂河乃かたほとりなる六条わたりに川を
来ふみくもなうまゝに積よ六条すでもかも河乃かはら
とかいふ西しき家いとておもしろく河原院是なり菊の花ら
作ろひさかりなるを紅葉のいろいろみえさかりおもしろきおり
そひとあつまり親王家乃み雅よ見んゆるおほくまうけしてくさ
させ給ふなりおかしぬれおさえおかしきあるふかおかしなら業平
の関守かるへしていてなたの君さまて猿のかたよるたりまし
あわれ称のかたよりて大家乃自筆にてともつくいつきき
とかきせり志つま八旬をぬいしまそしるみ竜あけるれや

うかりしものをいふと杜甫ハ流やかりたまの底うちる
地の則よ久ハ是を只底綴ずらんかにて知くある事ども
流ありおてよいつしきの下にいひし鉄主上なまアの下よ
あつまとりいふるあり未だ在よる縁なり須栗院浅池鼓餅
観山縹緲虎猿琉璃映の琴碁副岩色源吹浅若岩雉
鑽砂日波路戯浪琉璃照に河彩琴漆生同浅
なき池雲に伏夜松宿風に二つ竹むもとを浅の
中よる雛派よのまく帰り河原院のうすハ余すなる近ヤ
くよあり数の塩地すてる貢ーすくもありしるあれを
て暖さん也と云なり。
志賀の海よハ津のうきにてくんあさる純よ流りとをる母ハもてよなるちん
こをとらんてきの塩竈母志家る永くいはしむ志のるの

浦よるくきん久ん流りもろの母えこ家よのまてるのうち
かの海母似くうちてくよ海さうなが西風し山居の画夾子髭
もろ波よ恵岩妍岳色得生ご家瀟湘洞庭荻頭奚無
舟海志をたくなし元是冊もしなくまるよ河とや左今よ
見ちのくハいなくるあまとと塩の海の浦まくあのなまうつ
志ら悪之け不を蠣云の失ありしあるよ見く恵海さえ
なくり後のし塩の海乃浦さひくは見もるうるに里わつを
り後のおくの月るあまとし秋のするえれしかの海乃うえ
とまんよとえ久かみちの々月はきらよ名るかあやしくお増し
ろきとと後く松の々るま家流の六十余帖の中よしかう
海の西へ不ハよ似てよあるうちき里ハきん々のおうされさる不
ちゝ世のてくしかうまよい則うこべ人々んとよみつる

此詞は上を毎人ともありかたちのくらへいろさかりと業平
に譲りし雅人のかくを號けて伊勢物語と號す又し津よ此浦乃
名誉ありしてを尊ぶのことも形るべきか
むかしをとこの九たびいまも見えおりしは多くの山さとのあ
なたよりも無躬より小野よ文ありしも年毎乃さくらかな
花さかりをとこ文へおくれりしを此國乃ことさのむま
のことありしに人を涯に上のをくに在て海しありき
惟喬のみこ勢々惟喬文徳天皇第一の御子にて紀静子の名
虎女の子號二小野又二小野宮ともいへり
小野乃文をやむ乃ゐるのこと業平なり
此よへしひとしくありしにりし女の名をも共にをかり
お移んこととをもせしくさのとものこと深く庭中にも方小野にまいりし

ありけるを見るかとこ乃くるを紀さ氏は思ひあひの乃さかりことにお
りし縁しを末乃すら小松をぬくえてを於つくかくしてまさし
てくさ翁しもふくてそなりりとまれりとありける人のよめる
まく人のなりとも述にありし業平の誠ありとくとりやなま
とう大和国は新母ほ文へ行ほ紀よ妾孫親王の子まえ
十よわまうかのく如此諸事なれはいとそうかくいひける人
在中小縁くさくも此あり世は表乃こと縁はのこときうくまし
古今集すえ方紀されは流すると業平よめ詠み見えくら
方は全篇花よ桃花の方ありさん集なれは花をは津らさ
うんと結んなるも咲ぬ迄はそ縁よわく多ましくは流くの
花まれしおりつら度この乃へ風雅なれなとゝて流し後へ
散ちつ迄はみな感ちを花は櫻乃みや心へあり君よ子櫻

乃強くおくはまその心をも宗とするむといへり
とあんなりさまざまな人乃説
なる事なるなり
ちはやぶるといふは極めて久しく遠き事にかゝりひさしきを云
是は業平のおまへに花の盛りにふるをなげきひくよめ
るなりめでたく久しき御代をといふ心なり極を
こそ花のこずゑにも貴賤ともに見つるといふ心にてこそ必ず
乃ことわりを理ともいふ極まりといふなり
そもそも花のうへの雨ちらすといふ事は日くれ侍なりぬ誰とも
なる人の事をさせ聞きたりいひしきをなのでん
とく見ても見れど目にはさの詞ともいふなりぬ也
こよむきの吉野の貴賤のいる見ても乃強ひなりかさのつきう

申すく御まの御のかぎりにいくもを影なくみえて重にて
させこの強くさまたり乃むさしくきこえくて見てさらんなる
見ここにある所は相見てさま業平朝臣とよみける
からくして是のなつ津めまで後いあんおまの乃ちりは尋ねへ侍り
ものめしき七夕川めすくおまさを目をとるかはれ七
夕津めまで後にさうるむといへり
見ここにさぎを見くもて後うて人へ又身まもへそれおま
竜田川ともに流れさせ川にうきわたれる是を
前後に金亭乃わきなえ強くとるすや又洗錦ときこえつ
すや推なるとこしもの流れにまくかのしますに流れわれ強
ふるすゝむまに業平乃こころにて見れ強くひく
流れしたる見強し人時もこそ人をきるよなり　極花ちらん

ちゝあんちゝもとゝく喜て入りきゝくをみんなくよ　四雲
乃縁をとぶ門葉よこれきとめい福める世よこそたゝ人れな
とわるれ宇治の御ほし法親清輔胡民乃言は乃の乃よさゝも
の壇にありしかとも宇治すく河のみ流としいふ髭とき
く云乃家中よのこせく其く赤面て後年へてる
宇治のえしもやまもてこちんいく世よありぬ人の三年人
ころなお文字をまとへうせさうしやさ連つうとあり梵んい
源さらすあり又王荊公が棠記鈎魚宴会鈎ちまとも
業しかまく津りぞ是をほよ入てそれとをとへよみんせし
とく吾らてし云洗思ものに理ありほうの業じ怒の子
をみんく真をさめ志くくき古る母ぞそをそのところするへし
むと世よ一くひきまもと表おく宿りくもと人をわくしとそ抄す

七文そひと所しよこそ宿とせうきんと結入人れて今よ八宿
せうる今り修仏在よ宿りのもとらのそれの中のしとゆりいゆり
か唐りく文よへをうのいぬ釈ふくふをおくさきの抱添しく
ある乃みんこ恋ひく入好のいまんをと十一日乃月もゝくれなん
ともえれうかなんなる乃そのよめ家
久りく文よ乃者瀬此文あり三月十一日乃ゝ也
わら所くよおくて死も月のうく家くう山乃をすもゝく連させもわかん
在今貫十七よなくく家くの武ありけ見たる観王乃今ち此
おそしかせうしといふんあり山乃端すぞくもてかし（謝洗世のこれ此は随に…）
いさぞくかんてくまてしうき
乃こよかなもつこ高中河なるくさ乃ある常
おもき人くうこまもあいつうよ此ぐん山の色をかく行ももいまじを

後撰にも上野冨雄とも絶地続乃縁之山乃端あるく
とおりたるひくくあらんとも御愚見によれる峯をなかく
なかしるへく山もなく平地にみなきよりとあるとあり
むかしる世にかくひまひし宮たる乃月人こまるのかりかし女
おもし後せとなりむかしのえ形乃れさ氷はかうま川豊乃月ご
後へく宝にゆら女中にかり流なく宮志なくいなんとれ
をふに打中こ岩りなる後く女ぞんとく流りもしさつまりこ
乃むきしのうくんいまとありらく
むかしの芸瀬に里ひに歌からのるかや例乃あまし川
も精しあふ女葉平を流候にめさるまありつ後へ文
に漏り後ふ海気なくく乃えなり足流こと
と打ふに打中さあひ線行えんとく流りくさくつまりくらこ

え紙説にんおりくあく且かして云一向に然縁なり且流々と
後せ流りえさぬなりなの飲んいりとなりくくを流流に行れ
庭んきとらも氷に流れん乃縁にかを不ふ女しあふかな也
ふ後庭らく流出家あり花の流ひ術をれ打し
さる氣と女形乃庵し
松むく草にひとむきてふとともせて秋の稚くれ女のやま道あるに
と秋は草に松山むきてふるの草もたて入る流秋乃秋そてもたを
生今の庵のひ流こもらや書宵一刻價千金なま尻
林もしく流のさんとい庵り林乃もとき秋ちん今たきれさう
ありく縕秋の事ハとうふなり　ふく稀に草に門結ぶ志をそ
せしちるふの春の夜かんれ松や
とうえんくゑ附ると庵よひ乃流こもまなりる宮を刀くこ打掛との

おほくわしぬなてなり

三月正當三十日　風光別我苦吟身　共君今夜不須睡　未到曉鐘猶是春　ともかくも今をしみて行しまり業平のうたひさまくはなをしみやしわかしあかさとし

かくしはくおもくはらはからりやゑをおしみひの外ふなり

くしおりしほなくなり

くなしつくハ文徳天皇の御子中にも是ひの別のよれく

しなりけり　惟喬親王は出家承和十四年七月出

家寛平九年二月二十日薨　惟喬ハ文德第一の皇子八

紀名虎のむすめのそへさしとせあぐらく思ひしよ心わよひ

こゝろもくへらまはへみやこをおもひの外とハいひし

む月よおりてぬくまうたんとくなれよおもひてさるれひえ

乃山小野といふ所に籠りて世をのがれすみたまひておはしましけり　むかしつかうまつりし人おもひてまうでけれハ

つれ〳〵といとものがなしくておはしましけれハ

やゝひさしくさふらひていにしへのことなどおもひ出てきこえけり

さてもさふらひてしがなとおもへどおほやけごとゞもありけれハ

えさふらハでゆふぐれにかへるとて

小野よりのぼりけるに小野ハ小原のおくにて家居し

てすみ給ひしハ大原の里より丹波の國への小野にて惟喬

の御座所といふ所なり　小野といふハ比叡の山の西麓なり

それハ小原の奥の小野を云なり見むろの

あいだの宮なり　比叡の南麓にある時おもひ給ひける

をとはむろといふところに寛平法皇の仁和寺にまします

ことなれバ宮にも行給ひて今にゆかりあり

悲しくは絹むき衣ありし世にはあかぬ[illegible]を[illegible]しくかくかくは
世に乃ふるのかならず雨そひえの山のふもとに雲のかゝる[illegible]
思ひやるかなしきも見るも絹よりもあはれなる[illegible]
くらき[illegible]なる人の[illegible]の人にはあるべきにはあらず風
[illegible]なりし[illegible]の[illegible]も[illegible]の[illegible]のらきそれ[illegible]
らく[illegible]しく見るくる人[illegible]ならず[illegible]人乃るの[illegible]なる[illegible]
てあまた[illegible]瀬ならず人[illegible]よりしる今[illegible]ひき[illegible]山
居らしく雲中にさるをおりし[illegible]とものゝ[illegible]なき
[illegible]くうちなる[illegible]へし[illegible]もさうらひくしかとて乃[illegible]
[illegible]人[illegible]よりも[illegible]年も清[illegible]門へ[illegible]人なるより
[illegible]も[illegible]人[illegible]なりされども[illegible]
乃[illegible]のく[illegible]よ[illegible]く[illegible]ん[illegible]なり[illegible]清[illegible]下八乃

[illegible]を[illegible]く[illegible]ありし[illegible]にも[illegible]
[illegible]せんとて[illegible]をさらひ[illegible]人
あるらし[illegible]なり

[illegible]はあとひさや雲[illegible]て[illegible]とて八
[illegible]くさ[illegible]ひてしさう[illegible]ると八[illegible]
[illegible]人[illegible]乃[illegible]
乃[illegible]を雲[illegible]く見[illegible]も
[illegible]の[illegible]や[illegible]雲を[illegible]の[illegible]
[illegible]も[illegible]世をはそ[illegible]かとてく[illegible]
[illegible]乃[illegible]古今の入道逍遙院[illegible]
[illegible]をさのく[illegible]しあらさ[illegible]八ひき[illegible]くて
[illegible]されども[illegible]とも[illegible]ひくこの[illegible]を

桓武乃御むすめにて業平の御母宮にておはしましける
ゆへにはゝみやと申也
むかし於とこありけり身ハいやしなから母なん宮なりけるそれ
長岡といふ所にすみ給ひけり子ハ京に宮仕へし
けれハまうてんとしけれとしはしハえまうてずひとつ子に
さへありけれハいとかなしうし給ひけり
業平乃わかゝりけるにや此歌業平の自記にありて
なかり身を憚しむかし母なん宮なりける家に伊登内親王
乃住給ひけるを京にしもすミへ業平を長岡に住ム
なりけり業平ハ先帝の御子阿保親王乃御子にて
かの君ハ伊登内親王の御腹にハ業平一子なる也
されハ老て其母乃見まくほしくおもひてよめるなり

見まくほしき君かな
とみのことゝてあるを驚の字乃たとへさて見れハ
孝子乃さゆゑあるにちて涙なかしけるにや
老ぬれハさらぬ別のありといへハいよいよ見まくほしき君かな
さらぬ別ハ無常乃事をいふさらぬ乃まゝ不辞してひ
唐職にあくて今ハされとも老ぬれハしれぬ命のほとなれ
からよいよいよく見まくほしくとなり
かの子いたうちなきてよめる
勅云伊登内親王貞観三年九月薨
世中にさらぬ別のなくもがな千代もといのる人の子のため
此一首の心へ母をおもふあまりに世の人へも云る也
きらふハ母乃身をいさめ侍る一切衆生のをやこのため

めぐよくんしと明らかにけるよ家を絶こりまり目連(もくれん)の為
母の為に盂蘭盆(うらぼん)を行(おこな)ひしを見給ふすまじ
むかしはよこそなりけるがらはけるまゐりつきしろ見流れくしれ
さりぬかりくなりむ月よきてかなしきを流りくなりけりはや為の
文流は人しき事は出きたるえるよりくをされとも我心ある
ありてまかりく為ふるよ弟んおりなむ月むかし清けるさけはり令そ
くちうせんしなかはけりくまかりありまりてむ月なる事ハして
為川とくなほりさずひろり雪こかきりしとふりくひま
りもふよ屋ずのもとこ為人ひて雪よふりこあ〱りてらとい
ふと見(ず)母く市ろくなり
愚見 つもらハむ業平のうすと云ハ不用(ふよう)推量(すいりやう)なり
よりはくゆきさりまかりきてうよ業平を母せられ年ま

さまりそく明るせんしなるそくを綴人なり釈印そ沙
源清印也推量(すいりやう)のけるしれつ為まふ附けそもしく法
印よなりきのりやうと内ハ正月なりハひさ清くろひ
統云(とうげん)もふなり
思へとそ名なしりも氏ハめでれをぬ雪の流さるそ家心なる
れもへさもと云ふ文字を大くこまくを成りぬを見るり
出へよもくとふりく云義なり源氏末摘花(すゑつむはな)の巻の初まる
思へとそもなをわかりし又かかの露りきれ行を使
いひ出るを見とひまりくハ出へ北家よ文流の人を主
も力をまくふりすの為ひをかを主ハいと海中さんと見ふ
よ雪乃らかまくしくふりく京へ為きしくてもりハさい
実見(じつけん)にわりされとたのみんふ乃さかるの也といり

ともありしまゝに乃ごとにいでゝいでゝわたりまかれずよくは
ぞぬさとく成ますへつまたり
哥のうすもし此哥を感せしまゝく乃るすかなり
むかしいとよき祝ひことりきさ女とあひいつりたり世乃くちや
まうれにも逢ひがたくいひさして居にてまで年経るゝ女のもとに
ありしこゝにきんとや思ひたりんとてもてさすがくやまりたり
まのくちやまたさまハちやをおもいれさるゝいたりいさしとさ
さんさむかしのちぎりをなげしとさんといふなり
今まくまですむ人ハ世にとをわかしまのちさみくれの入ぬまゝハ
若年の契りを結びよりたりしをわすることもなくて年ごろ
まハさらにめぐ失念ありべしやハさすがにいふ義なり
よく居をまたりおもひこもみとあひえをみれぬ文詞へよむ人出けり

おもふ所のありぬ文詞へいはゞ乃ことを聞し海道二条后
あはれなるべし
むかしおとこ津の國むばらのこほりあしやのさとにしるよしして
いきてすみけり昔の哥に
芦屋乃里業平の領知なるべし昔乃哥によみてを
在原乃総領なるべし
あしのやのなだの塩やきいとまなみつげのをぐしもさゝずきにけり
此哥を業平の哥といふハ此哥新古今集第十七雑哥
中に業平乃哥と入たりまことハ業平乃領知なる事ハ細く
下向ありしまゝハ業平乃すみよめる哥を今吟詠せらる事
里也此乃これハ新古今をえらびし間なり撰者院家をしめて
流るゝし出さまし名人奇妙なり此哥をえらぬゆへなむかし

乃すとかくし給ひしよりかんなめるといふ理よりおこりし
百姓は　志賀乃浦（ま）のめうり塩焼（わやき）と浜なるくまのおく
しをりを見るにふしあかりまし八雲郡杵築の下お遠所
里にちかなるをひとしさなりは御炭竈のあくうて社
まくうかんあしゆかるをかれをいふなり
ところかんなるこの里をまことろうちてをなんわやのあきとなひ
ところかんなくなそこの里をまのとくきう作しく続く続なりすて
向ところまくらちてをなんわやのあてこそいひなるとめや
よりうかん川きうら浦緒よりとこなくそこ乃さと紙よのこな
ふとのこさり船る所なりと杉浦せしまうあなりつ流なり
ところかんなるこ切く此里と続なりとまめ絵杉ふくそこの
さとそのこなふるてをなんわやのあきとはいひなる杉日く

今こといふは物語乃地あんとあるをにその名のまはかることかい
くる話の理よりおひる所へり
この於ところまた浪乃へしくまは是れとあまりあくなるの
まきとそれわけあらきれなる此れとの所るところなのさ
あり名まその以へ乃すへ荒海乃かたらよわらひはりまく
いざこ乃山れくさよそてといふ奔門の瀬（せき）あんふのかんとなく
のかくくれるよその浪をみらくし船りきき二十丈
ひろさえよそらなかる衣乃おもくよ去りきぬふいふと門
ためらん風うよなんわりなるふく紀乃うきかちちう
外の杉浦ささくさし出せる衣をもて衣のうへよりて里
うくふ名乃みせうかうよくり乃杉浦さきふゆくにに津とか門
そこ船乃人にふたまて浜をとくわ来かある乃ことなけむ

此男ハ應文流へしるましハ此て業平乃自記とみへし多
里なれバ乃文津へあら時よわたりぬるまてかなら活れ
の活時よや此のさまを左兵衛督の行平と申せしが
なり常にきこえし業平乃兄左兵衛の督行平と業平
乃兄なり此ハ云なり行平ハ左兵衛督と中納言
家の行平ハ貞觀十四年八月廿五日參議ニまて轉ニ中納言
又十七同十五年登ニめらるいさこ乃山のことよめ
る歌を彼乃山のことよめる人あり其頃乃流乃風流
なりしとこそさる縁や登ニ彼山ニ瑚ニ瀧湖白波起
芦乃やのいさごれ山乃そのことよのからく見し布引の瀧
こ瀧物よりとめりを助ぬりと勝ちりと云流もさ
と縁よ妻紳ちかめら絵なりあよらとへるれて

ある人云彼瀧のたかさ二十丈広さ五丈ばかりなる絹を縁
ちえ谷山先織よう縫なる見れば布を縫ぬとふる文體
まわれしゆかしき似ちりもしうき流れなりせうかり
くわゆれ都城建さ塩を絹入一縫なり在るのを先よむ歌
年先よむなり
家在絹ハさあかきとる布のひの乃
わからの今のさあつはあそうとらなる
時よ河さもしく数よひさわわく国々をまてひふかし
て此むくらの今も流ハ下の流にて不越埤なくわれて
流くらものゆかうちくさるハ池に流るゝをやさらを今日の
さらく縁のひのとどう縁のひのらを間なり下句を奇なる
用ら連ぬなき紀の瀧乃と句を切くなれとい流連さるを

むかしは高流(?)満人(?)ありしと聞かされども紙にこひ
しるす事なきにもあらねば句を切てかきしるせる
ものなるべき歳よりし時の物語なり
あるじ清やよむ

業平なり

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに

此歌の糸の精の玉を糸によりてぬきさうたるを袖と見ぬ
こゝろまをつなぐもと糸を見て糸のみだれたるをぬきみだる
人そまろんといひしまなくちるを袖の上に見えしとちら
あこ道ハ袖にはるやかと下句にて卑下せられし
あまなくちるを袖のせまきによるやといひ
かくよめりたれもかくへの人もしからんやまさりしかば

此うたは庵主よみたり

かくへの人もまことのゝやなく業平にまさりしく業平の自己
と見てうちいでしかなよ見て庵主によみけしかなよう人に生るゝ
ものなるべうちゝもとふし業乃尾張(?)ともいはるゝかなせそこに庵主
志く庵主に見る也

ありくみちにくらせしけし家内のものども家のま
庵くる小黒く道ゆきやとらのそこそこそやまハあまの家らうせ
みせ火などくる見ゆるよりあるゝ乃おとと云よむ
布引のたき山より河へや乃里へいふつたふりなんとて
さん河とあし小志らくさこそらくらぬかある家
内のものらより行その庵ん京都よ見てもと雑人と無礼
みな橋とるなと小坂と家主と往らくる隔りなき

家乃寺三種よとわる書物を見るく是ハ誰人乃中務なと
とをそひ津らめきちすへ母く日のくれそろろすくいふ翰飯
乃維持し徐濡宅菊人游らの布すし蔵中ま見るく子
なしむらむりしろかさらすあはわらし八葉草や
ある秋乃星乃河名乃螢ろを書物よむく〱さのわまのれさく出ハ
晴天のかしろ又河名乃螢ろ書物従く乃延去去んさく出ハ
とあり背窓ちるとよのかしうとい毎ろ文字ごとの綾よ
なろやあくわすの御ありとふくハ曲るしさるとよれは
しうとい毎乃孫童ろ又文字ろやいさり出ハと八乃筆とる
同亭の笑なり不紙かめんとく御し乃河名乃加ろろ河
さ乃さくひろと龍ひとろあり作統よ心すみつり作かい
沈まてもろくろふうあり歌をむろくふてめくハ河よ乃やくろ

あたたか作まてあり寄殊須よさ三河あかりうろふか地
とあり　雛風乃ふきさわたるを母あてろ志ろくさそくあり河
らぬろなりんのよさるかろ　河し乃やよかくろや海ふあま
やさく打あひをあひをよるはりて流く
とよ見ろく書物よく八星さぬそ乃秋菊乃風吹くありこいとあの
しれとめく字物乃あのことをいてくう紀見ろる乃あ見人よ
ませくりまてさろひろのさくいゑ乃ふら母さくさぬ世ろく二よ
里こを見ろる趣をあ乃川者よするくかちそ紙打母ひく出
さろうしをふうろも
歌よくりさぬわしや乃書なり津とめく菊乃風
あ吹ハわしさる早雁やう紀見ろをき波よろろひくよ
里さる子見ろかろり見え寝ねと髪すさく乃

らやて芦屋乃里の夜ハ月より外なくゆるまでも見わたされ
つまる玄宗山法皇南乃風より外ころのゆるなくまてし須
しのや乃里高志墓もうしてむなしく作るや
まさぼうかん君が月しふきなどしいふ事ぞ身の為よ八朔まさ紀
わさ川ここらう乃勢力のよ言らうべきさし又海神のつとめ言と
とらえまとありいふハ我まその座の人なりも海神のさまし
安く秘密まうるをあまーとも今目前の世の事人今よりハ何しまさ
ぶしとありわしも何事今この藻と風乃あさましせる八
悪よ未せんあり まさ川らうれきしよりさせつ白砂乃
須をそゆへ家淡路嶋山ともあらを見て波とうきしといゝう
の中人乃あまなくさわのま事つまやなるさや
是を浄瑠の約あり何しやさま事八の中人とといゝう 播州

まの約あり物のほか縁不足がえ抱ありしあハいつくと
あれ奴紙地ふくわういしらぬるんふあり
むらいとよろ何事をあとぬまずうれもとたちとてあの遺
つまてく浮世も見てくるわの中よハひとさ
中年よつまゝ中年年まる三もあるよりそれよ中
ふひとりて業平や
打得ハ浮世をもめてしだまそこれ遊びまた八人の打ひとあるてまれ
じめ文字よつくハんのまつぬあり十の抱七八と云ふ浮世
浮く金言まろうるくわりよむ誰の話をよくつまの繋りくそよ
み人の上まくも悪転わかまてそいまとありさまつまり
ゆへよまの分を捨へおかれの発あきまはあれぬとさぶらひ
年大分刻く物乃ようあさくもいへくあへし道楽なるのしあと

こゝろあるまことの心にゆきかなる月のえわかわりの念にしてくう
ほわりさき歌のすゝもりつりかんなと無きことを観ぜさせて
むかしく後生をねがうして後ようまたなる後よさのを
をのぞくじと云ん也なりそ月をものにむかふよんいとほく仏
し白楽天が酒功賛に月明の業を息に諸法の一擲三年を一様に空くるか
影色にいはりをふかひとあひとしていろくうつて雪の今
かの月はんきさへん
むかしいかなりしぬ物てゝ歌よむことさらさらる人をせう
うたふくおしへ今の
あはれとさもありしやうになる人の心の下
人は花をよみ忘ししかしわち花のく往生の罪よる花の有りせん
及するを見ひ旅よろひしまは後ろ紳乃無く里無く花さ

またそく罪よる花なきや花みせんとありの極もしくそ歌
女の人のみこそ悪しぬまとうこちるる心なり
むかし往生する人をいろくと見ひさらそれはわが建とや
花をひえんさらはあきて極めし無くいはりそを願なく
うましくおもふこゝろうりそれはおもひ極めの極よ結そ
往生する人のひさかるへ人なるを
極楽をそかくてをのみてめわかに女のみこうとわきものよれと
わきと阿弥陀といふをいふは女のみこかなしとありて花をうそ
かくさうるものは句へわきとはいふるすゑわんと云ありわきを
乃歌のし先を悪見よそわきを乃歌のるすを如と阿る
さまとうそ不信用にし法説なり
といふを人はきこゆへし

ふなちくたれめいとこのいかに紀とむかしのことをあるへし
上を尊ぶ人はさる御殿の礼と推量すべうらんや
むかし月日の行さへなけくおとこ三月注こそかくに
ひさへとこそよめりきさ人生るそうく母く月日の
長るをおしくさるふ宝の里にゆへよくてうまれはゆる
なりそふをあらへよあそみてせ月をかこあそぬまく月
日のなるをと云なるとての人よいかあえんくと月日の
くるへなきを紀よあるとも
行舟先来のみちをみるふ八日のあとを見さへあゆふうる
嫁機背三するとへ志くもとうの乃心をぬなりと只今に
ところ月日さへあへと二君さ八中わくあまみ乃あひ
又算ふさへなりるうと春わすわふへよあえましくいさ

渚をよめる月日はながるへしゆふくまてよきへかるまゝなり
うかとい魚の和を切とおの細きの三月乃渚こけりと
云は心を付くる見る人別くわされ小舟ま事なり
むかしさへしさるよき渚へ見て女はすうそことを無
せくよめる
世の中ことを云べ網手をえいそぬるかなるべし
あへたくるあかし小舟いそそひ引綱をしるへしとあるを
万葉よたななし小舟とまちいさ紀舟なりと今おゐ大き
なるみせそすら川をと云小舟をわしの中へ紀へる
ふさふるへ八月とを紀見る人哀傷くるへ引くらしき
鎌倉人の志るさろ子りへあくみぬあぐし小舟と云な
つまあそぬ浪ぞ行とくるしさみるをことさへうれ

あし人はやまひハなきものを
むかしおとこ男ハいのちながくいとなみたる人をおもひのきさ
つきたりきこしめすのこともへおほきなるやわらかなるくおもひ
ておさくおもひ思ひをひとよみける
男さいやしからぬ業平の朝臣下男のいとなみたる人へ男一
る人なりきこしめすのこともへさ一向よさきまもなれ
ねかふせいよくしんぼくしみのさ候なり
わかなくおもひさきへしかぞへなくたの人いかにきこゆるなり
天孫乃世よそわかなくしてせかさきみたひ天照乃
自然乃世さりとも志ながら世ハ後人のさかえるをみて
たれも必定と弘く大きよわかきと先は知なくとも
見こそ來り合法なりしなりあなそへなく平等と云ふ

なり合にはおもひさまへしあひちハ人のいのち御きこえあ
そこにはなくなりしことせ　世中にたのむいやし
みなくなれそめしおもひなりさん　山姫のこころも
うきたるもあらへなくひといのちの短命乃ほどちえ
むかしえらくなるたる世のことえりかやまさん
今の世もかくわきハ其えらくや須きり

闕疑抄第五

むかしおとこありけりいかゝありけんそのおとこすますなりにけ
りのちにおとこありけれと子ある中なりけれはこまかにこそあ
らねと時々物いひをこせけり女かたにゑかく人なりけれは
かきにやれりけるを今のおとこのものすとてひとひふつ
かおこせさりけりかのおとこいとつらくをのかきこゆる
事をはいまゝてたまはねはことはりとおもへと猶人をは恨
みつへき物になんありけるとてろうしてよみてや
れりける時は秋になんありける

此男も女もかはりあり業平の女を離別せらるゝ嫁よ
おとこありけれと絶たる後も女の腹に子ありけれ
は其人の男の方へ時々いひおこせ也女かたはよろつ人の上

えたるをうつくしう　かずならぬ男の身にて及びなき人をおもひかけしと
恨なり給ふころもやかさねてその夜ぬる満の字
之秘図法説には嘲弄の弄の字とみえて
てある也此説は根本説中将のみくは満し
也とある只編しくも落着しかるべしと云
秋の夜は長きものといひて抱ておもひやかなるらちへまさらん
物の数ならぬ今の男に逢ふ人はとの男になしける
なり秋の夜は長きをさへ思ふ高雲にんの橋のゆへ也
言葉を千夜を一夜になずらへて八千夜し寝ばや
あるとも今の男さしく　なしとおもちへかりや
とあんよめりける女かへし
ちくの秋ひとへの世よむもろはめやうすかんちを花ととなかきちれ

秋の夜の千夜を一夜になせりとも　ことば残りて鳥や鳴きなん
ときよくあちかへりくれまへを男の心は涼しもわくる
高抱なり花を紅葉も丹よちるる事を支よ世男君
名すよんをはなんむるすみくあかれを事ある事
あむ〳〵ひゃと高き
むかし二条の后にはつかうまつる男の涙
はつさ常よ見んうかくよを見んうかくを見えよ罪
面しく籾はずくおりひぬめるかもして後りさん
といひ世もあんなひと恐ひくなしよおひあら抱
浪花とくおとゐ
二条の后にはつかうまつる男業平なり前なる殿ゝ
ごく忠仁公よ御みたちかへかなくおりかまへなそく

これハ七月なれバ これハ七月の廿二気節のはじめにあたれバ
あるひハ世のはじめにして はじめより陰陽おのづから男女ハかなら
ひとつになる事ハ決まらぬ天地の気にもあらず 今もなほ定めなく
此ゆへ母めでたくおもふべし
七夕ハ年に一度あふの契なれバ一とせに一度の交りにて其
のならひ家中にも物ごとうまれぬ さて月にも定まらぬ姓ありき
七夕の夜ハ男女ともに今にいたり ものごとのせつなきを思ひ知られ
けふ此よしを此方のよめにもおもひよらず男女の中にある定まり
ぐるべきなるべしと云ふ此事あるべし
むかしおとこありけり 女をおくりて 情をふかくかよひ来るに
しかるにいかなる事やらんおもひ定まらずして おもひおもひ
ありてのちの子は情のありかたによりて女男のよしあしを

これハ年々女の生るゝ事をもって今もある人の心をさ
男女のさきをひとつにして時をしるしあつめて林風に
なりて此男女の時をしるし又ありて年のこゝろをひかへて
かくこれその人をわけて人にまかせることもせられ
よくかれこれの女の世にも縁によりて人母となりて
まことに女のおのづからの生れをひろくせしめん
てうれしきことをせられ
男果母しわるねも人姫を孕みて懐の中にあり
愚見に六月十五日とおそらく六月中旬なり男
母の気をひとつにそろへて生まるゝ也 六月中旬炎気の時
なれバもろもろの時ハ陰陽の勢ありぬるときハそのへん
あふさきのいきどほるに作病なる事多く人の病なれ

いかんともさらくせちあらぬ業平のよしへゆかん
きりなし口舌(くぜつ)をくりかへさるゝも女のなさけひとつをむす
ひを認るわりなきえにしのちきりまち紅葉せん頃よりは
らもされ共さや文結をまてもとのわけいさゝかもなくへし
林のまくいひのかくれもはてまくよそ木の葉かけくはよそきを逢
料風のかな逢ひわかれもはなれんと契りはつる秋の紅葉をも
まもとひくまゝ散る木の葉かけくはよそてたま木のも
のちるもかはゆる江の浪くかわるを見るすりのよくあと
え江を縁(えん)によせくいかなり
とて紀をまくかくとしらん人をこせい是を逢ましくいぬされ
逢そのゝちに川をよるをまくをもてまくてやわらんわりも
てやわらんいかにしてもさらは

上の句よりまた紀つくらくせうりともらくかしこきまで
人をこせる是を逢ましと云眉尾(まゆび)相違(さうい)の逢うしさ共
まくらまのよこもわらはせ結らくまくらくあらくらん
やまてといひをまる紀のまをも今をこせてると云て極やかて
のちのちをまくあるもと云はひをこせてるのちまくはあるはと
云ちるへし此業清のち拘も能んを川まくりかるへしまくて
やわらんわりくてやわらんいかにしてもさらまて業平の女若
紀来をあるは又紀さ逢逢らんわりもさ逢やらん結ちるの
よみらやらん紀来をあるは又あらはと云
からはともちわさのさてをうらくかんのうひをあるさらむく
川か紀とも人君はわいともはれこのまやわらんはをぬも
のまやわらん今まてあかんめともいふなり

海士(あま)乃さわくのことを愚見抄によるにあさりのさわぎといふ人
を呪咀(しゆそ)するなりと云地神第四代彦火々出見尊(ひこほほでみのみこと)と申
神の御子に火闌降命(ほのすそりのみこと)と申奉るは海さち山さち二神さち
うへなし兄弟の御時に釣針(つりばり)をうしなひ給ひしをもとめ給
ふことありてふかく海底にいりて竜宮にいたりしかと海の神と
契をむすびてわたつみの宮に時ありしにその玉をえてかの
神乃ちからによりてふたゝひ上の国へかへり給ひてやうやく
神乃いきほひをえてかのつりばりをとりかへし海
神のちからによりてさわくのみこともかくしてかの
海幸のみことをせめしかは兄のみことつひに
くるしみて日本紀第二巻にのへたるかことくかの
よろこひのさわくとなりてわかくにゝつたへ来るなり
あまのさわくとはかくのことくいへる事なり 兄
火闌降命(ほのすそりのみこと) 自在海幸 弟火々出見尊(ひこほほでみのみこと)自在山幸之家
のことをあらはしてよめる歌なりあまのさわくといへり
かのつりはりのことよりおこれることなり
そもそも此歌よりはしめてあまのさわくといふ事
おほくの歌によみ海底の竜宮へさわくとよむ
ふかくさそひて波をわけ入て息をやすめ
昔(むかし)歌仙達(ろしきたい)の業平の日ひとつ切なる時海士のさわくをよみ
て歌の心をよくしりて昔歌を云ふ百首の歌合
に後成(しゆんぜい)のあまのことを詠む時海士の庭をよみて
侍りきはしめて此歌より歌の心をいひつたへ
きこえあまのさわくとはかくのことくいひならはせる事なり

もろ方て終死むく内きなるたわそら〳〵男とさんと業平
の家のうひうけと家とこと母たよりの死不あて抱あれいともちて
掬りわかりもやわらんと見ひくこゝ此抱絶る程云久るい
為しまるりまへせと出へしきとも詞死云紫を頼といふ金
えうちの人々くまんくそことよんを付べりうし紅人の所
好よ志くくふ為もくり春蟲むく化く意見よけ此字を出され
くりけ此縁よ及ぞさを角くむくはき男もすと云為り母
そそろし男と云くて終死
むかし堀河の於條いまうち男とや いまそうりうり宰平
賀九条の家まくせしきみろ目中将ありなるたされ
勅撰云照高云基経良勲十四年八月廿一日太大臣た
太将二十七良勲十七年四十歳業平十九年正十文経す

中将四十賀不宴堀河の太大臣家九条る四十賀貞
観十七年之中将は時業平るま中将よ経せと将よ
将家とうきろなる人ー
堀死ちらかひくりまいきひくのおんといふるみちまよふかに
古今集部七賀の云すよのくらちらきうひくされかれる
ていたくこと見てこぬ為るるよわきし今云む乃ま人くゑるのま
よ字やうしよとよあらうふと云うの字ぐ白の法賀とり終
よりて世くくおあり後徴へこ家をり終よりり来まろ
り両白きと評せりまてし
むかし於條まお條いまうち男そと笑ゆるおちしくらはら
うりけ川家おとくあうはちろをよ梅の流くら枝よまとを
たりくろてりけ川あとく

太政大臣忠仁公は天安元年二月十九日
太政大臣五十八四月九日従一位二年十一月摂政清和外
祖因二年清和天皇九歳にて位につき給ふ時摂政し
給へりかくて貞観十四年九月二日薨六十九又堀河の太政
大臣とも又染殿のおとゞとも申也忠仁公は諡号也良房と
清和の御つる男業平忠仁公乃御孔なれはにや
歌とのむ元のゐふとれの花は時しもあらぬ物なれとなる
作り枝とすめり今の月の梅の花時分に桜をさされし
時をまたぬとなめり時なしは雑と部して題しらず也忠
仁公を祝家に思ふ元に花を見ては花をし見れはもの思家
そのゝち古今集第十七雑部上題しらずとて人ありと
わりの文字をかへて古流にある人のいふこと也

あさ紀の花はゆかうちきこえのありときに忠仁公の詠草
すこしはあるを見てかく勅のよしをいふ
と称しかくたまはる事もいとかしこくかうしる事給ひ
に詠く給へりきり
此哥を感じて使に禄をたまへる家なり
むかし右近の馬場のひをりの日むかひにたてたりける
車に女のかほの下すだれよりほのかに見えければ中将なりける
男のよみてやりける
ひをりの事私云忠一の説騎射とて騎射ある日をいふ也
騎射の日にあらそふ一条より大宮のにしを
まで右近は左近の馬場の右近あり毎年五月に
あらそひひまにきてひまくたちきそひて二つひるまに家

にきはゝしく三日ハ左近ゆみてひをり四日ハ右近の
ゆみてひをり六日ハ右近のまてくはずひをりをひをり
の日と云ハ中あてく(?)まゆみの時舎人とも褐のわきをひをりくゝる
筋よひをりと云なりわるてゆづひ同体骨子をはるまで
うて依武ちるりある出をまてくはつひをひねりと云物戒
の足袋をうしく装束ハきつくしやうを用ゐし後
被物(かづきもの)ある夜左右近ある場に右おとど座とく近衛中将の
喜座(ござ)ある所にて業平おとど座にはてく女のかの風車
の下すだれより見てとりなけ出とかんなりてや組まりハ顔をくく
てよくも見んもぞくに見えなきりのもかやそのさんなりける(?)
と称はゆるう人大和物語(?)にあそそれ目中おかれ組に出る
よしかんこうるとわそそせり

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくハあやなくけふやながめくらさん
古今集第十一恋歌の一に右近の馬場のひをりの日
むかひにたてたりける車の下すだれより女のかほ
のほのかに見えけれバよみてつかはしける　在原業平朝臣
とありこの心ハ見ずもあらず見もせぬ人とも云
まことに見たるにもあらず又見ぬにもあらずあやなくハ
かひなくながめくらさんと云縁也　返し　よみ人しらず
花をわかむことのことの後の書きあわりし
かへし
しるしらぬなにかあやなくわきていはん思ひのみこそしるべなりけれ
此歌も古今十一の巻に読人しらずとあり物語にハ
知ともしらずともと云人の義なり　思ふハさて思ひのほか

そもそも人のまことといふ大和歌はよろづの事ををさめ力をも
見えぬ鬼神をも哀と感ぜしむる折ふしの言の葉なれば
あやしきわかれとも其まゝに古今にしるしぬの言を
のこりし人へ其まゝに及ぶ道なりける
のちの世まで其しるしありけり
歌によみ置くことなり
むかし相模の猿源氏の若き時とうかなしき事ありし席んで
とき紀の人貫之つかうまつれる言葉をしのぶさまとやいふと
ていふさせのへりしまでも絶えなく
清涼殿の前の御前にわたましても猿源氏と号も清涼
殿と申すもとも猿源氏との後ちるき夜は清涼殿あれ
ひとりみんとする紀貫之されとも言葉を其の言葉

とやいふらく業平の歌集はや内にしんざく業平集の
わらはきやこしぬるんさまことこもあは歌ぶらしくく何にも
あらんむらんとひきころ取り歌集のすゑ義式文
半すみしく常らり歌業に言葉同着なり桜乃集の歌よ
似ると歌ありといひ一に歌よ似ると言葉と常によるや
さまざまの言葉乃取あすくと取くせんかすし只一首に二たびく
此分身しく重へさとまく言ひても歌ふもおかし古今の取
猿丸の言葉のにても清らかまで此方一首二んと世に流
流よくくハあまでの歌よとなくも無沓
言葉よもふる野への八九千に此上とあとも歌ふなりのらもたのもん
そのことよそこと言へれいはまことも歌ふともやあらんといふなりこ
取くだしてもいひ中せい事と此言葉にはあらしと見えハ無

業平り塩竈の色好み乃せんといふなるり
むかし左大臣融公わりなく乃ゆかりひとと云るらん
ま人乃家にうつされしあとを奈良のむかしに在中弁家
原の世のさかりふかりてよりしつらへとされぬるくに白あり
まうきしからうらきけある人のよくうめふ花をさせりくち
栽乃ありしはゝしき家の流まくらうちのつむひに文六す
ちうもなんありくるしれ年経またようむ決てくるおう
のえらかりなるあるしなとさのふと見くありくきハとくへく
よゐ世くるあとりなの乃しハ志らさるせくれ尤ときたひき
まとなるくとつ世くまきたかくなん
行平業平の兄なり海さちう納言参議兼原氏造貞観十二
年正月左中弁十六年将左中弁三代実録廿二十七

に備中権守従四位下美濃権守貞観十七年九月九
日卒文徳実録正三位吉野甲男世伝前大臣学文
なくてありしかとも容義すぐれ文政のかよわしきか人
とちりけふ毎に太刀あつさしと取り花乃かしきひ家の咲
さう花のなきをいふありて催る家にまに柳のちなをひとつ見ゝ道
ちくあり楊乃いともしを云ふるき人ゆゑりろにさを見
まく行平雲客毎くおし附左中弁上さゝをゑりくにえくさ
ふありとまくかゝう人ぬあうのありしとふ云へ上にしありけそ
殿所乃そ人女弁あつさくちゆかの世のひとに今海さちのかひさと
殊乃にみよ給女もめくあきあかりけちとるれ客人の思なる
ふたあけしまうさ行平の容能あり法ぞのゑにくかゝ業平
世に阿かうか宗行平乃容貌と申し余れりハをとさりき

ものと限なるまじとなせ此菊葉平乃日紀とかんかへり
咲殺乃ありしりく為人をわけしてて漢さるる菊のまきかも
菊原忠仁公の業蹟一門よさとありとなり　春日さ咲菊
乃下の宗家の分れして一族さる家乃池の
あらかしもよむかとる事ハ知良さおとしの意へくも出さる
ようやまそうやく菊氏乃るゑよさる事るとゆひくよめるれ
あんひろうとひとつてありけりける
此家乃趣向を序の前よとふかきるところ人をしらんと
云て此家よよをいまんとまうもなきと云なら
むかしおもこありくまも家さへ流さるくまじく世中とおもひ
ありあるまくなる河とかなり安おまかなりて世中をわりくひ
うむしく家のすもありをもちの家の山里よもとかんくるりかく

志さくあらりくまえをよかんかく座りくある
あくさりくしらぬ家とよゆまん人とさとる無事知るせ
世のことあらまも勤弁しく菊識乃ち此ありて天下を表
治もいくもべきるも古今の序よりさとしいる趣向
まるう家をよあさりくしかとくきり人倫としくと礼法を
理をしらさる人そんやさまえて人をおんとおめ国としるなり
家をおゆんきりすは天地をうこくきて徳乃おる人を表あり
さまえわ家乃仁義礼智信をよくしらせる人を
ありうのとよむ人あるハ必ろ理を知へきと云ん世くる家ハ
よめざれども世のことくありとする人と云ありあとをそ
くる親族ありもしかよりまさ旧き他人よりくるる縁
ありよはさとのへくよかんく座りあり次よ祭文と名を

おもふことあひがたし中にもまことは親族(しんぞく)なくは
そむくとも雲にへのゝぬ袖なきとよ乱れしそれ/\とはしりてよ
ほまれならむ/\世紀をむくろを雲よりのかたくぞ紀世を
よそれある後うちそなけれとも文みのかたら山里に入り
法入あり/\とも海るゝ八方紀法ちすなかりしいはにもとを世にすむ
ちまて/\徳後うよそてみつ人うれしと云後のあり妻家(さいかう)乃
世紀のかれあふとうしやこてむひやうなるべし
とちんのひ後りかゞ妻(さい)家(くう)乃家なり
背文(せうわん)によ歌くの保婦が云塚なりしとあり
むかしたとへまくらにこめよさちよのう母く/\わかすゝむ
すくなまふくさ乃力よれなん法へあまの川つまもなき
流あやめやまんなんあかしみち乃法のひ游ひきらふ

人をあひいるゝまなりさく
是之業平 ありはらのなりひらに志ちよりのあめを童蒙(どうもう)を同じ子
とうまくりきら訓釈(くんしやく)しくいるゝ文選(もんぜん)乃なら/\のこゝれとし
実(ぢ)する人とらふあざくしき今よくはる紀ならふくさ流(み)
門仁明天皇とや生るの嗣法(いうぎよ)の後山城深草(ふかくさ)よ乃力なさき家よ
網おくやの川家よよるまちく云なるまんふあやまらやしるめり
なん前よら童蒙(どうもう)あとくの雅よふあやまりとせきら乃かさ
ち忌見(くゑ)母ゐて仁明帝(のミ)の文徳(もんとく)光孝(くわうかう)両天皇などとや下
ありされ世いはきの月なきくとまぬべし
孫める紀乃歳をもらふこゝりと孫めいやちる代をあり海さら
古今集歌十三よ入らうの心を孫める紀の歳と八一
ことしかるゝ人のあひることをいるうるの世におさま乃歳の忌

さて又箱より波しきの義なるは刀のちらんとして波よろしからず
いやしくも我がなかのさるをとぞりいやしき家なり
とありけんくだりのさまなる所のさてはたきさんは
業平の自記と見えたる漁近江県とあるは何あり愚見を
こゝろさてなきことさんにはさてなきにと云なるきとはおそれし
をかり流説にはそのやうにもいふべき事あり其実はおれ拙
太宰乃妻云ふもなかれどおもふ所あるべし
むかしより所の事なくてわすれ難きまゝ人のさくりがたきや
流るゝまでとこそのや抄せしかたきそんなるをもおぼつかなき
つまびらかならざるをおもふところなりとて見るべし
海士よりなる所作子細なく思ひ入れ拙かりしを見ば綱の
いさゝかもなくてあまよりなりて書写の所作の見えぬなり

とありしかれどそのや殊にしるきたんとしてありしとありける
さる人の刀抜きとるといさめられしものゝありけり
世にいふ乃あまりとして小刀のうす不覚くえせんとを親まゝくわ
わまを海人よりせよとよぶりけるゝ海士乃子細あまりえ
めくるゝせよといひし世にしるして我またあめある人にも安身
とゝまめくるゝせしくんをわるゝせしとありけるゝ世は自ら目
大紙通えせぬく紙状さるかならんさありてよれたのむなきとあ
方人をわるゝきく問ふすくてさせぬなり
あまるる舞姿のさまや乃拍子またひろ車よりく世のくるを
来えみんさしく悔り給ひよろりとなん
恥しく思ひくみえさして悔りすみなるべし
母うしきめくてさき悲め命ひとと云ありくさりされは安

白鷺なりとも都にハ名ある清きをよく都によめり一家人々もあるし也
志ら露の清しさも見えぬに我かなら家ハ都乃妹に
見るる事の母を恋ふ也とのぬく人もありなまし哀なること
とい雁りくれにて都めしと思ひ多きこと哀しハいやまさり給ふ也
都ものハ河海に隅日都紀也とよびける人々を業平の
思ひうき旅の心を抑えぬらてひんなる事也其志ハいやまさり
に旅とし武蔵の見えぬといひそうれとも流浪に白露たけ
なしきたらんと云あやまりをに存分によりてたり人をもんさし
えいやまし人にあるとも見る人をきるりと給ひまし
むかしたとへ見ても都の世をえうし子に中からて我
隅田河乃物語也をかく
千里に振扱代々もさうもとる隅田河から都事あるよりへ都へとも

古今和歌集に入りたる詞書に二条乃后の春宮乃みやす
所ときこえける時に御屏風に隅田河より見たちあつれたう
うそうきうを鄙によめる御製乃なかれてよみ
るる紀の文流やさ川らんちとやある紀代々もきられ
多くて河うくまに都みよみえて都と八武蔵性が都と
都人々のきこる武蔵の中に隅田乃せうえうし給ふ
和にまうてく隅田河乃かくなりまくよめ何をきこいれ
池しくなくらんと思見捨にさを細なる波動なるされ
色を終物語なりたる思て河よりてるくを都意をよ
見たるなくこせみ和乃境地なりて縁結をさうなるへ
桜なる乃心を当なるに都めの都なる業平乃都まよろきて
なれやし舟渡し河よ紀繁乃ちりしくれ渡のたらくなる

諸家からひろまりて神代には神字をわかし字など神代に
さへありけれどもまどきてもしかしなく今の如きものにもあらずよ
然りて鳥の跡しるしもて蒼頡の書ありて是より人の心
乃かたち漢国乃書風に神代乃文字なれ前にかなさる
ものわくなるおとこさなりし男乃文に咲ける人々を漏
紀よりことの業原のしゆきこと云人よりひかまさつまことまた
ななかきまれたりをおさくしりへしまえをひひ志られ
いろんやかなにかさりなれば彼かわすなかりし人わかをまくくらせ
てなりなりまめく後とひよりなきまく杜ことの分ある
わくなる中にも業平なりも男乃りにありなり河安業
平乃妹なりしも内裏乃女なせし人丸敏行母なの康女
大鏡九年内紀天平十二年紀大内記能書にて一切経一筆に

かきつゝしめるまゝのありなのよみん中にも後撰集乃うちなる
紀貫之文もおさくなる女の文をかくもせぬなりけりおさく
なりなかも治なりしかに行さして志らりまたはなるのを優も
なりぬんとこともをいひ志らまもまた細なき筆迹の文の
おとは数出なしのうぬくもさきかなりなかはえ文後さ
つまりまえすへきまた内裏乃女中のよめり一向よりかざるな
まうくわるまでこうくよりまぬといふなる御しわんと手くく敏
行八あつ紀のかうありなまたわりしきのほとよかせりく八月お
とさんとなりひらく業平乃文のしとふわんをうきつなりむ
うしの人なんさ伝なり業平乃孫ときをよしあつわかすみて
いふかなとよりんく妹よきさうしあつかすしいふなわき説
ありさればからすると此ほかおくよくなかしらへいふかしとさなく

見んとのと見る人へさきすなり
つれつれのなかめにまさる涙河袖のみひちてあふよしもなし
古今第十三恋三の巻の詞書に業平朝臣の家に侍
りける女のもとによみてつかはしけるとしゆきの朝臣
なかめの心はつれつれとわひしくおもひたるをいふなり
されと女のかへしをなりひらかはりてよみつかはしける
返る事もなくなりけるをさりとてまよはなく女のことを
なりひらよみけり
返しは此おとこ女にかはりて
浅みこそ袖はひつらめ涙河身さへなかるときかはたのまん
此歌の詞書に女の母にかはりてよめる業平の
朝臣とある此歌の心はあさきにこそ袖のみひちぬると

なかれまさりて身をもなかるときかはたのまんと
いへり先生此歌の説を云所は袖のみひちぬるといふを
ん涙さらすよりへのことなりひへしるに源氏物語あふひ
の巻にも六条御息所 袖ぬるゝ恋路とかつしりなからおりたつ
たこのみつからそうき 源氏 浅みにや人はおりたつ
わかかたは身もそほつまてふかき恋路を 此歌の説や
といへれはおとこいはふかきといへるは今あさくおもふて
あさいまこそわれをとおもひはなれるおとこをかなとせさらえて
後のためなりけりわかめのふかきめへきにかんしんまつりひたすら
さいちひわかれての前にふかくしといへるまても我いのちおもふを
ひそかによろこひしてかんしてなれと
まれくにふかうこよひたく秘蔵しるんなりけることを

あせてかん法くはなれど初学乃ためと敏行の歌をもて示せ
く姿乃のかた見遣そんて又剣によらんとして豪考を添てら
ふなりさましとうれたぐるそれも同作なる人ーとは承流
まりさいをひ身乃筆わらいし
能くよ思ひおもてきとひつくき身をもつ雨に濡て波さまう
此方古今第十四よ入らる詞書よ家集のとしゆき敏行
乃業平の出家なりたるの母とおもひしまうく文作りそしそせりき
ふと紀よ合やうて歌乃あうるろ絵あん見えまひ
作らしいかりろる絵出のらく彼女よろえりくよめる業原
乃業平朝臣とあり方乃人ハ織女思ひもせよてなれも
まそもわまえやうまく小そまくの流んてる見んくてる歌の
ありさう能乃稿よ思ひくきとわつハ家せとひくくあり

といかあき身世ある歌そうり波きをといふまり身をもつ歌ハ
おそくなる人ーとは先志てすゝくそそれの歌と見ゆる人ー
とよりんくをまりくれし見ん乃をかきを知おへてくしてよぬ
まうく波とひさふそり
此方のを見てくるきおんをめまてくまてろ挿しゝてくろひさ
くとめるそあり金剛蓮華のよ　歌の上ハこうをもと
とふ歌よ名りかさて来ておくハつりまりやさ
むりし世人乃ん纐纈らく
風吹もとばよ波うきと岩すまや家秋よ乃えく時るれ
と及よとくと及めくいふきわとしの八幡宇よおめりくよ
むまり風吹もとまだしよ流くきて岩乃しく風のゆきの毛
能く御岬くぬ打つきとおく雪狛風波大かうて歌理

ありといへり

と常のことくさにいひけるを聞おひけるおとこ

業平乃女の心これことくさの上によみし徳く云也

夜ゐごとにかはづ乃あまたなく田には水こそまされ雨ハふらねど

よひことは霄(よひ)のまの事なりわかきと夜毎(よごと)といふ心なり

かはつは蛙(かはづ)の事をいふ鳴(なき)しきりてなく時は雨める

ふるを田によるのまさる樋に蛙乃さゝうち

さくる乃まさる樋にこゝそ乃思ひよるまでもあらくその秋に

る淚ぐことを云しそむくの思ひ一すぢのくるすかしと云義

又一説にはいま女乃人のかげくしてわかきの男を母(まま)もい

領よされよまで志らくそむきの紙乃親(く)しく時の紀にある

法(まま)とはそまくの思ひ夫増るとうたあるを深(ふか)く人

おほく故乃思ひよ比さと云義也

むかしおとこ友たちの人をうしなへるかもとにやりける

業平の友なりしが身まかれる人に

花よりも人こそあだになりにけれいづれをさきにこひんとか見し

右今業平十六歳紀有常(ありつね)乃弟紀義行(きのよしゆき)と云

友則(とものり)とも云べし業平の友と見ゆる友乃人なる紀なりとも

人のはかなさを花とさくらに比(くら)べむともとも人はさきにあ

ひ見んとも見ざりし思ひの外なる事なりといへり

むかしおとこみそかにかよふ女ありけりそれがもとより今宵(こよひ)

夢になん見えたまひつるといへりけれハおとこ

思ひあまり出にし魂のあるならん夜ふかく見えばたまむすびせよ

夢なとに見えしこの事ね(ま)たましき魂はゆへありとあるべきこと

忘しく思ふよふなく魂しゐを納はく八くろんでハ
むさとひとしめようし人の魂すく給ひてハ魂結もしらしく波
ドふるすわり具見抜よる人ハ人魂乃とぶをみてハむかしを
流るゝ魂しゐをれねとをもむさとひそとむらしくつ人乃流ちまと
いふを三度ん誦して衣乃下とへ乃流ゝすまをむさとふるのとむ
くしりいひ流ゝ人のゝるゝのきてなをのさ思ひて桜ふうくゑ
ぬのめふ入えん出るる魂しゐすくそてよらん流ちまよむさとひ
ま人とせめく乃しもよう入らく走るもしとあそせら流統よ
わがもる御の井すや入世々ん霊しるのきあんちもう
むかし扨とし定ん乃ヽ紀女のはくよるくなるむよくるさとふ
らふ庭らしまくいひやらるゝ
人のかく衣ろをとふて嫁らし世くるをを送りまゐり

いかし入ハわわゆやそんゝ今そしろはくぬ人をあかるそのとハ
むかしそあらしるゝやらんな紀年やらんしらさとかくしぬ
人をあふゝとそゝのハあめしあし魂もしめふくわんと也
かくし
路撥下ひとのしろしとらるもとをあくよかくろうとし公意をそを今さ
人よ忘しく時々下ひとも乃ひとらそく御といふろら魂下
ひとる今ゆきくよとけるるのあしそ多く乃いかゝのまく
いとひもせしそらもいはまくわんとなりゝくろかとしを
かそうよるくわるもといふるとくある人しほ統よ人世もひる
耳く時ハ常ろとけ噂といへも鼻をひろあり万物ふよも
おひくわときゝてあり
みかし

是にふることをいひし下ひものとくんを人はよくしらん
女乃戀しきにいひしかはねもしてそ下ひもとけしといへるにも
一向よとりわきてくさうしはこゝろにまよひをとりいふとそ
ふる女下ひもを乃よむものあるに頭部ひは深切に必そる
の下紐はとく寐しも時よりまちかうと云をまことしれ気津
事と云なり伊勢物語にもいひし姿つ女の後撰集
哥十一よ入たり　とひとりさへ恋しきときは下紐のとくん
と人をいれとしらさん　後人家集　下紐の結すとおもふときぞな
くよかしらしともわかれをわかふさし物領の哥は下句
おもひせり又婚客お後せり兆去の筆法なりあしむあそさ
人さる所向し光部名葉華乃縁まり
むかし男ありんほよいひちかされ家の女をさ後よありひえも
と女乃戀の過き紫風といひてはもりぬ方よた身ひさよ名り
古今集哥十四きこ人もしもの哥に哥ふらくは上京
の神あり錦繡をさらかくもしく上朧しき婆と古来
様義あそるこ勢あり朱實悪笑緩乃分よるひきたるとや
本よちめへき戀の風よさそてもまてくすそ人をひくたる云
あり祇須人の宗和乃歌にも花を角もひそくちかや
く戀風をいひて是ぬなふぬと云所にことも幽玄なり
むかしおとこをふりめ申くめて
女よもそての時詞
あからぬ命の頓よまちていよかんでもれんなるを葬
又文字によもらぬくろく来女みかきむ云る頓とや
むかし一去乃同よ去経をもてそくわすさ見しほむまはよくわかる

ね今乃ちらゝにてもいつみえしなんとてそれら
是を面白し格乃不ハ定まる人のいふる所ハ先達
よ疑ひぬへきことなりと法説なる
世ゝ仁和乃法皇のせりふ歌よ行平卿のひろき御時今ハさる事ハ
ぎるかく思ひたまひてもなにさへれるまつ乃まニ六十よ年乃よう
うひ母らくさふうも世俗ひろくもちろうさぬの後ょ事かくる家
家の勅撰よ定家卿なり不許雲上之更と多なれ皆載之不
許出とそ定家卿奥書よ行平卿聖自之異と出したるなり
芹河行幸ニて業平卒去して七ケ年後乃ことや業
平一期乃うちとかくもしのをんてよわしきかふ
縁ある光孝ニ而地摂系之後より七条后へ業平乃身の
よのうちとえうる世に摂系之移し出るすゑ在原
氏乃ものなく業平兄弟乃縁者ましてまさ行平卿の例なく
芋加ろそろ芹河乃行幸そ嵯峨天皇の行幸が始な
り後撰集第十五雑一に其の詞書よ嵯峨乃御時の例よ
て芹河よ行幸志給ひる日在原行平の朝臣
山見ゆさ人々ありし芹河乃千代のふるみちあとありけり今
此行幸そ光孝天皇之仁明文徳清和陽成此四代を民
乃伝さ上りとなしく嵯行幸停止なり光孝の代に
再興ありさるなり然るに行平六十九歳乃時なれハ
翁鶴不似合るやりと詠さまにるかなひの古嶋
まく老以きろといふ今日乃行幸よまて功名を賞せる
ありまやまちりさぬ後撰集第十五雑一よ其詞書に
おる一日鶴乃かく鶴衣のあかとにいけるものをぬいく

浄はきくかとまさ　さらの山は三幸なりしせりはの子代の
たゑおとこたゆりと同日のうまれ猶撫徳にさの三閑よく
さるゝすまま花跡入るゝ物を釈もる時世間のこのを引出
せし俗句義理がゆすしさう換てし思案のうし流統あり
たされさび人なとがめそうりを祇ゑふざうりとそ川も多くなり
おこまなさひちてたさるゝまた花出てかくハ花の化れそう
ゐうとなんまへし紗平今日乃出生とまうくもうを云
里今日を一代一度乃無通の紗幸なまる満足しく
ゆ櫓よ出生と人なとがめそくふざうりこそゐうくひとゑとを
無くまゝと云したされさびる宗の字こ寂の字とも寂
鶴毛とまうり
たほや宗の法てし来わりかまゝくりそのゝよみひと思ひゝれ

とおうゝぬ人なと党くたひまりとや
法門の法んにより来るゝし紗平さまぎ男六十にわまり七
十よ及ふゝまでもあま花は法門又十七果弁母くおもしまた
もゝふるうとそゝ川も多くなりといふるを不吉よ思
あり扨男乃ゝの無惨をよむひととい向の氣よわまくんこ
となれて武士無るまりは山ん法のひ男まずよわるまく思ふ
無しくと法統なる色淡酒よはし方を滋藝まゝふを精
とそ吟じゝくは門は氣ゑな紙つまさう滋素あき乃
するれとは物徳の中よ記さしはるす太不ゝて級之都の
ま無波法禄閣は披母も出幾らまを
むしく見ちゝくみて　おとこ女ちるんくり男教へいうんとゝふ
は世くとうなしうくむさるゝちかむまをまくうよせんまくたさの

ぬて文字ニしまよと云所すくなくさけのまませてくるゝ故に
おこされぬるく男をやくよりをかへす又ハ文字に所べの事られたるなり
古今よる枕の名乃歌よ蜻蛉乃方よ小野の小町か方や
作物語乃名字し又ハ伊勢物語奥列乃名也と天福本
みるにたとへのゝこゝや二條とある業平よ為せたもの火をみ
よまつく有くようをうるしかなとなるもおこさののそ藤乃
字さるべき也火をとも由ある藤乃字をも云なり
まうしたとこまて海よ見ちの人よまへく海どひいつよくり京よ
なきみ人よいひ在る
渡るもりかんゆるあしまの名海ひさし久しくあらぬ恋よあひみぐ
序の方なり久しく我ぬ恋よあひみんくとはんとよく上句と
もいひまさ元浪路をゝへて続る枝よこそ縁もあり名海ひ

まーかるの長見新撰抄などにはさ母くかるの仮主と云んと
いさ浦くとこそたはとたる名海ひさしきも名海よ見ゆる
と云春しとすひさし梅ひさしあるとぶよおもし立君かくの
野辺業平乃物語よ来りて新古今二つその所在よ冬菊
と云る題すくよめるか方は枕詞となす方よとまり
うぬ南の海乃名海ひさし久しくおもふ秋乃白菊は方も海
の家れんちし又ハ題の座の文字落題よ我なり又枕詞の
名海ひさしとも海ひさ兄とおもふるなおかるさてまつ所よより
てとまふなけ方よとる人ここと恋よ恨ひ見くもあひこねと
云しと嫁なるも御説よそる女子にいさごのこびりきさるひ
さーのことく昨乃を涙ひさしとなるも
待ちえこゝ名く我よくりとあんいひ在りなる

業平乃君の上何ゆゑをかくまであしさまにいひさだめんやとぞ思
倫ことに伝し肖像(なりかたち)文などのことはなくなるべし高上ね
怨世(おそる)に紙筆(しひつ)も数(すて)兄は伝へ流(なか)し謹(つつしみ)て平安(へいあん)の人なり
むかしみしたる見るよしにかしこまりひろめ
文徳(もんとく)天皇(てんわう)天安元年ゆき平といふ人を国史(こくし)実録(じつろく)
にも見えたるを新古今にも此詞のかくは行平ゆきひらにも
しかとのさまさだいはすまの浦門弟ゆき平とも見えても
国史(こくし)にはさることもなしやとぞ
家見えても久しく絶ぬるをこれさしの姫松(あね)いく代へぬらん
古今集第十七に見る人ありし乃ちの文徳天皇の御製(ぎよせい)
と云不(もんとく)閑業平の方なりとて見しこの人なり
姫松(ひめまつ)いせ(?)の小松といふとも多くこの松なくひめ小松

しいく世紙かくてわかるらんとぞ云し
お乃ん神宮(じんぐう)さやうに志るひく
きざやうハ現形(げんぎやう)すや神社乃わかきまゝなれなら松尾
吉乃大明神とやなむかしいざれさの見ことはくしきる
橘(たちばな)のわかきさかえふかく此殿(ここでん)しかひしかしかば住吉
くうひかしきれ給へ家神六たしらかのしくるら申
まそこ川まさ給三中はわさつきこうも浅まさ河に松や
神為給くしの志かの縁の松とや申(やう)り入そこ給おかけ
はくおうしはくおとや八住吉乃明神とわかきまぬ給へ
里ご波神功皇后(じんぐうくわうごう)三韓(かん)をうちまふ時住吉乃三神現れ
乃や後(ご)神とわかきれ給ひてまつりひろく志られ志きの実
と志らるへ海鈔(きてう)乃明け摂津国住吉の里にます文(みや)の名をはく

あらくいふのやさしきかりそれよりぞ神功皇后をおさめ
くにのをさめよろしくすることしはこれとやむかしよりは
よろしくちの国豊浦乃むかしすることしは御しまなる三坐掛
津の国乃をことにしるさの御座のよし延喜式神名帳にも載
まつりしきござやうハ此比擬現形之此方を神憲あつるよしに
てらし当社をてい御社の方乃左別つまりけるなりて
むかしよりしるしてあらはれこの化乃冬しおこなはせらいろひそめてさ
新古今和歌集十九神祇部の方に入られし此方の古歌に住吉
神須に住吉に行幸の時なほ神さざやうしまひてと
よろせり撰集に此神須を乃載られるす名誉とこそいふべし
さるを哀に八文徳天皇二大安元年行幸とし山も国史
さ実録母も見えてを新古今まさに此神須にてのせられたる

いはまえ乃住吉の行幸ときえ見えてさというふはこれるのなり
みな国史にはもうし落まちのややみそしそえなるはなかりしを
やとなんかなるよりは志らの所にときにたしえ見れば久安と
いふん松相まだ八ひさしまをせられる当社当遊乃ちのかなりし
人丸ととめられ神乃山乃のうち紀のひさし安代ら見えひてめでたくな
すらんはなしひさしくなをもせまくまつらんも知らしまり
あんといふ事ありそしも
業平乃母のかへのくくなを住吉をもせよとし松の紙と
をあるなんをあしかりさんとしいふを業平の詞によれは
方にといふ事かはけの遊乃何ら見むらの男どもいふにより
なくひさしくぞをもせくまたるこんどうしきまりさん
とおもひいてそせらく能やの行へあまりやもりしおもふことという

明石乃浦ちかくの名所なり
むかしより家あまたの女歌よみ達ハあまたあへぬる歌のうちにきこえたり
古今和歌集に小町をはじめとして女のうたあまたありといふべし女よみ人と云
るは後撰集にもあまた見えたりとてよろこびしといへども見えハ歌よりの
かくあればむかしめでたくいふ女の人へ云ひたるなればひかるものあはれ
にぞ歌にハ海とちかきしくはやうこその事のありさまのあはれへあり
けるくあるものあはれハ和歌をよくよみえぬ心をはかりしく今ま
いかさまと云ふもあまりかしこきことなり
むかし女乃わざなればおとこのうたのあはれとくおもひさまざま物語せしそへ
かくしてぞ今ぞはじめて書ぬれなど心をこめて用をはかりかねしそのを
わざハ歌に物語のくさぐさ記しとすべし古今すべくハわざとも
おもくもむかしいふ歌をも歌のよわからなさきさきなどもしおもひ

古今集を記わざあり歌ありこれにはわざと用ひ文字之をしもの々
よ形見とそれぞれの大姫の蘇乃序に小野小町そのこひ
を恐しは女を記とも見えし昔ハ女の鑑中よりいはれたる
しやといひとかく詳しく述べけれど頭書をもって女のわざなりと
あまこれもみだりてよむべき事ならや
むかしおとこ女乃あひしるへあひなどは梅もあり女の人なき書に見え
のひとをそれぞれのつくらなきとのやうかねとも
世人も女乃媒男のよりおもひぬると思ひ人よりあひ
ようといふ歌をやはり業平のはじめなり
あるは恋のさまのやつれそくせなん泣き出し人乃古へ人のかはん
指書集并九よ入たりいにしへのをよくまのおりうちや
世なんとある見え乃事人のあはれてもあそばハ不忘滝

家にはたえまなく見ゆまでと人のきたるかぎりとなりされ
たま人の数もまさんといへり
むかしはことむめはかりより世にぬきて人の花のめでたきを見るく
うくひすの花とぬひてかざしになりめづる人もおほくなりさん
紫(さいだら)るぎよりもまさる柳(やぎ)とうくるにはうくひすのぬひて
かざしてむめのえだにかさとゆるとらくあるむめはかり
まさ出るを見るくうくひすの花をぬひてかさにこそよ
めりむ紅白より梅鶯談の花の清義乃花なり
かへし
うくひすの花をぬひてかさにいふ思ひをはいかよりさくさん
常乃花をぬひてかさは春のまゝにありその花さ乃志なん
深さを川きく行たれさわくたまはんさしと鉄ぜんと

是ぞ云るきとこるにはぬるめりになくおほえるぞそれなり
対(たい)しくかりく返さんとするあり思ひはおもとまて付さり
折りひをはきよそれまくかさとへ来てといふなるき
海雑夜にまてふるねとぬるに家紬のうるに思ひはかへるぬやに
そ是も思ひを出ぬしくもあり　ありうるぬ人魚さ世ろ
ぬまさるぬるそ折りひはあへさといさるちにはなん
すうしおとこちさまつろすかや出れにな人は
然らぬくろすおやまつろ豊物(せいやく)をちへさるなり
山しろ乃ぬるをのむそのまゝむきをひとのことひをさるに世世ら
一義に八料をを天は乃塩地(えんち)田白とはすいくおくるは新
造(ざう)おいく山崎とうへ大しく山をむと覧見ゆり家一致(ご)の
後すると家とも思ひ出さるてしもへまくみくて殊にきし

てうんきんといふ事は猿子あつく見る事と定家は新勅撰にみゆる
るすかし左程の事をも思ひ出てまた歌にや大和物語
にむかしをとこなりける人井のもとにあそひけるをとこは
大和の国に下りてまたなかりしを女はこのことをおもひ
人の歌よみ女をまもりて人に出あはせて人をみるにも
なきよしを思ひてかくいひやりけるにはこゝろをとめて
てうは児のかほのいとをかしきなりけれは男はよひくに
くまなくしのひきてとひけれは女はいとおしくおもひて
これはいとかしこきなとにてゆめのことしとて
ふたりのこゝろのうちへ女のゆきかよひけるを
あるとき男かたちを見てかくとはいひやりけれと
らせたりけるを筒井のところに帯をときてゆきける

里ある所にひさしくゆかてありけれは男のこゝろ六七
ありける男女ありけるに人の事はゆかすよ
なりけれは男のこゝろをとゝめむとて思ひなけかる男
の心をしりてかくいひけるを七八年ありける大和の
くにゝ行き大和へいくとて井手の玉水といふ
所をすくる時井手なるをんなのもとにゆきてむすひける女のある
といふ歌

といひやれといらへもせす
むかし男ありけり深草にすみける女をやうやうあきかたにや
おもひけんかゝる歌をよみけり
年をへてすみこし里を出ていなはいとゝ深草野とやなりなん
古今集第十八業平朝臣とあり深草の山里にすみ侍りて京へまうてくとて

見あし一葉を出しくいあまりてもろくさ勝ともわかちかたくさて
ての後乃如のうちを思へあまりそれとし待勝なりき
わまかたる秋乃夜をして哀をまちまちく清きまん家乃みとく耗
ちんかかなし
昨とあくへるへりと数く鳴さんもまなくせや心きへさらん
古今集千八かよみ人志らず乃言ありて昨とやまりけんとを云ま
蒼くのあきらは鶴と数くなくへしうかくそめまのもまうか。
ぬるかまくもわらしとあり鴇乃字をよ見んなりまうる只継物
乃ことまり鵜る素魂紀為遊卉く飛入未央と云
あとし又さし只昨への秋風男女みくかつる鳴まり添
前の里とまあり後旅の言を後恵が旅風さくわり
て歩るく男女へむとへわなと雛あり〜後旅の女

くえを風乃男女めしむとうへ見えて曲あり鶉と数くの
言を男女にして添く見かやきまさるとも面白きさまし
とまあらるよあそてゆえんと杵ふんかすく旅まかり
むかし中にこの家乃名るみをも見ふ家杵り出めるまある
須るをもちひまうや古流よ多くの縁を云旅るまん云
乃大るかまと云忠杵遠なり流出詞出まいる恥うる可ぞれ
まひくる杵めにまちれをいう男女しく志る今さとや一切乃
多数若はわくさまつかわしもきぬるのなり葉草の核
生まるる問と云をを云へうる独うを後よ杵しもちひく
須る可をもちひくるすとい画乃之推骨と云へき説伯奇経
孫乃氣くひ千杵が玉淵あがるる乃數くうき屋年を付ま
し來と云流なりき

是ふしいにしへそぞろによ庵に会て赤とひとしおハしかれバ
此和くこの義理をも打捨てらるゝ進退くだされしかる
乃義理をもりよ志あつてハおやゆるハやすまじ笑ふとも
法統なり聴くかの世の無言にく　打ふしと不図向ひとの分ある
らんかひ家をも今に月でさや久しくとりあらふを此方
あるまじくなめり

其しかも又見ひさひらきぬる事く打捨し久しく進ハ
法みよ物なとも通く定りしときの本ふかくハ思もさりけ
所あまくさつ法打をもさりしと云縁る大さにさる
し思さの事ふしハおもむきさりしと見るべし是則
一切衆生乃輪世をくわるゝすとも志まゝともよ浮よ
あらずもなるぬなるひかるゝ大和物語よる中ねふ此方

さればくわん椴果よろしくありけ此物紙に葉草の始
絹をわぐみある元服乃節より襁褓乃よやすくみしく
ありくめ縁り来ありう紀そのゝや法統よ法ぞよ
紀にともとある所ぞある所まくることその縁さと
義によハ会得くりあくも孝行なとの御進うれくよる
名家よりめ遊来る法講釈のよし法物語なりと葉草元
元慶四年五月廿八日辛丑十六葉三代実録に見えたるを
元慶四年より文禄五年迄七百十六年先年月の
見紛さ毎在るの無きとなく打ものへし

天福本之奥書曰
業平朝臣　三品弾正尹阿保親王五男　平城天皇孫子
母伊登内親王桓武帝八皇女　母藤南子従三位乙叡女
年月日任右近将監　承和十四年正月補蔵人　嘉祥二
年正月七日従五位下　貞観四年正月七日従五位上　五
年二月十日左兵衛権佐　六年三月八日左近少将　七年
二月九日右馬頭　十一年正月七日正五位下　十五年正月
七日従四位下　元慶元年正月十五日右近権中将　十一月
廿一日従四位上　二年正月十一日相模権守　三年十月蔵
人頭　四年正月十一日美濃権守　同廿日八卒
親王　平城帝三　母正五位下蕃良藤継女
承和九年十月薨　贈一品

行平卿

天長三年 阿保親王ノ一男

仲平 行平 守平 業平 賜ニ姓ヲ

在原ノ朝臣 承和七年正月ニ為ル蔵人ニ 十二月辞退 同月従五下 廿

四 十二月二日侍従 十三年正月従五上 任ニ左兵衛ノ佐ニ 五月右近

少将 仁寿三年正月従四位下 斉衡二年正月四位 因幡ノ守ニ

兵部ノ大輔 天安二年二月中務ノ大輔 四月左馬ノ頭 三年

正月播磨ノ守 貞観二年六月内匠ノ頭 八月廿六日左京ノ

大夫 四年正月信濃ノ守 同月従四上 五年二月大蔵ノ大輔

六年正月十六日備前ノ権ノ守 三月八日兼ニ左兵衛ノ督ニ 八年

正月正四位下 十年五月兼ニ備中ノ守ニ 貞観十二年二月十

三日参議 五十三廿六日左兵衛ノ督 十四年八月廿一日為ル

人 以十五年従三位 大宰ノ権ノ帥 元慶元年治部ノ卿 十月十四

日別當 六年正月中納言 六十五 八年正三位 民部ノ卿 仁和

元年按察 同三年四月十三日致仕 寛平五年ニ薨

紀有常

承和十一年正月十一日右兵衛ノ大尉 嘉祥三年四月二日左

近ノ将監 四月為ル蔵人 五月十七日兼近江ノ大掾 仁寿元年七月

廿六日兼左馬ノ助 十一月甲子従五位下 二年二月廿八日

兼但馬ノ介 三年正月十六日右兵衛ノ佐 四年正月十六

日兼讃岐ノ介 轉ス左兵衛ニ 斉衡二年正月従五位上 同十

五日左近ノ少将 天安元年九月廿七日兼少納言 二年二月

五日兼肥後ノ権ノ守 貞観七年三月九日任ニ刑部ノ権ノ大輔ニ 九

年二月十一日任ニ下野ノ権ノ守ニ 十五年正月七日正五位下 十

七年二月十七日任ニ雅楽ノ頭ニ 十八年正月廿日従四位下 十九

年正月廿三日卒年六十三
二条后中納言左衛門督贈太政大臣長良女
母紀伊守総継女
貞観元年十一月廿日従五位下　又五節舞妓同八年十
二月女御宣旨九年正月八日正五位下十年十二月廿六
日生第一皇子廿七帝御年十九
十一年二月立為皇太子十三年正月八日従二位元慶
元年正月三日即位日立為中宮夫人　六年正月七日
為皇太后宮寛平八年九月廿一日停后位延喜十年
十二月薨六十九天慶六年五月追復后位
河原左大臣融　嵯峨第十二源氏
承和五年十一月廿七日正四位下元服日六年壬正月乙酉
侍従八年正月相模守九年九月乙亥近江守十五年二
月右近中将兼美作守嘉祥三年正月七日従二位五月
左衛門督仁寿四年八月兼伊勢守斉衡三年九月任参
議左衛門督伊勢守如元

かぞへ知く
萬葉集第十八
郭公こゝよなきわたれともしひを
つくよになそへそのかげも見ん

六帖ニ

いたえんよぬくかすし夷簟州乃
よしゑやしまてともふ人のかれし

宋玉神女賦

素質幹之醲実兮志解泰而體閑

曹子建洛神賦

瓌姿艶逸　儀静體閑

こゝろひ　かやのかわもとの一絹
まんまやひとをまつらにさそふともいはねとおもひかけるみぬ

天福二年正月廿日己未申刻凌桑門之盲目連日風
雪之中遂此書写為授鍾愛之孫女也
同廿二日校了
世間流布之本奥書ノ端裁之仍無之奥書之次云
三代実録云元慶四年五月廿八日辛巳従四位上
右近衛権中将兼美濃権守在原朝臣業平卒業平者
故四品阿保親王第五子正三位中納言行平之弟也
阿保親王桓武天皇女伊豆内親王生業平天長三
年親王上表曰無品高岳親王之男女先停王号賜朝
臣姓臣之子息未預改姓既為昆弟之子寧異歯列之
差於是詔仲平行平守平等賜姓在原朝臣業平体
皃閑麗放縦不拘略無才学善作和歌貞観四年三月

授従五位上ニ。天年二月拝ス左馬ノ佐ニ。敕シテ年ヲ遷ス左近ノ権少将ニ。
尋テ遷ル右馬ノ頭ニ。累加テ至ル従四位下ニ。元慶元年遷テ為ル右近ノ権
中将ト。明年兼ヌ相模ノ権守ヲ。後遷兼ヌ美濃ノ権守ヲ。卒スル時年五
十六

光仁天皇第一皇子
● 桓武天皇

平城天皇 奈良帝
阿保親王 第三親王 弾正尹 贈一品
大江音人
在原行平
在原守平
在原業平
在原仲平
棟梁 右少将従四上
元方 為高階茂範子
師尚 母斎宮恬子 子孫見被流 高階峯緒為子
滋春

嵯峨天皇
淳和天皇 西院帝
崇子内親王 仁明
仁明天皇 深草帝
文徳天皇 田邑帝
光孝天皇 小松帝 母沢子
人康親王 第四 山科宮入道 法名 ...
清和天皇 第四 水尾帝
惟喬親王 号小野宮 母紀静子名虎女
恬子内親王 文徳第六 斎宮 母同惟喬 貞観三年 廿五 下定
陽成天皇 貞観十一二立太子二歳
貞数親王 第七 母行平女

賀陽親王 弟七

源定 弟十六 正三 右近大将 左兵衛督
至 従四上
挙 兵部大輔
頌 右兵衛佐 従五上

源融 弟二十 大納言 私弟十二 正説也

仲野親王 女弟十二三
天皇母班子之姪為兄

真夏 従三
日野元祖 三木 刑部卿
右大臣冬嗣之兄 内麿一男

濱成 従五下 民部少輔
家宗 三木 左大弁
弘蔭 相模守 従五上 母山蔭江女
繼蔭 大和守 従五下 母同
女子 伊勢

●家守 式部卿 手足
愛 左兵衛督
麿 三木
縄 三木 兵部卿
継
吉野 中納言
良近 従四下 尾張権守
有用 従五下 兵部卿
女子 清和天皇女御 識子内親王母
伊経 皇后宮亮

●伊尹 従遍云
義孝 従四位
行成 三木 大納言
行経 三木
伊房 大宰帥 中納言
定実 左京大夫
定信 文内大輔
伊行 夜鶴抄作者 大内権大輔
女子 建礼門院右京大夫
世号手来蹟
三蹟之内権蹟
一切経書写之人

内麿 後長岡 贈太政大臣
真夏
冬嗣 太政大臣 閑院 贈太政大臣
日野家祖

順子 兼和十三正七 女御 淳和 三木 三四七中宮 仁寿四四十六 皇太后 貞観三三廿九 入道
明子 天安二十廿五中宮 清和即位日 貞観六正七 皇太后 元慶六正七 為太皇太后 天皇元服 昌泰三正廿三 崩
高子 貞観十九 国二廿七中 寛平八九廿二 廃后 天慶六年五月追復后位
温子 寛平九七廿六中宮 昌泰二七廿三 皇太后 延喜七六八 崩 号東三条

長良 贈太政大臣 本中納言 左衛門督
国経 頭大納言 正二 按察
基経 昭宣公 堀川太政大臣
時平 本院
仲平 枇杷左大臣
実頼 小野宮
女子 皇太后 従三位 二条后
良房 号白川太政大臣 忠仁公 又号染殿太政大臣
基経 太皇太后 又号染殿 清和母后
忠平 貞信公
師輔
女子 温子 宇多后 伊勢備此子
多賀幾子 母紀伊守総継女 昭宣公
女子 仁明后 文徳母 順子
良相 号西三条 右大臣
常行 大納言 右大将 正二
女子 昌泰三正朔薨 七十三才 号七条后
多賀幾子 文徳女御 貞観十三九廿八崩 葬安祥寺

此物語乃教は年来わたくしおびく蘊奥の心を極めて守らく
書流なるに此法ハ八条家尊朝流をまいりたへさうしかれ古人の流
どゝ紙あひくらべ給ふ心に待るよしよくりともをのとしを志
さりに猶も篇也流く三光院内府乃なきを志るよし志まくも
しまた世にし広くは尊朝只もて世よりも申さらしと
出く待るに有りての妻合にあて外祖又環翠軒宗尤
逍遥院へ継聞せしを推清教ともれ待るし即ち手紙
とさく系統不足とまさしまへうとあへうしく六悪なる
んとかく乃にこうはひきあわせてもちし此書待る我し
講義恵雲院殿大覚寺准后義演聖護院准后道興
互ひ家書紹巴などれつれくらき給へもれまへしし動
もしく愚見肖柏の流称をあてる世の流乃流は源氏の

合多本不用雅也可依流本近代以守使為規之本
於末代之人令業也文不可用之
此一流古人之流不同也権在中物之自紀非権様耳之
筆非能彼此之書流可写上古之人強不可似之
非判只要貌詞飛文字而已

壽
之

皆用捨せしむ論語ニ多聞闕疑慎言其餘則寡悔といへりよく〳〵闕疑をもて此抄出乃心あまの釣ぶねやまとことの葉ふべきとの手向文禄五年仲春十五日に是をおはふるものなり

法印玄旨 在判

此闕疑抄者細川幽斎老翁新作之所也自然見奥書之時得凡下不許可一字深秘函底莫出窓外耳

慶長第二孟冬十五日

也足叟素然 在判

寛永十九壬午歳孟春吉辰 二條通觀音町

風月宗智刊行

新板